
とあるチートを持って！

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるチートを持つて！

【Nコード】

N1936Z

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

この物語は二次に良く見られる噛ませ犬として出される性格の悪いオリ主が主人公であり、そんな主人公が改心したけれど前の評判が評判なだけに肩身の狭い思いをしたり、勘違いされたり of 物語です。

チート成分は低め。

いまいちイメージがわかないって人はとりあえず読んで見ると良いと思うよ！

作者が現実逃避としてバカな作品を書きたいと思ったがゆえの投稿です。ゆえにギャグテイスト。シリアスは・・・まああるけど少ないです。

そして更新速度に過度な期待はしないでください。

ぶろろーぐ（前書き）

始めに言っておきます。

感想などではオブラートに包んでね。

作者は非常に打たれ弱いのです。

ぶろろーぐは三ページ分くらい。

噛ませ犬的勘違い系主人公のアホさ具合をお楽しみください。

まあそんなに量があるわけでもないですけども。

プロローグが終わると勘違いから改心します。

それとおそらく下ネタはあまり無いと思います。今回がピークってくらいかも。

今のところヒロインはいつそのことフェイトの母のプレシアにしてしまおうかとも思っていたりして。

レベル高すぎるかな？

そしてご都合主義は出来るだけ省きたいとは思ってます。期待はしないで欲しいですが。

ぶろろーぐ

おっばい。

ある人は言った。

それは神秘のベールに包まれた神々の宝玉だと。

ある人は言った。

そこに全てを置いてきた。探し出せ、その秘宝を、と。

ある人は言った。

女体最高！！と。

ある人は言った。

胸とは。胸ではなくおっばいである、と。

ある人は言った。

おっばいを求めずして何を求める？

富か？名誉か？

否！！

男として生まれたからには至高のおっばいを求めずして何とする。
と。

ある人は言った。

おっばいに何が詰まってるかだって？

HAHAHAHA！何を今更なことを。

・・・ふっ。

浪漫が詰まってるのさ。

ある人は言った。

いや、胸に詰まってるのは脂肪だろ？と。

ある人は言った。

そついう夢の無い奴は腸を^{はらわた}ぶちまけて死ね、と。

ある人は言った。

人体の神秘。言い換えるならそれだね。と。

ある人は言った。

あの曲線美。柔らかさ。重量感。すべてにおいてマーベラス、と。

ある人は言った。

芸術はおっぱいだ！と。

ある人は言った。

小さなおっぱいも大きなおっぱいも等しく皆おっぱい。全てのおっぱいを私は愛そう、と。

『本当にそれで良いの？』

「ええ、もちろん。」

『男神じゃない女神の私には分からないけど・・・そんなので良いの？』

「はい。」

『・・・ま、まあ頑張つてね？』

「ありがとうございます。俺、良い嫁さんを探します。」

『別にそんな決意を私に聞かされてもドウ答えれば良いか・・・』

「暗に貴方に嫁になつてくれないかな？と。」

『H A H A H A、無理。貴方みたいな変態、好みじゃないから。』

「し、失敬なっ！！」

揉むにしても決して無理やりには・・・」

『・・・はあ。とつと行って頂戴。気持ち悪いもの。貴方。』

「ふふふふ。これで俺のオリ主ハーレムが・・・ぐふふふ。」

『本当に気持ち悪い。・・・じゃあね。』

「はい、本当にありがとうございました。」

こうして1人の男。

オリ主でイケメンな彼が異世界でハーレムを作るべく頑張ってみる物語が始まる。

はつきり言おう。

彼のその夢はかなわないだろう。
なぜならば。

『・・・勘違い系オリ主つてところかしら。

あんなの好きになる子が居たら・・・不憫すぎるわ。』

この物語は勘違い系の彼が主人公の物語である。

最近の二次創作には転生オリ主の他にままオリジナル主人公が出てくるが、その中でもヒロインに纏わり付く嫌われ者の勘違い系の噛ませ犬オリ主。

この物語は、その噛ませ犬側の彼から見た物語である。

果たして彼はまともな主人公となりえることが出来るのか？
気味悪がられずにヒロインに近づくことが出来るのか？

さてはて皆様。

「魔法少女リリカルなのは」の世界によっこそ。

ぶろろーぐ2

とある時刻、とある家庭にて。

ハイハイをする子供が居た。

もとい物語の主人公、相馬^{そつま}響^{ひびき}である。

見た目は銀髪にオッドアイ。

彼の前世の生涯が閉じたのは中学2年。

まさしく厨二病に疾患してピークに当たる時期である。

そんな頃合に死んでしまった彼がそんな見た目になるのは当然のこととで、厨二病を脱する頃合。もとい7歳になる頃にはきつと自分の容姿に悶絶するだろう。「なぜあの時に、こんな奇抜な見た目を選択してしまったのだ!」と。

多分。きっと。おそらく。

してくれると良いな。

現在の彼は早速発情していた。

「……ふふふ。俺の母親がよもやこんなに美人だとは……近

親相——げふんげふん。も、悪くは無い。

何、俺のイケメンを持つてすれば……」

ドンビキである。

生まれて数年で母親とのチヨメチヨメを考える人間。

あまりの非常識ぶりに本当に貴様、日本人か?と問いたくもなるのだが、自然界では親と子の交配は至極当然のようにあるし、血統的にも問題は無い。

別に良いのでは?という気もしてきたのは、あまりの思考回路ゆえに彼を人間としてではなくその辺の獣と同列視してしまっている

いうことなのだろう。一応反省しておこう。
あれでも彼は人間なのだ。
それはさておき。

「あら？おっぱいが欲しいのかしら？」

母親である相馬 文香ふみかに遠慮なくむしゃぶりつくところを見て戦慄
しつつも思うのは、目が血走りすぎで怖いと言うことである。
目が血走りながら乳房をしごきつつ吸い付く赤子。
下手なホラーよりも怖い。

「・・・うますぎるっ！！」

と吼えながらも母親の乳房にがつつく響。

全国の赤子や君のような子供を産んでしまった文香に謝ってあげた
いほどにその姿は醜かったと言っておく。

これを見ても自然な笑みを絶やさないと母は母親は偉大である。

否、文香が偉大なのだろう。絶対。確実に。それしかない。
きっとそう思う。

そもそも彼の毛の色や目の色的にこれを我が子として愛せる彼女は
まさに聖母と言えよう。

「・・・くっ・・・いかん、もはや眠くなってきた。」

今更であるが彼の言葉は全て「あー」とか「うー」とかである。赤
ん坊なのだから当然のこと。

それを意識してお茶の間に届けているこの作業。
早くも苦痛と化してきたのだから気が滅入る。

そして彼はそのまま寝た。

寝る子はすくすく育つと言うがこのまま眠るように死んでくれたほうが世のため人のため。

何よりも罪の無い母親が救われるような気がする。

「ふふふ・・・凄い旺盛な食欲ね。」

ちゃんと食べたのを見て安心したのか文香は満面の笑みを浮かべた。母親としては至極真つ当なセリフなのだが、それが向けられた相手が彼となると複雑な気分である。

・・・ここに、ここに聖母がおるきん。眩し過ぎて目が開けられないんじゃない・・・

せめて彼女の元で彼が真つ当な道を歩めるよう、祈るしかるまい。

余談ではあるが母子家庭で父親は蒸発済み。

あまり良い人ではなかったそう。

ぶろろーぐ2（後書き）

全体的にブローグは短いです。

なぜかあまりネタが思い浮かばないもので・・・先のほう先のほう
はガンガン思いついているのですが。

よって、ちゃっちゃんと進めることにしました。

ぶろろーぐ3（前書き）

これにてブローグは終了。

ぶるるーぐ3

子が育つのは早いと言うが、それを証明するがごとく、あつという間に9歳となった響が居た。

彼が通うこの小学校にはヒロイン候補がいる。

言わずもがな、高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスである。

もちろんのこと彼は煙たがられた。

なぜかと言えば単純明快。

変態でキモイからだ。

さらに言えば残念ながら厨二病は治らなかった。

「やあ、アリサ、すずか、なのは。」

「お、おはよう・・・」

「・・・響君・・・おはよう。」

「いい加減殺したくなってきたわ。」

にこやかな響の挨拶になのは、すずか、アリサはげんなりとして応える。

いや、アリサは応えてなかった。いや、これはきつとアリサ流の返答なのだろう。

いいぞ、もつとやれ!!

大丈夫。ちよつとただだから。ちよつと殺すだけだから。

今なら一万円上げるから。ね、ちよつとそこの人気の無いところに連れてってさ。

こっ、サクつとね？

「今日も可愛いね。」

「あ、ありがとう。」

「そ、そうでもないよ」

「・・・そんなことどうでもいいからとっとどっか行ってくれない？」

なぜここまで彼が嫌われているかと言うとそれは彼の目線の目線である。

簡潔に言うところ。

人間というのは鈍く見えても意外と敏感で、たとえば目の前で起こっているように相手が下心を持って近づいてくればもちろんのと分かる。

視線で、もろバレなのだ。

じろじろと撫で回すような視線。

変態じゃない彼女達にとつてそれは酷く不快感を与えるものだった。そうした下心を隠せる巧妙な男もいるが、こちらほど性質が悪くないのが唯一の救いである。

「ていうか、あんたどうしていつも私たちのところに来るのよ。毎回言ってるでしょ！寄ってくるなって！！」

「ふっ、野に咲く可憐な花を見に来てしまうのは、美しき蝶の宿命さ。」

「はあ？」

「ふくっ・・・くくく・・・美しき蝶ね？」

宿命とか・・・ふはっ！！

失礼。つい失笑してしまったのだが、次の問題がコレである。

これまた簡潔に言うならば意味が分からないことを言っているということだ。

思い出して欲しい。

彼女達は9歳児である。

そんな気障な話をされたところで彼女達の脳内では「野に咲く花に蝶が寄ってくるのは当然のことだよ」というそのままの字面で受けとっている。
すなわち。

「この話の流れでいきなり蝶の話されても意味が分からないんだけど？」

「おや？わからなかったのかい？」

ふふふ、初心な子羊ちゃん達だ。」

「ああ？」

アンタバカにしてんの？」

「あ、いや、そうではなくてだ。これは野に咲く可憐な花を君たちに例えてーーぶるはっ!？」

「あ、アリサちゃん。さすがに殴るのは・・・」

「いいからいいから、ほら、とつと行きましょ。」

「ぐふっ・・・ツンデレか。現実のツンデレとはかくもシンドイものなのだな。」

こうして彼の勘違いは増えていくのだった。

というか、もっとやってくれないだろうか？

もっと熱くなれよ!!

どうしてそこで去っちゃうんだ!!

あとちょっとで殺せるんだぞ!!

もっともっとと熱くなれよ!!

あ、良い忘れたが彼の口調にも問題はある。

何よりも致命的なのが彼のその勘違いスキルにあった。

彼が煙たがられているにも関わらず接触を持つとするのは、別に嫌われていることに興奮する性質を持っているわけではなく。

ただたんに恥ずかしがっている、素直になれていないだけと考えているからである。

すなわち。

嫌われているのにも関わらずしつこく空気の読めない人間がこれまたしつこく話しかけてくる。

非常に嫌な出来事と言えよう。

そして、そんな彼の行動はとある結果をもたらした。

「てめえ、いい加減にしろよ！なのは達が嫌がってるだろっ！？」

「何を言う？」

君こそ彼女たちを開放したまえ。きっと君が脅しているのだろ？」

「はあ、はあああっ！？」

そう、新たな転生者による苦情である。

彼は原作非介入派であまり下心を持たず、なんやかんやでなのは達に気に入られた転生オリス。

なのは達に日々無自覚な嫌がらせをしつづける響に対して文句を言いに來たのだ。

なのは達がなんだかんで響を退け切れないのは彼が生理的に嫌いでも悪人では無いということに起因する。

相手に悪気が無く、なんだかんで直接的で決定的な害が無いために特別お人よしな彼女たちとしては彼を退け切れることは出来なかったのだ。

そんな中立ち上がったのが、チートオリスの彼、山田君（仮称）だ。

個人情報保護法のため、この場では仮名を使っている。

彼はいたって普通の両親の元に生まれ、原作怖いとか良いつつもご都合展開によってなぜかなのは達と近しい展開になったという背景を持つ。正直此方のほうが我らがバカな主人公よりも腹ただしい気がする。

原作介入したくないとか言っておいて、どうせがつり介入するんでしょう？

フェイトの母親に「なんでフェイトを娘と見てやらないんだー！」みたいな熱血な説教するんでしょ？

どの口で原作に介入しないとか言うのか。

いや、それこそが主人公体質と呼べるものなのかもしれない。

残念ながら響にはそれが無いようである。

そしてなぜか「名前で・・・なのはって呼んで！」みたいなフラグを立てつつも現在、響にとっては程遠いチートハーレムを形成しつつある山田君。

今回の案件も彼の好感度はうなぎ登りで、響の好感度は格段に下がることとなるだろう。

山田君はきつと「かませ犬ありがてえ」などと思っているに違いない。

と言ったら彼は怒ってこういうだろう。

「ただあいつらの笑顔が曇るのが見過ごせないだけだー！」

はいはい。主人公やってますねえ。

無欲アピールとか要らないです。

「は、話が通じねえ。」

「まあ君の気持ちも分かる。」

だがね。彼女たちが迷惑してるのは歴然たる事実であってー！

「いや、だからオマエの行動が・・・」

その後、結局平行線のまま話は終わった。

そんなある日のこと。

彼の勘違いが解ける日がようやく来たのである。

発端は放課後。

彼のチートの一つにおっぱいチートと呼ばれるものがある。

彼が求めたチートで恐らく未来永劫誰も望まないであろうチートだ。そのチート内容とはおっぱいを自由自在に操ることにある。

色々語りたいのは山々であるが、それは後の機会に譲るとして、話を進める。

そう。

あろうことか彼はなのはの——幼女の胸を揉みしだいたのだった。そこに至るまでの経緯はあまりに見つともなく、しようもなく見ていられなかったので省くが年頃——とまでは行かないが女の子が胸をイキナリー——それも嫌いな男に揉まれたらどうだろうか？もちろん怒る。

下手をすれば精神的な傷。もといたラウマも与えかねない。

彼はそんな致命的かつ最低なミスを犯してしまったのである。

もちろん彼は無理やり揉むなどと言う外道ではない。

勘違い野郎ではあるものの、よくも悪くも日本人なのである。

悪人ではないし、そんなことを考えたことも無く、むしろ女性関係に関しては初心なくらいである。

齒の浮いたセリフを吐けるのも、彼女たちがまだ小さく、幼女だからであり、忘れているかもしれないが記憶を持ったまま転生した彼にとっては娘のような——歳の離れた妹のようなもの。

なんだかんだで別に欲情していたわけではない。
というか当然のことである。

しかし――いや、それがゆえに悲劇が起こった。

彼の認識ではあくまでも好かれていると思っている。

なおかつ、自分よりもはるかに年下の――もとい今はまだ子供としてしか見てない、なのは。

彼は善意で将来的に胸が大きくなるようにチートを発動させておこうと思ったのだが、それが良くなかったのである。

とても身勝手に自己中心的な善意。

すなわちありがた迷惑は無常な現実として彼の身に迫った。

大問題となったのである。

まだ二次成長も迎えてないとはいえ女の子の胸をがつり揉みしだいたことで親御さんにも伝わり、もちろん彼の母親の文香にも伝わった。

なのはなのはで号泣。

先生にも伝わったし、すずかやアリサは完全に軽蔑する眼差しをむけるようになり、彼の一切合切を無視。

なのはなのはでしばらくの休校の後、復帰。

彼を避けるようにはなったものの、なんとか立ち直ったようである。

もちろんクラスのほかの子にも伝わり、あらゆる場面へと彼の行動の結果が伝播した。

虐めを心配した文香が転校を薦め、響も転校を望んだ。
そう。

彼の勘違いは1人の女の子を泣かせてようやく解けるほどに重症だったのである。

もちろんのこと、彼は嘆いた。

泣きながらに謝った。

許してもらおうだとかそんなことは微塵も考えず、ただただ申し訳なさで一杯でひたすらに謝った。

もちろんなのは父親や他家族はそれで許せるはずも無いが、子供のやることとして許したと言うことになった。そうしたけじめを付け。

彼はなのは達が通う学校を後にした。

彼の後姿はまるで別人のようだったという。

主人公の一日（前書き）

このまま三人称でいくか、主人公視点にするか。迷い中。
その件に関して感想をいただけると嬉しいです。

主人公の一日

あれから半年の月日が流れた。

彼はと言うとそれはもう、猛省した。

『大丈夫ですって。そろそろ頑張ってみましょ？』

「そうだろうか・・・アイシテル。俺は怖い。また大きな罪をこの手で犯してしまうのを・・・」

『はい、その言い回しは厨二くさいので直しましょうね。』

「・・・俺は厨二じゃない。もう目が覚めたし。」

『厨二の人は誰もがそう言うの。』

今彼が居るのは自室。

神様から貰ったチート特典の一つ。

神様に用意してもらったデバイス“アイシテル”と話している。

二対のナイフ型デバイスであり、片方はベルカ式でカートリッジを搭載しているため、非常にゴツイ。

もう片方はすらりと長いスリムなミッド式の魔法が組み込まれたナイフである。

近接戦や身体強化に置いて優れているベルカと、小手先や技術、手数之多さに優れているミッド式。

どちらの魔法も満遍なく十二分に使えるという特殊なデバイスである。

待機状態はナイフを模ったネックレス。服の下に入れておけば一番目立たない形である。

普通のインテリジェントデバイスよりは遥かに感情豊か。

ちなみにドイツ語を喋っている。

良い機会なので彼のチートを振り返ってみた。

まず一つはその容姿。

銀髪オッドアイ。

しかし、これは現在では意味を成さなくなっている。

アイシテルによる変装魔法で一般的な黒髪黒目の人間にしているのだ。

理由は言わずもがな。

二つ目は神様印のデバイス。

アイシテルの性能は下手なロストログアよりも強力で、ジュエルシード並みの魔力貯蓄機能があったりとチートらしいチート。なのだが、どんなスーパーコンピューターも扱う人が幼児並みの知識と能力値しかないのでは宝の持ち腐れ、豚に真珠、ぬこに小判、というもの。

一度もセツトアップしたことが無い。

彼はこの世界について美少女がヒラヒラした服を纏って飛び回る。

程度の認識しか持っておらず（逆に言えば彼にとってはそれが全てであり、それで十分だった）、そもそもデバイス自体この世界のコンピューターだとは考えていない。

もちろんこの時点からして勘違いなのは言うまでも無いことである。何が言いたいかと言うと、彼はデバイスを単なる便利な魔法が使える生活を助ける道具、程度にしか考えておらず、戦いに使えるなどと微塵も灰燼も気づいていないのだ。

そしてそれを知りつつも面白そうだと言うことで放って置くアイシテル。

これまた現状では使えないチートである。

三つ目は言わずもがな我らが夢。おっぱいチートである。

よく考えて欲しい。

全てのヒロインに直面する絶対的な悲劇とはなんであろうか？

・・・引つ張る意味も大して感じられないので早々に明かしてしまうが、それは「老い」である。
どんな可愛いヒロインも時が流れれば老化し、言い方は悪いが劣化する。

いつまでも若々しい姿で。

これはほぼ全ての――容姿に自信を持つ人間であるほど必ず抱く欲求の一つではないだろうか。

もちろんアニメを見ていると言う立場であるならばなんら問題は無かったのだが、同じ世界に現実として生まれた以上はそうしたヒロインの姿も見なければならぬ。

自然の摂理とは言え、それを解決する手段があれば望んでしまうのが人の業という物だ。

耳障りは悪いがおっぱいチートはそんな夢を叶える最高のチートと言える。

劣化によって垂れるおっぱい。

垂れたおっぱいは二度と戻らないと言うのが現在の学説で、事実そうである、らしい。

巨乳キヤラであればあるほど何十年後かにお世辞にも綺麗とは言えない肢体を晒す事になる。

もう少しオブラートに包むべきなのだろうが、どんなに言い繕っても厳然たる事実であり条理である。

ゆえに目を背けるようなことはしてはならない。

二次元に置いてはそんな心配はいらなかったものの、その世界に暮らすとなれば10年、20年と先があり、魔法的な何かが無ければ等しく老いさらばえ、おじいちゃま、おばあちゃまと化する。

加齢臭もするだろうし、皺も増えていく。

背骨が曲がり、筋肉や脂肪がこそげ落ち、歩けなくなるかもしれない。

だが安心してくれ。

このおっぱいチートは微乳、ひんぬう、巨乳、爆乳、横乳における曲線美の調整や下乳において良く見えるように脂肪の配置や柔らかさを微妙に変えることによってうんぬん、あのキャラが巨乳であれば、ひんぬうであればという願望を叶えることもできる「おっぱいを操る程度の能力」ではあるがその能力にはレベル2があり、そのレベル2はまさしく神の御業とも言うべき効果を発揮する。そう、名づけるとしたならばアンチエイジングEXである。

アンチエイジングとは意識し、分かり易く簡潔に述べるならば老化防止のことを言う。

とはいえ生きていけば老化していくのは自然、老化しないのは不自然である。

防止と言うよりは抑制といった方が正しいか。

そんなアンチエイジングの効果を極限まで高め、全く別物し、上記の正しく老化“防止”を実現させたおっぱいマッサージ。それがレベル2の効果だ。

具体的なメカニズムを語るのは省略するが、とにかく凄いおっぱいマッサージで老化を防止し、どうにかしておっぱいの時を止め、しかしおっぱいはおっぱいという単体の生き物ではない「ゆるえ」に体にもその時の留まりが影響し、すなわち寿命で死ぬことは無い不老と化す能力。

畏怖されるべき異能^{レアスキル}である。

戦慄してくれても構わない。狂喜乱舞してくれても構わない。

どこぞの学園都市であるならば女性研究者によって研究され尽くすであろうこの能力。

おっぱい「いや、胸を揉めば男にも効果を発揮する正しく等しく全てのおっぱい」男の場合は胸とする「」をチートさせるこの能力。

もしばればれば比喩ナシに真面目に解剖されるに違いない。

と熱心に語りすぎたところで閑話休題。

彼は自室でアイシテルと話しながらもとある本を読んでいた。

『猿でも分かる乙女心』

そう、彼は勘違いスキルを消し去ろうと努力しているのである。
涙ぐましい努力。

その姿に拍手をせざるを得ないが、したところでなんだというのは
明白。

とりあえず拍手は自重した。

「アイシテル・・・乙女心はかくも難しいんだな。」

『それを読んで分かった気になってたら、また勘違いするよ。きつ
と。』

「・・・どうしてそういうことを言うんだ。頑張ってるんだから応援
してくれれば良いのに。」

『だって・・・せっかく間近で勘違い系主人公の滑稽な姿を楽しめる
からと神様に志願したのに。結局良い子ちゃんっぽくなってるん
だもん。私つまらない。』

デバイスは志願制らしい。

「・・・俺を怒らせると酷いぞ?」

『どうするっていうのよ?勘違い坊や。』

「納豆ごはんに混ぜ込んでやる。」

汚いと思うよ？

そして君は金属の塊を食べようと言っただろうか？

『ぶふっ！？な、なんていう鬼畜。げ、外道っ！！外道だわっ！？
私の美しいボディが納豆菌で汚れるじゃないっ！？』

「嫌だったらこれを教える。」

『ん・・・何々？

葛藤？これが何？』

「かつとぅーっって読むんだな。」

『・・・』

デバイスがアホの子を見る目で見つめた。
目、無いんですが。

「しょ、しょうがないだろっ！？

中学二年の時に死んだんだから、学があるわけじゃないんだよっ！
」

そして彼は本を読み終わるとおもむろに胡坐をかき、手を股のあたりに置く。目を瞑って身じろぎもなくなる。

瞑想である。

ちゃんとしたオリ主であれば瞑想と聞けば「体内の魔力を感じ取る訓練か！」とティンと来るものだが、彼の場合は違う。

彼女達の将来が楽しみがゆえにいついエロい視線を向けていた――もといこの色欲を抑制する訓練である。

まず彼は魔力がどうかというよりもその人格の矯正から始めた。アホである。が、切実な問題でもある。

瞑想をし、できれば悟りを開くのが目的だが、ドウ考えてもそれは無理に違いない。

彼の思考回路を除いて見る。

おっばい・・・無限のおっばい・・・

いや、待て待て。

おっばいは違う。おっばいなんていないんだ。

だがしかし、おっばいというのは如何せん俺の心をつかんで離さない。

これほどまでに拒絶してもおっばいが出てくるということはもしか俺の心に巢食うおっばいはただのおっばいじゃないんじゃないだろうか？

きつとおっばい型宇宙人などが俺の精神から侵略し、体をのつとり、俺の体のいたるところをおっばいに変えるに違いない。

それは嫌なようで嬉しいかもしれない。

そもそもおっばいチート自体、おっばいを揉むための口実がたら貰ったようなものだし、自分の体がおっばいとなりえるなら誰かのおっばいを求めて徘徊せずに済む。が、自分の体のおっばいで俺は満足できるのだろうか？

おっばい神としてーいや、おっばいの神を名乗るのはまだ早いのか。

最低限おっばいスカウターの技術を会得しなければー

というかおっばいを考えていたら肉まんが食べたくなってきた。

あの白い肌にホカホカの具。正直肉まん神。チヨコまんなるものもコンビ二に売っていた気がする。

チヨコまん。中々惹かれる。そういえば犬にチヨコを与えるといけないとか聞くが一体どうしてだろうか？

ネギもそうだったな。あ、ネギはあれか。ユリ科の植物か。

ユリ科の植物には毒が含まれてるとかなんとか。だからかな？たま

ねぎやネギは大丈夫なのだろうか？

今まで食ってたんだけど・・・いや、そもそもユリ科の植物だっけ？

非常にドウでもいい思考回路だった。

結果から言えば一年後ぐらいには彼はなんとかエロから脱する。
頑張ったね・・・うん。

「ご飯よお。」

下の階から母親の文香が晩御飯に呼ぶ声が聞こえる。

こうして彼の一日は終わる。

プレシアテストロッサ

P.T事件の始まりはすぐそこである。

巻き込まれ始めた

「なにこれ？」

歩いていたら何かに出くわした。

黒い形にネコーーいや、ぬこの目をした珍妙な生き物である。
なんか触手が生えていた。

「・・・こういう生き物もいるんだなあ。」

響はそんなことを呟く。

もちろんそんな生き物がはびこるような世界ではない。

「うおっ!？」

『ぷろてくしょんっ!』

触手が響に襲い掛かるがそれを基本魔法のプロテクションで防ぐアイシテル。

響は少し焦る。

目の前の黒い塊は何らかの生き物にジュエルシードが憑依した姿。
寄生、共生？なににせよ合体した姿だ。

合体したからといってなぜこんな形になるのかが意味不明であるが。

「こ、こんな気性の荒い生き物がこの街の近くに居たとは・・・知らなかった。」

『何言ってるの。これは生き物というより魔法生物なのよ。』
「ん？」

生物には変わらないんでしょ？」

『そうだけどそうじゃない・・・というかそれどころじゃないとい

うか。ほら、キタっ！！」

「はっ？」

つてぎゃああああああっ！？」

さらに触手を増やして攻撃を続けてくる黒い塊。

アニメであるならばただ黒いだけだが、いまやこれは現実として目の前にある。

うごめく体はどうも肉質的で結構気持ち悪い上に、そこかしこから触手が生えてそれが突き刺そうと襲いくる。そして目玉は大きいのがそのまま実写化されたもので、正直下手なホラーよりもグロイ。当然のごとく一般人気質の響は声を荒げた。

そして逃げた。

『ちよ、ちよつとっ！？』

た、戦わないのっ！？」

「あれと！？バカじゃないのっ！？」

あんな意味不明な生き物と戦うとかバカかっ！？」

『誰がバカとっ！？』

所詮私の玩具のクセに私をバカにするとは・・・ちよつと生意気じゃない？」

「誰が玩具かっ！？」

とか言い争いながら逃げる響。

そして触手に足をとられた。

「や、やばっ！？」

え、これ？どうされるの？何されるの？

食べられちゃう？頭から丸齧りですかっ！？」

『ふふふ・・・ざまあ。』

「ちよ、おまつ！！食われる前にアンタだけは壊すっ！！！」

『そんなこと出来ないでしょうに。ほら、手まで巻きつかれて。』

「うっおおおおっ!？」

しまったあああっ!!手が・・・手が引つ張られるっ!？」

『そのまま丸齧りされてね、響。』

「ちょ、えっ!？マジで助けてくれないのっ!？ていうか助けられるっ!？」

『確かに助けられる。でも嫌。』

「えっ!？だめもと言っただけなのに・・・最近のパソコンパナイね。ていうか、助けられるんならハヨう助けんかっ!？」

『ええええええ・・・気分じゃない。』

「気分で人助けとかどんな鬼畜ですか。ホントまじ助けてください。」

『ていうか、さっき助けたから良くないかな?』

『いやそんなこと言ってる場合じゃなーいやばっ?ほんとマジやばい、やばすぎる。お願い、ほんとお願い。お願いだから助けー!ぐおおおおおっ!？間近に牙が、牙が迫ってるっ!？ていうかこんな場所に口があつたのかっ!！ヒトデみたいなやつ・・・』

・とか言ってる場合じゃなくてだなっ!！

も、もう・・・ほんと限界。』

閉じようとする口に手を当ててなんとか閉じられないようにと頑張っているのだが、如何せん態勢が悪い上に腕もぶるぶるしてきた。彼の精神年齢は20台ちよつとであるが、肉体年齢はあくまでも9歳なのだ。

それでも仮にも動物のアゴの力に耐えられてるのはさりげなくアイシテルによる肉体強化の魔法があるからである。

しかし、このままでは黒い塊の糞と化してしまう。

「くそおおおおおっ!！こんなはずじゃなかったのについいいいっ!！-」

悪役が死に間際に発するようなセリフを言ってプルプル震える腕が外れそうになる。

さすがにみかねたアイシテルが助けに入ろうとするがそれよりも重大な案件が発生した。

もとい元祖主人公である高町なのはの登場である。

本来の歴史とは打って変わって、すでに变身済み。

なおかつリンカーコアを求めるこの黒い塊に襲われるのはユーノであり高町なのはであるはずだった。

そこへ通りかかったリンカーコアを持つ生物。

もとい響は丁度言い獲物であったのだ。

その戦闘時の余波をかぎつけたユーノ・スクライアがなのはに助力を請い、レイジングハートを手に取りやってきたというわけである。

「きゅ、救援かつ!？」

人の気配に振り向いた瞬間、響は固まった。

当然である。気まずさゆえにだ。

そこで響が起こした行動はもちろん。

「や、やばい・・・よりやばいぞ・・・っていつまで噛み付こうと
してんのっ!!」

邪魔だあっ!!」

目の前の黒い塊を触手に纏わりつかれながらも蹴っ飛ばし、その辺の庭の草むらに隠れることだった。

火事場のなんとやら。というやつだ。

「戦略的撤退と言うやつだな。うん。」

『逃げてばかりじゃだめだと思うよ?』

「やかましい。これは俺のためではなく、彼女のためだ。夜の街を飛行しているところ、いきなりいつぞやの変態が現れてみる。むしろ俺を見て逃げかねんだろう?」

『・・・確かにそうかもしれないけど可哀想なくらいにみじめな気遣いね。』

「・・・うるさいやい。」

『というか飛行してることに突っ込まないの?』

「え?ああ、そういえば飛んでるけど・・・すごいテクノロジーだな。オマエといい、今の地球はやたらとか科学力が高いみたい。空も飛べるのかあ・・・アイシテル、俺も飛べないの?」

『飛べるけど・・・普通に受け流すのね。』

シューティングゲーム

「死んだ時にこの世界は空を飛んで弾幕芸をする少女達がいると聞いていたからな。」

『しゅ、シューティング・・・』

「あ、それより見てみる、なんか倒したみたいだぞ。」

「いうか、今更だけどあの黒い塊って何?それと気のせいじゃなければフレットらしき動物が喋ってる気がする。」

『とりあえず帰らないの?』

「そうだな・・・すごい疲れたし、腕ふるふるしてるし今日は早く寝よう。」

『んじゃ結界抜けるね。』

「なんか良く分からんが了解だ。どうせなら空を飛んで帰りたい。」

『はいはい、ええと空を飛ぶやり方は・・・』

こうして響はリリカルでマジカルな世界に片足を突っ込むのであった。

「これ、やんなくちゃだめなの？」

『また襲われるかもよ？』

さて、俺はというと特訓することになった。

なぜかというアイシテルの話によるとまだこんな感じの出来事が起きるらしい。

じゅえるしーどとか言う厨二な名前のアイテムが街のあちらこちらに落ちたとか何とか。その結果なんちゃらかんちゃらとか。厨二過ぎて聞いていられなかった。

よく分からないが、あんな生物に襲われるのは勘弁なので少なくとも逃げられるような魔法は使いたい。

「えーっと、まずは何々？」

アイシテルセットアップと言いましょー・・・とな？」

そのためにもアイシテルの取り扱い説明書を読んでいる。

アイシテルが口で説明するのが面倒だから勝手に読めといわれて作られた冊子である。

こんなことを言えと要求してくるとは。

アイシテルだって厨二じゃないか。

「アイシテル・・・せ、せつとあゝつぶ。」

小声なのは仕方ないよね。

恥ずかしいし。

すると胸のアイシテルがぱつと光り、アイシテルから自信を守る強靱な衣服をイメージしろとかいわれた。

強靱な衣服ってなんだよ。

綿100パーセントの服じゃ駄目と言うことだろうか？
ポリエステル繊維を使えと？

『そういう意味じゃないっ！あほっ！！』

もういつそのこと鎧でいいじゃんと考えたら服が脱げた。

・・・なぜ？

意味が分らない。

上着が溶ける様に消えていき、次にズボンが溶け消え、パンツが最後にはじけ飛ぶ。

確かに魔法少女的なアニメの変身シーンでは脱げるのがセオリーだが、男の子でも変わらないのだろうか？

そして体が西洋鎧に包まれる。

俗に言うフルプレートメールで、肌の露出部分が無くなった。

そしてゴツイナイフが一本とすらりとした眺めのナイフが一本。

両手に一本づつ出現した。

「ゴツイナイフとはいえ、西洋鎧姿には合わくないか？」

『ならさらに剣もイメージして腰に差して置けば？』

「じゃあそうしよう。」

うむ、なんかそれっぽくなった。

ただ身長が足りないのになんか気持ち悪い。

『じゃあその姿のまま裏山にでも行って見ましようか。』

「裏山で練習？」

『そゆこと。』

てなわけでパツと移動して裏山。

取り扱い説明書にしたがって順々に練習していく。
とりあえず一度使ってみることを目標にさまざまな魔法をやっ
ていくと、重大なことに気づいた。

「・・・なんか攻撃系多いな。」

『そらそうでしょう、私アームドデバイスだし。』

「デバイスなの？」

『いや・・・だから・・・まあいいか。』

とにかくさつとやってみたわけだし、模擬戦といこうか。』

「模擬戦？」

いや、別に戦う必要は・・・」

『あまあああああああいつ！！！！』

「おおっ！！？」

『もし誰か惚れた女の子が出てきたらどうするのっ！！？』

オマエだけは俺が守ってやる！的なセリフを言ってみたくは無いの
っ！！？』

「・・・た、確かに。むしろ積極的に言いまくりたい。」

「でしよっ！！！」

やばい、かつこいいんじゃないだろうか。それ。

そうと決まればさつさとやろっ！！！！

『んじゃ今、出すから。』

何を？

「なはっ！！？」

目の前に音を発てて現れたのは銀髪オッドアイのーーーいつぞやの

俺だった。

野郎が何見てんだコラ的な目線をくれている。

「あ、あてつけか？」

『おつとと、間違えちゃった、テヘ！』

「・・・まあ良い。模擬戦ということならばこいつに斬りかかって問題ないんだよな？」

『まね、そう簡単にはいかないだろうけど。』

「・・・ふふふふ。よしきた。殺そう。こいつを殺して俺は過去から決別するんだ。」

すらりと腰から剣を抜く俺。

そしてそれを見て、銀髪オッドアイのーイータイやつも虚空から剣を出した。

「俺に挑もうとは・・・バカなやつだ。なのは、見ていてくれ。今俺がオマエに纏わり付く蛆虫を殺してやるからな。」

「殺せるもんなら・・・っておいしいいっ！？」

『何？』

「いや、何じゃないよっ！？」

あれのセリフどうなってるのっ！？ていうか彼女、今ここにいないよねっ！？」

『半年前の響を再現してみました！』

「せんでいいっ！！ていうか、あれか。これを倒すまでこれを相手しないといけないの！？」

『もちろんサア！』

「お、おまえ・・・ほんと鬼畜な。」

げんなりする。

とつとと斬り捨ててしまおう。

そうだ、それがいい。

「せいやつ！」

「ふっ・・・さすが非モテ君だ。剣筋がなっちゃいない。」

「ごはっ！？」

オマエも非モテだろっ！と思いつつ。

振った剣はかわされて、俺に向かって俺が蹴りを繰り出してきた。しかし俺は負けじと態勢を立て直し、俺に向かってもう一度しかける。

俺はその銀髪の髪を気障ったらしくかきあげ、俺に向かって再度力ウンターを放つ。

しりもちをつく俺。

そして愚者を見るかのように見下してくる俺が目の前に突っ立っている。

非常に腹が立つ。

ていうか、俺が相手だとややこしいなっ！？

とりあえず目の前のコイツは厨房と呼ぼう。

で、厨房は俺に向かって

「僕としたことが・・・つい本気になってしまった。許してくれたまえ。」

殴って良いだろうか？

というか殴れないんだった。こいつ俺のくせに強かった。

魔法とか魔力とか使って思いつきり忌々しい過去ごと吹き飛ばすつもりで攻撃しても死んでくれない。

俺は日が暮れるまで厨房に斬りかかり魔法をうちまくったのである。

フラグが立ちそうで立たないんだ

困ったことに厨房に手も足も出なかった響。

その晩、彼が枕を濡らしたのは言うまでも無い。

さらに一週間ほどが経ち、段々剣を振るのに慣れてきたかな〜と思っ
ていると、なにやらひし形の宝石のようなものを拾う。

そして響の目の前には金髪の美少女が。

フェイト・テストロッサ。その人である。

「それを渡して。」

鎌状のものを向けられ、焦る響。

だが、響も慣れた物。

訓練でちよつと強くなっていた気がした響は調子に乗っていた。

「むむっ！なにやつっ！！」

瞬時にアイシテルをセットアップ。鎧を発現させずにナイフのみを
手に持った。

調子乗っているとはいえ中身が中身。もちろん戦う気など無く、単
にビビって武器を構えたというのが大きい。

少し逃げ腰になっているのが哀愁を誘う。

「・・・渡してくれないなら力づくでー！」

「はいどうぞ！」

では、さようなら！！」

「・・・あ、ありがとう。」

カチャと武器を構えたフェイトにビビった響は即ジュエルシールドを

渡す。

響は小声でアイシテルと相談した。

「・・・ちよ、この子この歳で武器持つて脅し取るとか!？」

「きつとろくな教育をされなかったのね。かわいそうに。」

「それ以前に表情を全く変えないあの余裕・・・強者とみた。」

「ええ、響よりも大分魔力が高いね。振る舞いもデバイスを振るうことに対する慣れがある。」

「魔力つて・・・デバイスを動かすのに必要な力だったよな？」

「そうよ。」

「では彼女の持っているものもデバイスだったりする？」

「そうね。」

「また武器か。・・・もしかしてデバイスってパソコンの進化型とかじゃないの？」

「今更すぎてデバイスの私は涙目。」

「き、気づかんかった。」

「・・・。」

「まあ、ほら。一度死んでるからさ。死んでた間にそんな感じの物が出てきたのかなあとか思ってたわけ。」

「・・・それにしても気づくと思うけど。他の人は持ってなかったじゃないの。」

「いや、高級品なのかなあって。」

「・・・。」

「まあいいじゃないか!ほら、結局のところアレでしょ？」

アレアレ。あの・・・あれだよ。デバイスってのは魔力とやらを持つものが使える護身用の武器とか・・・そんな感じでしょ?それを脅しに使うとは・・・許せん。彼女のためにも説教してくる。あのままでは将来的に犯罪者の仲間入りしかねない。」

「・・・止めはしないけど。」

響はこうしてアホな行いへと走るのである。

ちなみに彼女はすでに犯罪者の仲間、というか娘である。

「ちょっとその君。」

「・・・何か用？私は忙しい。」

ちよつとイラツとしてる気がする。

反射的に謝りそうになったけれどそこを我慢する。

「い、忙しいところ申し訳ないんだけどイキナリ武器を構えて脅し取るのはどうかと思うんだよ、お兄さんは。うん。」

「貴方から構えたのに？」

「え？」

そうだっけ？

「そうだよ。私から構えたわけじゃないし、望んで貴方に危害を加えようとしたわけでもない。」

「そうだったか・・・あ、えと・・・だからといって・・・」

「・・・話すことは何も無い。それじゃ。」

「あ、はい。」

そのまま去っていくフェイトを見送る響だった。

「俺、間違ってたか？」

普通に考えてあんな怪しいコスプレして鎌っぽいのを持ってるやつが居たら警戒してしかるべきだよな？」

『・・・とりあえず帰ろうか。』

「・・・うん。どうでもいいよな。正直言つとお近づきになりたい

とか思っていたのだが。」

次の日。

響は図書館にいた。

猿でもわかる乙女心を返しに来たのだ。

「次はどんな本を借りるべきか・・・乙女大図鑑・・・乙女はこうして男を選ぶ百選・・・女の子は複雑なのだ・・・女子の憂鬱・・・女の子の気持ち・・・全部借りるにも小学生は一冊のみだし。」

返し忘れなどを防止するために図書館では年齢に応じて借りれる冊数の上限が決まっている。

小学生は一冊までだ。

「つと、あ、すいません。」

「こちらこそすいません。」

本棚を見ながら横歩きをしてると人とぶつかる響。

響の視界にまず入ったのは紫色の髪の毛。

紫とか人類的にありえないなあとか自分のことは棚に上げて少し驚く響。

今では黒髪黒目としているのだが。

「・・・というか紫とか懐かー！ーおおうつ！？」

「あの、どうかしましたか？」

瞬時に顔を逸らした響。

月村すずか。彼女はちらほらとこの図書館にやってくる常連さんである。

響は響で毎度のごとく焦る。

最近焦つてばかりだなと内心思いながらも響は気づかれないようにと声を若干高くして、なおかつ顔は俯いて顔のつくりを分らないようにした。

どおりでどこかで見たことがあるわけである。

「いえ、別にどうもしないです。んじゃ、俺はこれで・・・」

「ん？あ、でも本は良いんですか？」

「あ、いえ、見つからないみたいなので・・・出直そうかなあと」「職員さんに聞けば良いと思いますよ？」

「いえ、その・・・あの・・・人見知りなので・・・それでは。」

その場から離れるためのとつさの嘘であるが、俯いてることと言い挙動不審気味なところと言い、すすかは納得し、それならば。と手を合わせて提案する。

「・・・うん。なら私が変わりに聞いてあげましょうか？」

「エ？いや、あれですあれ。そんなことしてもらつのも・・・」

「別に気にしないで良いですよ。ついでに私の探してる本も聞くつもりですし、気にしないで下さい。」

「・・・すっごいエエ子や・・・」

「え？」

「あ、なんでもないです。・・・まあそこまで言つならお願いします。」

重ねて言うが彼は悪人と言うよりは善人よりである。

そんな彼が他人の親切をつっけんどんに跳ね除けることは出来ず。しかも見ず知らずの人に親切をするという今時の若者には珍しい心優しさに感涙し、自分の昔と彼女とを比べながらその酷さに嗚咽しかけつつも、響はなんとか彼女の親切を受けることにする。

実際困っていたのは本当で、司書さんに聞こうと思っていたところでもあるため聞くことに関してはなんら問題は無い。

「あの、すみません。」

「はい、なんですか？」

「えーっと私は動物のー特にネコに関しての本を読みたいのですがー」

いや、問題はあった。

響は気づいたのである。

俺の借りる本の内容はちょっと聞かれたくない。と。

別に職員さんならば構わない。

わざわざ職員にまで気遣ってたら図書館で本など借りられない。知られたく無いという思いもあるにはあるがそこはやむをえないことだ。

借りる際にどのみち見せなくてはいけないのだからして。

だが、彼女に関しては別である。

普通に気まずい。

とっても気まずい。

一応同年代の女の子——ではあるものの中身的には妹とか娘とかそんな感じの歳の子。

この歳——といっても9歳だがーで子供に自分の情けないところを曝け出すようで非常に恥ずかしい。仮に同年代でも恥ずかしいけれど。

確かに響の昔はアレであった。

アレ過ぎていたが今は少なくとも改心し、直していくべく頑張っている最中なのだ。

今の自分にそのような羞恥プレイはレベルが高すぎる。

目の前の少女が少年であればまだマシだったものを。

ゆえに彼は致命的な一手を取ってしまう。

「それで、貴方は何を借りにきたの？」

「え、お、俺は・・・えと・・・アレだよ、あれ・・・えーっとネ、ネコの本かな？うん！！」

ここだけで見れば見事な回避とも思うが、チョイスがダメだった。

「へえ、貴方ネコを飼ってるの？」

「え、い、いや、ネコを飼いたいとは思ってるんだけどね？あ、でもそうそう気軽に飼おうと思ってるんじゃないよ？」

ほら、動物は生き物だから可愛いだけじゃなくて飼う上での辛いことや気をつけなくてはいけないことが多々あるだろうし・・・だ、だからかな？まずは本を見てネコのことを良く知らなくちゃって思っ
て・・・」

ネコを飼いたいと言われ、下手に嘘を付くとばれると思ったか響はまだ飼っていない事にしてネコについて詳しく知らなくても問題ないように嘘をついた。

とっさの嘘にしては理由がしっかりしていて内心ほくそえみ、完全に誤魔化せた！と思ったのもつかの間。

「・・・すごいなあ、その歳でそこまで考えてるなんて。」

私も始めてネコを飼う時にお父様にそれを言われたの。立派だなあ。

「君も同じ歳でしょ？」

「え？あ、うん。だからこそ余計に凄いなだよ。」

といって微笑む月村すずか。

その笑顔につい赤面する。ことは無かったが本当に良い子だなあとちよつと泣きそうになる響である。

もちろん昔の自分の酷さがあるゆえにそれと比べて自分が一体どれほどアホだったのか。

情けなさ過ぎて悲しくなったのだ。

そしてこの嘘が響の首を絞めることとなる。

職員さんに案内されつつ、道中で話しつづける2人。

「ねえ、貴方のお名前は？」

「え？あ、俺は・・・相馬ひー」

「相馬？」

「あ、いや、そ、そそ、相馬ひかりだよ。」

危なかったと小声で呟く響。

『それにしても気づかれないものね。意外と。』

「・・・多分それだけあの髪と目の色が印象深かったって事でしょ・・・あまりの性格の違いに同一人物だと思われてないってのもあるだろうし。」

念話で会話をする響とアイシテル。

余談であるが先ほどの嘘はアイシテルが念話で響に指示したものである。

もちろんアイシテルは今回の嘘の悪いところを理解して敢えてこの指示をしている。

アイシテルはお茶目なのだ。

お茶会に誘われて

「ねえ、ひかり。このネコはどう？」

「こ、これはまた可愛い・・・なんだこの可愛さ。」

あれから一ヶ月ほどが経過した。

現在2人で仲良く読書中。

なぜこうなったかは特に語ることも無い。

共通の趣味。

それは友達作りや合コンでのきっかけとしてはあまりにもポピュラーでセオリーで常套手段である。

そう、ネコ。

ネコの話に響が――正確にはアイシテルが響に乘らせるように誘導してしまったのが運の尽き。

いや、今はまだ美少女だが将来的に確実に美人となる女性と接点をもてたのだから男としては喜ぶべきである。

事実、響は喜んでいる。が。

それと同時に悲しんでもいる。

彼女に会いたくなかったのは言うまでも無く高町なのはと彼女が親友であるから。

親友を傷つけた人間に友好的に接するような人間はいないだろう。

ゆえに彼女と友達になったところで本名を明かしてしまえばそれだけの関係なのだ。

どの道彼女にフラグを立てて、イチャラブすることは叶わない。

そのことに嘆き苦しんでいた。

不幸中の幸いといえばネコの本が意外と面白いということである。

気づいたら普通にネコ好きとなっていた。

「あ、そつえばね？」

「ん？何。」

「今週末にお茶会があるの。ひかりも来る？」

「・・・うつむ。」

「何か用事があるかな？」

「いや・・・その。別に暇ではあるけどさ。」

響が渋り理由は言わずもがな。

彼女のお茶会に誰が来るかと言うこと。

2人きりでお茶会をするなんてことはまずないだろう。

それならお茶会というよりも普通に食事である。

「他に誰が来る？ていうか来るよね。確実に。」

「ええと・・・アリサちゃんとなのはちゃんていう私のお友達とそのお兄ちゃん。あとはなのはちゃんと特に仲の良い男の子も来るの。大丈夫だよ？きつとすぐに仲良くなれるから。」

「いや・・・遠慮しておくね。せつかくけども・・・」

「どうして？」

「いや、だから人見知りだと何回言えば・・・」

こうして誘われるのは何回目か。

響はこれ一度きりではなく何度も誘われていた。

その都度断ってきたのだ。人見知りという理由で。

もちろん響とて行きたいことは行きたい。

別に人見知りではないのだし、美少女達と、将来のおっぱーいげふんげふん。と近づける良い機会である。

下心を無しにしてもこんな良い子達と友達になれるのは光栄だ。

だがしかし。

もしバレたら？と考えると如何せん足が動かない。ばれないとは思うものの、ばれた際のリアクションを考えると非常に気まずいのだ。

すずかだけにバレルのはともかくとしてもなのはにアリサまでいるとなるとせつかくのお茶会が台無しになってしまふ。

そんなことになってしまふと響のみならず、彼女達も気まずくなるだろうし、十中八九お茶会どころではなく。

ばれたときの状況を考えると非常に気が進まないのだ。

というわけで。

「ごめんね。悪いけどこの話は無かったことに・・・」

「・・・どうして？」

「え？」

「毎回思うんだけど、ひかりって私の事嫌い？」

「い、いや、別に。」

「その割にはどこか壁を作ってる気がする。」

「そ・・・そうかな？」

「お茶会、そんなに行きたくない？人見知りだって早めに直しておかないとこれから先、苦労するよ？」

「え・・・っと、うん、それは分かってるんだけど・・・」

「怖いのは分かる・・・なんてことは言わない。私は人見知りってわけじゃないし、気持ち十全に分かるなんて口が裂けてもいない。でも、頑張って直そうとしない限り何時までもそのままなんだよ？」

「そ、そうだね。」

「じゃあ頑張ろうよ。皆良い人達だからきつと助けしてくれるし、ひかりの力になれると思うな。きつと今が良い機会。やるべき時だと思っ。」

「・・・えつと・・・その・・・」
「ね？」

「あ、うん、じゃあちよつとだけ・・・お邪魔してもいい？」
「もちろん。」

こうして響の出席が決まったのである。
帰り道。

「・・・憂鬱だ。」

『押し切られちゃったねえ。結局。』

「・・・ああ。」

『真摯に相手を思いやる相手に弱いね、響は。』

「・・・ああ。」

『・・・大変だね。』

「・・・笑えるのを堪えてるんだろ・・・分かってる。その震えた声で話しかけるのをやめろ。打ち殺すよ？」

『あれえ？そんなことを言ってもいいのかな？』

「あ？」

『厨房を強化しちゃうぞお。ようやく先が見えてきたところなのに、ここで強化しちゃうとあと一年はあれと顔を突き合せないといけなくなっちゃうよ？』

「すいませんでした。だからそれだけは勘弁してください。」

『よろしい。』

泣く泣く謝る。

「なあ・・・ほんとどうしよう。
バレルと思うんだ。意外と。」

『どうして？』

「なのは・・・と俺が呼ぶのは馴れ馴れしすぎるか。高町さんは被

害者だ。おそらく他の人間よりも俺の顔を強く覚えてる・・・と思う。」

『まあ確かにね。』

「誤魔化せるか結構な不安がある。いつそのこと風邪とか急用で休むのはどうだろうか？」

『あそこまで言ったのに？状況からして嘘だとばれるんじゃないかな。下手したらお見舞いなんてこともあるかも。』

「さ、さすがにそこまでは・・・」

『彼女達はやたらとお人よしだしねえ。ありえないと断じるのは難しいんじゃない？もしくはすずちゃんがお見舞いに行くって話になってそこから皆で行く！なんて流れにもなるかも。』

「・・・そうなると文母さんを目撃されるな。」

『ばれるでしょうね。』

学校に親が呼ばれた時に、すずかやアリサが見てないとも言いきれない。

『いつそのこと女ってことにして女装したら？』

『まずばれないと思うよ？』

「・・・それはちよつと遠慮したいな。そもそもばれるだろう。」

『大丈夫じゃない？』

ほら、響って綺麗系のイケメンだし、女に見えなくも無いよ？多分。

『

「仮に女装したとしてもいきなり女装して行ったらなんじゃそら！？って話になるだろうが。」

『女の子でしただってことにしたら？』

「これ以上嘘で塗り固めたらまた何かややこしい状況になりそうだから遠慮しておく。」

『んもうつ！あれもいや！これでもいいじゃ話が進まないでしょっ！』

「・・・もつとまともな案をくれ。」

『ばれたらばれたでいいんじゃないの？その時はその時だよ。』

「・・・。」

『それにこのまま嘘を付いてたところでいつかどこかでバレるのは明白。』

それともずーっと嘘をついたまま友人関係を育もって言うの？』

「うぐっ・・・それを言われると・・・」

『ばれた時はばれた時に考えれば良いよっ！』

さあいこうっ！！』

「・・・面白がつてるでしょ？」

『今更なにを。』

「・・・俺、アイシテルのこと嫌い。」

『安心して。私も響の事、好きという訳じゃないから。』

「・・・そうか。」

なんか傷ついた響である。

結局『我に妙案ありっ！』というアイシテルに任せて考えることを放棄した響であった。

泣いて逃げた

「・・・憂鬱だ。」

響はというと憂鬱真つ盛りである。

なんせ今回はお茶会！

そう、きやつらが来るお茶会なのである。

下手なバイトの面接や会社の企業説明会なんてものよりも緊張するであろうイベント。

すっぱかせたらと何度思ったことが。

「本当に大丈夫なんだろうな？」

『大丈夫、大丈夫。私にまかせなさい！！』

「アンタだから不安なんだが・・・」

えっへんと胸を張るアイシテル。

胸は無いんだけども。

実に不安だ。

「ばれたらホント頼むよ。」

『だから分かっているってば。まったく女々しいな。』

ほうっておけ。

そんな感じのことを言いたそうに顔を顰める響だった。

どうやら俺が一番乗りのようで月村さんと2人きりでお茶を飲む。
うむ。平和だ。

平和すぎてつい猫なで声で月村家のぬこをナデナデするのも仕方がない。

なぜなら平和だからだ。

平和ゆえに腑抜けたのであって、曰ころはこんなバカな真似はしない。

それがこの俺。相馬 ひびー ひかりである。

近くには月村さん付きのメイドとか言うファリンさんとやらが一緒になって話をしているのだが、従者がそんなことでいいのだろうか？

さらに言えば、どうやらドジッ娘に分類されるようで、ここに来て早々服を汚され、脱がされ、入らされ（風呂に）、着させされた。都合よく男物の服があるわけもなく。

なぜか月村さんのパジャマを着ているというこの状況。

結局女装することになってしまった。

いや、女装というほどでもないか。

パジャマなのでスカートというわけでもなく、デフォルメされたネコがプリントされているだけのもの。

外見年齢も相まって女装している感はない。

知らなければ女の子に見えるのは確かだが、子供の時は男の子も女の子も大して変わらないし、女物の服を子供に着せる親はちらほらいる。今の姿はその程度である。

何が言いたいかというと、別に女装じゃないんだからねっ！と言っておきたいのだ。

自分のパジャマを見られることになって少し恥ずかしかっていた月村さんが可愛かったとは言って置く。

ちなみにもう1人のメイド長のノエルさんとやは至って普通のメイドさんだった。

きつとファリンさんは月村さんのお友達として――の意味合いが強いに違いない。

でなければ常識的に考えて、召使の類が主のお客と席を並べてお茶を飲むなんてこと許されるはずがないからだ。

そして尋ねたい。

なぜにこんなにもネコが多いのかと。

まあ撫でてる分にはなんら問題はないのだが、如何せん、ぬこが可愛すぎてノックダウンされそうだ。

ネコの多い理由でも考えて気を紛らわせないことでもしないかぎり、俺はきつと鼻血を出して気絶するだろう。
なんてことはなく。

普通に気になった。

「それはね、保健所のとか・・・野良猫なんかを引き取ってるうちに・・・」

これまた恥ずかしそうにそうの給う月村さん。

本当にエエ子や。

もちろんであるがこうした人は少なからず居る。

偽善と呼ぶ人もいるだろうが今回のコレは偽善ではなく完全な善と言ってもいいんじゃないだろうか？

見れば分かることであるが、この家のネコはある種、異状だ。
本来、ネコは群れる事を嫌う。

漫画やアニメなどで集会のように集まるシーンはあっても現実には滅多に無い。

犬のように仲良く一つの餌皿で餌を食べるなんて行為もしないのだ。

本を読んで学んだ知識なんだが、この家のネコは非常に珍しい。

よっぽどしつけが良いのか、はたまたそうした協調性を持つてでもここにいたいと思わせるのか。

次に注目すべきは毛並みや健康状態である。

もちろん世の中には野良犬、野良猫や保健所で殺処分される捨てられた犬猫を保護し育てる保護団体や個人の人々がいるが。

保護団体はともかく個人の場合は独りよがりな善意であることが多い。

単純な話。

資金が無いのだ。

一般家庭の人がネコや犬を複数飼うとなるとその餌代や予防注射代（国で義務とされてる狂犬病など。酷い場合予防注射が一切されず、人間に危険が発生する）だけでも、かなり高額の世話代がかかる。糞尿の処理だってかなりの手間暇がかかるはずだ。

時には群れに馴染めなかった個体が虐めで酷い怪我を負うこともあるし、糞を処理しきれずに病気となり死んでしまう場合もある。

そういった人の多くは善意だけ押し付けて、結果的に苦しい生活を近隣住民や救うべき犬猫に強いることとなるわけで。

いわばありがた迷惑だ。

口先だけでるくに救えてない、満足に救えてないという状況になる。悪いというわけでもないが誉められた行動でもない。

って、俺みたいなやつが何を偉そうに言ってるんだろうね。

とにかく、ここのネコにはきっちりと管理が行き届いていることが分かるのだ。

糞も見た限りでは見当たらない。

糞はそのままでは肥料とはならず、有毒なアンモニアが発生し、それが草を枯らす。

土中の自浄作用以下の量ならばともかくこれだけいれば確実に分解されない糞が出てくるはず。

しかし、枯れた草が見られないことから目に当たる場所だけ掃除しているということもなさそう。

おそらく専門の世話係を雇いつつも、屋敷に住む人間が一丸となつて世話をしているに違いない。

金持ちだからだろ！と言うヤツもいるだろうが、逆を言えば金持ちでもない限り下手な救いは中途半端になるだけでやめるべきということ。

そんな惨状を招くくらいなら政治家を目指して、犬猫の投棄を厳しく取り締まる法律を作るべく動いた方がよほど建設的で効率的だろう。

全部本の知識の受け売りだが、本当に彼女はネコを好きなようだ。ただ可愛いだけと侮ることなく、世話に関する手間暇苦労も含めて猫を愛す。

可愛い部分だけを見て、軽い気持ちで飼ってしまつと飼育者にとつても飼われる側にとつても非常に不幸なことになる。

時には保健所に預ける際、「家のネコだけはちゃんと飼い主を見つけてあげてよね！」などという身勝手なことを言つて捨てていく人間もいるらしい。

そんな人間が居る中で、彼女は本当のぬこリストと言つていいだろう。

「ど、どうかした？」

「うつん、なんでもないよ。月村さんは本当に偉いなって。」
「えっと・・・そんなことないよ?」

本当にー自分の黒歴史が惨めに思えてきます。
どうしてあんなバカだったんだろうね。
泣けてくらあ。

泣きそうになりながらも、にゃんこを撫で回しているとピンポーン
とインターホンの音が鳴り響いた。
いよいよ来たか。

ここまで来たら覚悟を決めよう。

「こんにちはー。」

「こんにちは。」

まずは高町さんとーなんだこのイケメン。イケメンか? うん、
イケメンだ。あえてもう一度言おう。なんだこのイケメン?
イケメンかつ声までイケメン。もといイケメンボイスなんだが。
イケメンすぎるだろう。

「こんにちは、すずか、来たわよー。」

次にアリサ・バニングス。

高町さんの一件でぶん殴られて以来、とっさに逃げたくなった。
まてまて、大丈夫ばれないばれない。
ばれないばれない。

高町さんがこちらを見てくる。

そら、見覚えの無い人間がいたら気になるよね。

「こんにちは、皆。」

・・・ほら。ひかり。言っただしょ。」

「・・・あ、うん。」

「人見知りを直すためにも自分で自己紹介して。」

「わかってるよ、月村さん。」

何度も重ねて言うけど、別に人見知りじゃないんだけどね。君たち以外の人間ならば。

立ち上がって、口を開ける。

「わ、私は相馬 ひかりっていいます。よろしくおねがいします。」

無駄にかしこまって一人称まで変わってしまった。

月村さんは少し噴出していた。

行儀悪いよ？

「そうま・・・？」

高町さんがなにやら少し嫌そうな顔をした。
ばれたかつ！？

「・・・アンタにお兄さんとかいる？」

何か言いたそうにした高町さんよりもバニングスさんがこちらに問いかけてきた。

まあ聞かれますよね。

名字同じなもの。

小さい声だけど、「・・・似てるわね。ていうか・・・瓜二つ・・・

双子かしら？」とか言っている。
もちろんのこと。

「いませんよ？」

満面の笑みで応えてやったぜ！

ちなみに高町さんのお兄さんがこちらをじっと見ている。

その視線はどこか厳しい。

おい、9歳児に向ける眼光じゃねえだろ。

普通の9歳児だったらこの時点で泣いてるわ。

というか、まさか気づいてる？なんてことは・・・いや、まてまて
大丈夫大丈夫。

まだ疑ってる段階だろう。多分。

背筋が脂汗でびっちよりになってきたくらいの沈黙が終わったあと。

「そうよね・・・あれみたいなバカがこんな素直なわけないし。」

「・・・そうみたい。よかった。」

バニングスさんと高町さんがほっと一息つく。

そこまで警戒されるほどだったんですね。

俺、泣きそう。だって男の子だもん！

「・・・身振り手振りからすると・・・いや、だが・・・雰囲気
あまりにも・・・うつむ・・・しかし重心の置き方といい・・・」

お兄さんはまだ疑っているようである。

ていうか、身振り手振りってなんじゃそれ？

え、この人ただけ？

この人と面と向かい合ったのは一度のみ。高町さんの家に謝りに行

く時だけ・・・だったはず。

ていうか重心の位置とか見て取れるんですね。

何、この人。怖い。格闘技とかやってるんですか？

いや、それ以前に格闘技やってても重心の位置で人の判別を取ろうとする変態はいないと思います。

ていうか、こいつは俺とはまた別のベクトルで変態では？と思え始めてきた。

ちよつとした振る舞いでバレかねん雰囲気がある。

只者じゃないっ！と思ったね、ほかあ。

さらに問題が積み重なった。

「あ、いらつしやい。ちー君。」

ちー君とか親しげに相性で呼ばれた男はいつぞやの山田君（仮称）。

美少女に相性で呼ばれるとは羨ましい。

というか下手したら既にフラグを作っているのではないだろうか？

妬ましい。死ねばいいのに。

というか殺してしまおうか？

「・・・どう思う、アイシテル？」

『バカ言っでないで、気をつけないとー！ーほら、彼は転生者だから・・・』

「・・・原作にいない・・・その顔・・・おまえっ！？
性懲りも無くまた来たのかっ！？」

や、やべっ！？

これは非常にまずいっ！！

「えっと・・・なんのことだか？」

「ああっ!？」

馬鹿やるうつ!! てめえは居ないはずの人間だろうがっ!! なんてここにいるっ!!

またなのはにセクハラする気かよっ!?! この厨二野郎がっ!! 変装までしやがって・・・俺は騙されねーからなっ!!

「ち、ちが・・・」

やばばばばばっ!!

やばす!!

これは不味いつ!!

正義感溢れる山田君にしては端から敵対心MAXモードであるが、それが正しい。

あれだけ迷惑かけて彼の友達にセクハラしたのだから、むしろこれくらいが当然だろう。

何も聞かずに追い出されても文句は言えないくらいの酷いことだったわけなのだし。

お兄さんは山田君ほど敵対視しては居ないようだが（それはそうだが、飯にも子供なのだから）、いつでも高町さんの間に入れるようにさりげなく間に入っていた。

そのさりげなさがなぜか異様にぐさりと来ました。

周りの視線はまさかっ!?! って感じである。

月村さんに至ってはその顔に凄まじいまでのガッカリ感——といえは若干コメディ臭いが、10年来の恋人に突如「別れよう。実は俺・・・女だったんだ。」と言われた様な顔をしていた。

いや、そんな顔見たこと無いからこの例えが正しいのかは分からないが何はともあれ、こんな時こそ困った時のアイシテル頼み。

さあ、存分に思いつきりやつちゃって下さいよ!!

アイシテルの姉御っ!!

『合点承知っ！！』

そしてアイシテルがやったことと言えば。

「ハァーハアツハアツハアツ！！

そいつは俺の偽者だっ！！本物はこの俺！！

ビューティフルびびー」

「死ねえエエエエエエえっ！！昔の俺はいらんわあっ！！」

いきなり月村家に突如出現した謎の厨房。

その正体は俺の昔のアレだった。

よって俺はつい反射的にぶん殴った。それこそ殺す勢いで。あらん限りの力をこめて。

「ごぶっ！？

・・・強くなっただじゃねえか・・・ひびき・・・ガク。」

そのままズンと倒れこむ厨房。

なぜこれを出すっ！？

多分、同じ人間が2人もいるはずもないということ考えたことだろうが。タイミングと出現場所が意味不明すぎた。

なぜ月村さんのスカートのからニユっと出てくる。

ほら、月村さんなんか倒れこんで・・・倒れこんで気絶して・・・ああ。

うん。これダメだ。

何より倒れ間際の厨房の言葉。

なぜ俺の名を言ってしまったのか。

『響も“昔の俺”とか言っちゃってるよ?』

そうだったな・・・終わった。

何もかも終わった。

が、どこかすがすがしいのはなぜだろう。

そう、きっとこれは。

友達を騙すことに引け目を感じていた良心の痛みが無くなったからだ。

それと同時に唯一の友達も無くなってしまったがな。

「・・・アイシテルのあほおおおおおおおおお
っ!!」

俺は泣きながら月村家を後にした。

アイシテルには頼らないことを決めた記念すべき日でもある。

なぜか孤軍奮闘

響はと言うとがむしゃらに走り逃げた。
結果。

いまだ月村家の庭に居た。

「どっちが出口？ていうか何この森林？」

なんせ月村家は広い。

広すぎるくらいに広い。

森が広がっているのだ。

正直何のためにと思わせるほどに敷地が広い。

さすがにもう一度戻って帰り道を聞くということも出来ず。

のんびり歩いて出口を探す始末。

空を飛ばうと考えては見たものの、目撃される可能性を考慮すると最後の手段としたほうが無難だろう。

「そつえばあの厨房はどうした？」

『消したよ？』

「そう、良かった。あれがそのまま残ってたなら、また下手なこと言うだろうし・・・は？」

響とアイシテルが話していると前方にありえないくらい大きなにゃんこが出現した。

にゃーんと若干のエコーがかかりつつもにゃんこはのんびり林を探索しているようだ。

「・・・月村さんは本当に凄いな。あんなネコまで飼ってるのか。」

餌代とか糞の処理とかが大変そうだ。」

「・・・違うよ、あれはジュエルシードを取り込んだネコってところでしょう。」

「またそれか。じゅえるしーどとやらか。まったくどこにでも落ちてるもんなんだな。ていうかさ、あそこにいるの高町さんじゃない？」

「そうだね。どうする？助けるの？」

大きなやんこの前には高町さんがいつの間にか来ていた。助けるとアイシテルに聞かれて、響は唸る。

「いや・・・別にいらなんでしょう。彼女は天才？らしいじゃん。俺が会ったあれよりも危険は少ないみたいだし、そもそも俺が何をどうして手助けをしろと？」

「変わりに封印をしてあげるとかどうだろう？」

それでジュエルシードを持って、それをプレゼント代わりに渡せばあの時のお詫びになるんじゃないかな？」

「・・・なるほど、その発想は無かった。それならそうと、俺もじゅえるしーどとやらを探してれば良かったんじゃないっ！？それで仲直り・・・は無理でも、少なくとももう完全に気にしない、というレベルにはなって欲しい・・・という願望を言ってみたが。どうなんだろうか？」

「試す価値はあると思うよ？」

「・・・本当だろうか？」

「えーっと・・・さすがに泣くとは思わなくてね？その・・・反省してます。」

アイシテルが言ってるのは月村家でのさっきの出来事だろう。

「なのはちゃん経緯で、月村さんの印象も回復できるかもよ？」

「よし、ならばやろう!」

『そこで即答なのね。』

当然である。

響にとつての今生の友達。それが月村すずかなのだから。そして比較的寂しがりやの響としては望むところである。

さらにやる気をアップさせてるのは相手が強そうでないというものもある。

「・・・だけど登場はどうすればいい？」

『え?』

高町さんは響に対して少なくとも好感情は抱いて無いだろう。

いきなり出たところで無駄な警戒を持たせるだけという可能性もある。

下手をすれば攻撃されかねない。

そもそもこのまま置いておいてもなんら問題はないだろう。

原作を知らない響とて、彼女が主人公らしきことは分かっている。

主人公ならば手に入れて当然。さらにとなりにはなんらかのチートを持っていると思われる山田君もいるのだ。

まず間違いなく、手に入れることが出来るだろう。

『なのはちゃんは優しいから・・・多分大丈夫じゃないかなあ・・・それともここはなのはちゃんに任せて、他のジュエルシードを探す?』

「よし、そうしよう!」

『これまた即答ね・・・ん?』

そんな感じのことを考えていると、またもや新たな人間がやってき

たようである。

いつぞやのコスプレ金髪少女。

フェイト。

「・・・いまだ鎌を持ってるんだな。」

『どうする?』

「どうもせんってば。とにかく俺達は別のジュエルシードを探すま
ーなーなっ!?!」

フェイトはネコに攻撃を加え始めた。

それを見てなのはも少女の存在に気づく。

「なっ!?!にゃんこに攻撃だとっ!?!」

許せんツ!!今度こそヤツを説教してくれるツ!!」

『・・・やめといった方が・・・』

「いや。だめだっ!!あのぬこは、じゅえるしーどとやらの被害者
だろう!?!」

無駄に痛い目にあわせる必要は無いつ!!」

と響が話している間にも攻撃されるぬこ。

その際、なのははなのはで変身中。

どうのこうの言う前にさっさと行動を起こすべきだ。

「いかんっ!?!」

こうしてる間にもあのぬこがっ!!

アイシテル行くぞっ!!

せ、せせ・・・せつとあつぶ。」

『相変わらず小声ね。』

響の体が光り、月村さんのパジャマが解けるように消え、西洋鎧の

ような甲冑が身を包む。

腰には飾りの少ない両刃のロングソードがささり、フルフェイスの兜が顔を覆い、伸びた髪が若干兜の後ろからはみ出す。

籠手のそれぞれに一对のナイフが収納される。

変身完了である。

「そのこの鎌の少女、ぬこを攻撃するとはどういうことだっ!!」

響が躍り出る。

「・・・誰？」

貴方もジュエルシードを集めてるの？」

「集めてない。いや・・・さっき集めることにしたけど今回の用件はそれでなくてだな。」

「・・・あいつっ!？」

おい、響だろっ!おまえっ!!」

「っ!？」

なのははようやく変身が終わったよう。

そして後から来たのだろう、山田君。

山田君は西洋鎧に包まれているのにも関わらずに響の正体を看破する。

おそらく感知系の魔法を使っているか、そういったチートを買っているのだろう。

デバイスを持ってないことから、肉体的なチートや特殊能力的なチートを貰ったのだと思われる。

「・・・こんなところで出てくるとは・・・オマエ・・・まさかっ!？」

「・・・。」

響はどうするか迷っていた。
勝手に山田君が叫んでいるだけならば今は誤魔化せるんじゃないかなあとか思いつつ。

なのはが怪訝な顔を浮かべているがそれよりも大事なのはこちらである。

響はフェイトに向き直す。

「どうしてネコを攻撃するんだ？」

可哀想だろう。君の腕ならばそのまま封印するのも可能はずだ。
必要なく痛めつけるのは感心しない。」

「・・・こうした方が手っ取り早い。」

「確かにね。弱らせてからの方が封印の難易度や必要な魔力量は下がる。手っ取り早いのは間違いないわ。」

「・・・なるほど。高町さんがいるからか。」

「そのとおりね。」

響は考えた。

さて、どうしよう？と。

響は知らぬことであるが、物語的にはネコのジュエルシードを回収するのは目の前の少女である。

山田君は下手に手を出すつもりはない、非介入派。下手に話をこじらせたらエンディングが変わると考えているため、山田君は手を出すつもりは無い。

この結末に変更は無かったはずだった。しかし。
しかし、響としてはきつと高町さんが手に入れるのだろうと考えている。

これが一つ目の勘違いを発生させた。
よってこのようなことを言う。

「君に手に入れることは出来ない。」

さっさと去った方がお互いのためだ。」

「・・・関係ない。私は手に入れなければならないのだから。例えば2人が相手でも!」

次に問題なのがここで山田君の最悪の勘違いが発動したからだ。

「・・・なのはっ!!」

あいつにジュエルシードを渡すなっ!!

きつとあいつはジュエルシードをお前達を惚れさせるために使う気だっ!!」

響は内心なんですとおおおおおおっ!?

と自分のことを言われてるはずなのに、自分が一番驚いた。

山田君は響が泣きながら帰ったところを見て、「あいつもいい加減、気づいたのか?」と考えている。

しかし、こうした勘違い系、もしくは自意識過剰系のチート人間がそう簡単に心変わりするはずないとも考えている。

彼の趣味はインターネット上での魔法少女リリカルなのはの二次をひたすら読むことだったため、そうしたところから先入観が生まれていた。

改心するはずが無いという。

その結果、この誤解に響いたのだが。

「まさかっ!?

確かにジュエルシードには願望器としての能力があるけど・・・」

「なぜそんな思考に・・・」

ユーノが戦慄した様子で語る。

響も戦慄した様子で語る。

アイシテルは不謹慎だが、笑いを堪えていた。

もちろん響は響で間違いを正そうと声を上げようとしたが、そこで鎌カマを構えた（ギャグではない）フェイトが切りかかってくる。慌てて剣で受ける響。

お互いの武器がぶつかり合う、鋭い擦過音が鳴り響く。

「・・・そんなことのためにジュエルシードは渡せない。」

「いや、ちがつ！？がはあつ！？」

「っ！？」

今度は背後から砲撃がぶち当たる。

なのはのブレイクシュートだった。

フェイトは戦いに慣れているため、常に他の二人も視界に入れていた。よって避けたが、響は実戦は実質初めて。気配とか魔力で背後の攻撃を察知するなんていう高等テクニクが可能なはずもなく、きりもみしながら数百メートル吹き飛ばされる。

「・・・どうしてそんな酷いことを考えられるの？」

そんなことで好きになられたって嬉しくないと思う。考え直してよ。すずかちゃんがやたらといい人だって言うから・・・どんな人だと思ってみれば・・・酷いよ。」

酷いのは背後からためらいもなく打ち抜く貴方じゃないだろうか？

と言いたかったが、響は苦悶の表情を浮かべるだけ。

予想以上にイタイ。

身も心も。

『非殺傷設定をオンにしてないみたい。』

そこまで使えないのか・・・それとも少し痛い目にあわせたいのか・

・・・』

「前者であることを願うわ・・・本当。」

『っ！？』

後方っ！！気をつけてっ！！』

「また後ろかいっ！？」

ぐがあっ！？」

またもやりきりもみしっつ吹き飛ぶ響。

地面に墜落し、バウンドしながら土にまみれる。

「・・・あいつ。」

『あれは・・・NARUTOの万華鏡写輪眼ね。』

この世界はあくまでも魔法少女リリカルなのは。万華鏡を魔力で再現してるに過ぎないのでしょけど・・・それでも脅威よ。』

「・・・厨二だな。」

山田君は目を異様な紋様に変えつつ体にうつすらと紅いオーラを纏っている。

NARUTOという漫画にて体を覆うように展開する人型のオーラ、スサノオである。その剣のなぎ払いを受けたのだろう。

切れなかったのはそれだけ鎧が頑丈だということ。響としてはほつと胸を撫で下ろす。

右になのは。

左に山田君。

後方にフェイト。

なぜこんな状況になったのだろう？

響は泣きそうになりながらもこれもまた自分の昔のアレが原因かと思いつつ。ため息を吐きながらここから逃げることを考える。

自業自得とはいえ、これは酷すぎる気がしないこともない。

これが乙女を傷つけた罪か。

『逃げるの?』

「・・・逃げずにどうしろと?」

響は逃げることにした。

ボコられて酷すぎて

「逃がすわけ無いだろう。いい加減にしてくれ。」
「っ!？」

背後に瞬身の術で回った山田君のスサノオによる一撃。
剣で受けるが剣はいともたやすく折れ、地面に叩きつけられる。

「いつつだあああつ!？」

『私を使いなさいっ!!』

こいつ・・・本気で殺す気よっ!!』

「殺すつもりはないっつーの。だけど、殺す一歩手前までは・・・
ね。」

「だから誤解だと・・・」

「演技は必要ない。」

響はため息をはく。

演技だったらどれほど良いか。

「なのは達を謀った罪。さすがの俺も怒髪、天を突くって感じなんだわ。」

「・・・そいつは結構なことだ。」

「いつちやあなんだが、いい加減にしないと殺すことも考えている。」

『貴方・・・ためらいが無いと思ったら・・・人を殺したことがあるのね。』

「・・・んまあな。この世界でなのは達にかかわる理由は無かったし。この力で簡単に就職を。とか思って、管理局勤めだったわけだが・・・まったく。なのは達が危なかしくて見てられないから・・・」

・ ついな。」

なんだかんだで巻き込まれる。

響はこんな時だが、こいつ、オリヌシ臭いと思った。

そして同時になんて羨ましいんだと思った。

望んでないならその立場を分けて欲しいくらいだ。

「・・・内臓をぶちまけて死ねばいいのに。」

「・・・一応言っておくが、なんだかんだで俺はなのは達が好きだ。オマエの思い通りにはさせないからな。」

「・・・もうそれでいいです。」

響はシューターを展開。

放つ。

が、それらは全てスサノオに阻まれる。

「ふん。勘違い系主人公つてのは本当に迷惑なものだな。」

「・・・。まっことその通りだと現在進行形で実感してる。カートリッジロードっ!!」

・・・降りかかる災厄を

わが身に宿し

全てを屠る天上の剣・・・」

『加減は不要っ!!ぶっ殺すつもりでやっちゃえーっ!!』

響の周りに黒い魔力が集まる。

巨大な魔法陣が展開され、魔力が収束されていく。

「デイズスターブレイカー!!」

巨大な黒い奔流が山田君を包み込む。

「ちっ！天照っ！！」

それが黒い炎で焼き尽くされた。

「なっ！？」

「・・・ふう。やっぱり天照は魔力消費量が激しいな。ま、それはともかく。」

「・・・俺としては今回のPT事件もハッピーエンドにしたいと考えている。」

そのためのチートも用意してある。転生時にな。

アリシアテストロッサを生き返らすため。

本来ならこっそりと助けるだけのつもりだったのに。」

「・・・。」

響は言ってる意味が理解できなかった。

当然である。原作を知らないのだから。

それよりも目の前のこいつにボコられたくない。

それが思考の大半だ。誤解で痛い目に遭うとか。

いや過ぎる。

つかこっそりと助けるとか。

後ではばれて主人公組みの好感度が「言ってくれば良かったのに・・・」

・まったくちー君ったら。」みたいな好感度アップフラグですね。

わかります。

ますますオリ主くさいと思った。

「どうせハーレムを！とか思ってるんだろ？俺からしたら下らん。いい加減なのは困らせるのはやめろ。」

オマエを見るたび泣きそうな顔を見るのは辛い。」

「・・・。」

響も辛いです。

現状がもちろんのこと、そこまでのものだったとは思わず。

「それとデバイスも没収だ。よこせ。デバイスを渡すなら勘弁してやろう。」

「・・・。」

響は考えた。

響にとつてなんだかんだ言ってもアイシテルは良き相棒である。なのはとの一件で落ち込んだ響を励ましてくれたのは母親の文香とアイシテルだし、なんだかんだで嫌っては居ない。

そして響としては可憐な美少女の喪失は世界の喪失と同義。

彼女たちに関わらずしてどうやって将来の嫁を探すことが出来るのか。

もちろん昔はハーレムを目指していた部分もある。が、今となってはただただ彼女が欲しい。嫁が欲しい。

それだけである。

別にその辺の女の子でもいいのだが、響としてはやはり原作組みの女の子とお近づきになりたい。

その辺の女の子でいいなら別に前世にもいた。

しかし特別優しい女の子。

原作組みはそれが顕著だ。

だからこそ彼女たちを嫁にしたかったというのにこの状況。なぜ敵対してるのだろうか？

とりあえず出した答えは、逃げ出すということ。

やたらと敵意を向けてくる彼を見て、難易度が上がったなあと思っっているが、それ以外の選択肢は不思議と思い浮かばなかった。

いや、思い浮かぶはずも無いのだが。

ここで返り討ちにしたとしても悪者だし、ここで負けて痛い目を見るのも嫌だ。

殺す一歩手前とか。

味わったことは無いが、死ぬほどなのに死ねない痛み・・・みたいな感じだろう。

そのためにはこいつを叩き潰さないといけないらしい。

なにはともあれアイシテルを渡すつもりは無い。

彼女はデバイスとかいう道具ではなく、唯一の友達なのだ。

「やるんだな？」

・・・せつかく見逃してやるつつてんのに。オマエみたいな馬鹿はなまじ力を持つから粹がる。デバイスは確実に奪わせてもらうぞ。」

「一応、俺がこの世界にきたのはハーレムを作りに来たわけだからね。」

そのハーレムを妨害するというなら黙ってられないな。」

挑発をする響。

誤解でボコられそうになっている彼としてはこれくらいは言うて当然。

むしろ相手を直接的に侮蔑しないだけ、響のビビリ具合が見て取れる。

しかしその内容はさらに誤解を深めるだけである。が、どのみち解ける様子が無い以上、意味の無いことだろう。

『・・・馬鹿だけどそんな響が私は好きだよ。』

「ほんとに下らないヤツだな。あきれた。」

山田君が身構ええると同時にスサノオも身構える。

そのまま少し切り結び、時間がかかると思ったのか山田君は距離を

取る。

「オマエは絶対に勝てないよ。
俺にはNARUTOに登場した術や技、特殊能力を使えるチートがある。こんなことも出来るんだ。」

山田君の体から魔力が吹き出る。

「紅い化け物？」

山田君の全身の皮膚が捲れ飛び、真っ赤となる。そして尾が6本生えている。さらには周りには骨のようなもので浮き上がっていた。

「九尾の六本形態。知ってるか？」

「っ！？

ぐはぁっ！？」

踏み込みと同時に衝撃を感じる。

そのまま、きりもみしながら吹き飛ぶ。

『良くきりもみする日ね。』

「んなこと言ってる場合じゃないっ！！」

アイシテル、形態変更！！
フォルムチェンジ

『了解！』

鎧が霧散し、服が展開する。

その服はヒラッとしてまさに近接戦をする魔法使いという感じである。

標準装備から高速戦闘用に切り替えた形態である。

「ブリッツモード展開!!」

『またまた了解!!』

ブリッツモードは高速機動戦闘用の形態である。

アイシテルのフォームチェンジはフェイトやなののようにデバイスではなく術者のバリアジャケットの変更を行い二種のバトルフォームをとる。

先ほどまでの防御型兼汎用型。

今の鎧を剥いだ攻撃型兼速度型。

響の体から黒い魔力が迸る。

響の魔力ランクはS+。

たまたま膨大な魔力を内包して生まれたのは単純な幸運^{ラッキー}である。

「しっ!」

またもや超速接近してきた山田君をひらりとかわして、ナイフを叩き込んだ。

「カートリッジロード!!」

クロスブレイドッ!!」

厨二くさい名前はなのはの世界ならではである。

ナイフによる双刃が叩き込まれ、山田君が地面に叩きつけられるがすぐに体制を建て直し、周りの魔力すらも集め、山田君が砲撃を放つ。

「尾獣玉っ!!」

「当たるかつ!!」

「っ！！」
「っ！？」

響を狙った砲弾はなのはと戦うフェイトへ向かう。

「ちっ！」
「くそっ！！」

山田君は間に合わず、響が急いで間に入る。

「アイシテルッ！！」
『分かってるっ！！』
「カートリッジロードッ！！」
「はあああああっ！！」
「ミリオンブレイドッ！！」

瞬時に万を越えると思わせるほどの剣閃が山田君の砲弾に飛来する。
そして爆発。

余波を受けたフェイトは吹き飛び、なのはも吹き飛ぶ。
爆発の中心地に近い響はバリアジャケットが破れながらもなんとか
防御する。

しかしその頭上に影がかかる。

「一応礼は言っておく。助かった。が、慈悲はかけん。」
「っ！？」

下手をすればなのはも巻き込んでいたのにも関わらず、その動揺
を押し隠し、すぐに戦いの組み立てを行う。
失敗したからといってそれにいちいちショックを受けていたら、き

りが無い。

割り切ることの出来る人間。

アイシテルは警戒を高め、響のサポートをする。

『戦りなれてるのねっ!!』

プロテクションっ!!』

「無駄っ!!」

さらに尾獣玉を放つ山田君。
直撃を受けて堕ちる響。

「がああああっ!!?」

『きゃああああああっ!!?』

土の柱を作る。

そして降り立つ山田君。

なのはは少し恐怖を交えた表情で山田君を見た。

「・・・ちっ。調子に乗りすぎだな。」

とぼやく声は小さく誰にも聞こえない。

「ちー君?」

「ああ、そうだよ。なのは。俺が怖いかい?」

全身紅い姿。

目は丸く向き出て怪しく光り、6本の尾は次の獲物はまだかとも言うようにつごめいている。

しかしその目は距離を開けられることに対する恐れを内包していた。

なのはは首を振る。

「うっん、そんなことはないよ。ちー君だから。」

「・・・ありがとう。」

軽いラブコメもどきを繰り広げている山田君に爆発して死に腐れと言いたくなった響であるがそんなことを言うのも辛いほどの一撃を受けた。

「・・・ちー君、それはやり過ぎじゃ・・・」

なのはが血まみれの響を見て言う。

「ああ。分かってる。申し訳ないことをしたよ。加減が難しかったとはいえ、やり過ぎた。」

今治す。・・・さっきの借りがあ。今回は見逃す。二度と余計なことはするな。」

山田君のチートによる医療忍術で傷が癒える響。

ここで反撃をしたとしても完全な患者だ。

結局ボコられることになった響である。

ちなみにさっきの砲撃はフェイトに直撃したとしても問題は無かった。

山田君の魔法は敵対者以外は極端にダメージを減らすというチートを貰っている。

強大な力を願うだけではなく、それによる周りの被害も考えている山田君。つくづく良い人感が出てる。

今更であるが山田君のチートは魔力によるNARUTOの世界の忍術の再現と魔力ランクSSS+。

さらに味方に対するダメージ緩和効果というご都合能力。この三つ

である。

「……。」

響はなんだかどうでも良くなり、なのはの警戒の入り混じった視線を背に受けて泣きそうになったがそれを押しとめる。

「……。」

もう印象の回復は望めないだろう。

「……。」

よって、響は何も言わずに立ち去る。

響の目標がここで変わる。

せっかくのおっぱいチート。

せっかくのイケメンチート。

せっかくのデバイスチート。

全て嫁を――あわよくばハーレムを作ることを念頭にしたチートであった。

が、それらを全て。

目の前の男にぶつけることにした。

「いずれ貴様の胸を必ず揉んでやるからな。」

意味不明な捨て台詞を残して去っていく響。

シリアスなのに、正直失笑物である。

あまりの意味不明さに山田君は首を傾げ、なのはは身を縮こまらせた。

あの一件を思い出したのだろう。

響は再度内心で憤慨しつつ、高町さんをびびらせたかったんじゃないのにと考えながら空を舞う。

ちなみになぜ揉むと言ったのか。

響のおっぱいチートは自在に胸を操る。胸を出現させ、男にとっての最高の嫌がらせをしてやろうとしたのだが、もちろんのこと伝えるはずも無く。

その間、フェイトはちゃっかりジュエルシードを回収。

響と山田君の魔力や技術を鑑みて、一番効率のいい方法を取っていた。

アイシテル、愛してる

「・・・はあ。」

ため息が出る。

それもそのはず。

響は憂鬱である。

『・・・どうする？』

「・・・何が？」

『もう彼女たちに関わらなくて良いんじゃない？』

「・・・ですよねー。」

『気分転換に温泉にでも行く？』

「・・・そうですねー。」

『そんな泣かないでよ。』

「・・・。」

『黙らないでよ。』

「俺、何しに来たのだろうか？」

『誤解したり誤解されたり、ふんだりけったりだもんね。』

正直面白——いから私的にはいいんだけどさ。』

「そこは一応でも本音を隠すところだよな？」

「・・・まあいいけどさ。事実滑稽なことになってるには違いがない。」

「・・・ぐず。」

『それより月村さんのパジャマをもってどうしたの？』

「どうやって返そうかと思って。」

『それを口実に謝るとか？』

「うん・・・まあ。」

『止めといたら？』

あれだけショッキングなことになってる上に響の前の性格からする

と、近づいたためのキャラを演じた・・・と思われてると思うよ？
それに月村家ならパジャマの一つや二つ、すぐに買い直してと思う。
」

「シヨツキングな方は100パーセント貴方のせいですけどね!!」
「ちよつと登場のさせ方に凝っただけじゃないの。」

「それが今の状況を招くキツカケになったと思うよ、俺。・・・遅
かれ早かればれることにはなっただと思うけど・・・」

『過ぎたことをぐちぐち言わないっ！』

「・・・私だつてさすがにふざけすぎたつて反省してるから!!」

「・・・はあ。温泉。行こうか。」

『よしよし。それでいいのだよ。』

「・・・。」

こうして響達は温泉に行くこととなる。

またもや彼女達と会うという事も知らずに。

母親の文香と温泉旅行に来た響。

早速、こそこそ隠れることになった。

「母さん、ちよつと売店でお菓子買ってきて良い？」

「あら？おなか減ったの？」

「うん。」

「あまり沢山買ったらダメよ。晩御飯が食べなくなるからね？」
「分かってるよ。」

というやり取りの後、さつそく売店に来た響。だつたのだが。
そこにはきやつきやつふふと楽しそうにはしゃぐのは達。

「・・・狙ったと言うわけでは無いだろうな？」

『ノン！と応えておくわ。私もちよつとびっくり。』

「ていうかオマエは原作知らんのか？」

『・・・んー私ってほら。快樂主義者？』

じゃちよつと意味が違うかな？

面白いかどうかが第一だから、先に結末知ってたらつまらないですよ？

というわけで特に聞いてません。』

「・・・使えないな。」

『響もね。』

「俺も使えないな。」

『分かったみたいで何より。』

「フオローしてくれ。・・・パジャマを返すべきだろうか？」

『またそれかい。てか持ってきたの？』

「・・・一応、なんか持つてると安心して。」

『傍目から見ると変態よね。少女のパジャマを持ち歩く男・・・キモ。』

「・・・うるさい。自覚はしてるが、いまだ未練たらたらなんだ。もってたらなんか月村さんが“頑張つて！響なら出来るよ！”といつてくれてる気がする。」

『ちよつと様子見ていく？』

「・・・スルーか。」

『幻聴乙。惨め過ぎてデバイスの私も涙が流せるレベル。』

「流して見せる。」

『比喻表現だバカヤローこのやろー。』

「・・・分かつとるわ。」

『ほら、アホなこと言つてると見失うぞ。』

「・・・うん。」

響もアホらしくなったのか、アイシテルとの会話を切り上げて付けていく。

ちなみに憎^{にく}きあの男。

山田君もいるではないか。

こつそりディザスターブレイカーで打ち抜いてやろうかと思ったのだが、さすがに人の目がありすぎるしそんなことしたら殺されるかもしれない。

うん。不意打ちは良くないよね。

ビビりの響は怖^{こわ}気づいた。

「あいつら早速温泉に入るみたいだな。」

『そうみたい。ていうか、こうして見ると山田君、モテてるね。』

「・・・。」

『爪。痛くないの?』

「・・・え?

おわっ!?

いだあだだだああああっ!?

あまりの憎しみでつい壁に爪を立てていたせいか爪がはがれかけていた。血も出ている。

こんな時に便利なのがおっぱいチートである。

胸を揉むことで体の傷含めてリフレッシュ!!

・・・自分で自分の胸を揉むと言う残念な絵柄に対しては突っ込んではいけない。

おっぱいチートには三段階のレベルが存在し、第一が単に胸を弄る（もとい体の形態変化）、第二が胸を介しての治癒。これは第三が時の逆行による不老化。（原理的には第二も一緒に時の逆行による治癒だったりする。）

若返らせたりも可能。その逆もまた可能。

強力なチートである。が、かならず胸を揉まなければならず、ソレ

相応の魔力を消費する。

不老化を使う場合、魔力によって効果年数が決まる。響の全魔力を込めても約1年しか効果が持たないという微妙に残念仕様である。

「ふと思いついたんだが・・・」

『何?』

「このチートで成長、もしくは若返りをすれば問題ないんじゃないだろうか?」

『でも、山田君にはばれると思うよ?』

「そうなれば無駄に手の内をさらすだけになる。」

「また山田君おまえかつ!」

「つくづく邪魔者だな!!あいつはっ!!」

『でも・・・おっぱいチートの第一段階を応用すればバレナイかも。』

「なんだと!?!」

『あれ、胸を弄るってのは結局のところ体の形態を弄るってことだから・・・女になったり、全く別の生物になったりが可能だと思う。それこそ昆虫にだってなれるはず。』

「なっ!?!」

「そ、そんな便利機能がっ!?!」

『でも・・・胸や手が無い生物に変身しちゃうと戻れなくなるから気をつけて。多分、一度なっちゃうとどんな手を使っても戻れない。神様印の能力だし。』

「なっ!?!」

「そ、そんな恐ろし機能がっ!?!」

『私も詳しくは知らないけど・・・胸を揉むチートだから揉める様な胸が存在し、なおかつ胸を揉める様な手があり、胸に手が届く動物・・・ネコや猿とかそんなところかな・・・ま、おっぱいチートの“おっぱい”が人間のみなのか動物もありなのかまでは分からないけど。』

その温泉の旅館ではナイフを模したアクセサリーにちゅっちゅっしながら「愛してるウウウウウウウウウウウウウウウウウっ!」と叫ぶ子供がいると三代ほどに渡るまで語られたとかないとか。シュールである。

その後、ジュエルシードの反応があつたが、再度皆から敵対されるのは目に見えていたので響は何もせず温泉を楽しんだのであつた。

「あいつ・・・何しに来てたんだ？
・・・不気味なヤツだな。」

何気に感知技で響に気づいていた山田君。

こちらをじろじろ介入したそうに見ていたくせに何もしなかった。このことで何か企んでいるに違いない、と山田君により警戒されるのは言うまでも無いことだろう。

こうしてさらに誤解は深まるであつた。

誤解が深まっていくのは最早彼の天命であるのかもしれない。

アイシテル、愛してる（後書き）

ここらで誰もがわかったと思いますけど、アイシテルの名前は「愛してる」のカタカナ表示です。

もともとは愛していると打ち込んだのが、アイシテルとカタカナ変換され、それを見て「これ良い名前じゃないっ!？」とティンと来たのが始まり。

さらにはそのアイシテルの名前からこの物語の大筋もティンと来ました。

え？変な名前？

HAHAHAHA

このセンスを理解できない無いなんて、ちょっと頭おかーいげふんげふん。

冗談です。

さらに言う物語の大筋が出来るのと同時にちゃんとした理由付けもティンと来てるんですよ。

それはまあ見ていればなんとなく分かるかと。

この作品のメインテーマでもあります。

え？原作ヒロインとのラブラブはテーマじゃないのっ!?!って？

大丈夫。ラブコメは僕の生き甲斐ツスから。

それだけははずさねえっ!!

初めてのミッドチルダ

響はと言うと。

管理外世界のミッドチルダへと来ていた。

『え？』

なんで？』

「今更過ぎる疑問だな。アイシテル。」

『うん・・・まあ。』

「ふふふふ。どうして？」

そう思ったことだろう？』

『・・・うん、まあ。』

「ほら、聞いてごらん？」

どうしてこんなとこに来たの？って。

かもーん。りっすんみー。」

『うざキモいってこういうのを言うのかな？』

「そんなことを聞けとはいっくらんっ！！」

『・・・はいはい。で、どうしてミッドチルダにまで来たの？』

地球、ほつといてよかったの？』

「ふふふ、良くぞ聞いてくれた。」

『聞けって言うから・・・面倒くさいな、もう。』

「簡単な話だ。」

俺のことを誤解しまくるバカドモなど知ったことかっ！！

という真理にたどり着いたのだ！！」

『・・・それで？』

「は？」

『オチは？』

「いや・・・あの・・・」

『オチは無いの？』

「えと・・・その・・・あれだよアレ。」

『無いのね。つまらない男は嫌われー』

「いや、待てっ!!」

それで俺は気づいたんだよっ!!」

『何に?』

アイシテルはもちろんオチなどないことは気づいている。

理由もきつとなくなぐ前々からアイシテルに聞かされ、興味が深かった魔法の世界というものの典型。ミッドチルダ。ここに来てみたかったとかそんなところだろう。

端的に言うなら響をちよつと苛めて楽しんでいたのである。

余裕綽綽である。

しかし、次の響の一言で爆弾を投下された。

「アイシテルを人型にするのだっ!!」

『え?』

「俺はアイシテルが好きだ。

前回の一件でアイシテル以上の女はいないと気づいた。
なればこそ!!

おっぱいを揉んだりしたいっ!!

え、えええ、えっちなことかもしたいっ!!

だが、残念ながら、アイシテルはデバイスだっ!!

おっぱいも無ければ股間もない。

さらに言えば、むちつとした足も手を繋ぐための手も無い!!

その可憐な笑顔であろう顔を見る術もないっ!!

だからこそ・・・そうだからこそっ!!

俺はアイシテルの改造方法を知るため、ミッドチルダの無限書庫とやらに行こうと思ったのであるっ!!」

『ふえっええええええっ!!?』

「驚いてる声も良いっ!!」

ああ、これに表情が付けば、その笑顔や驚く顔で俺は昇天してしまうだろうっ!!」

『ば、ばか言つてー!』

「俺は結構本気だっ!!」

『・・・ま、また好きとか言つて・・・その、私デバイスだよ?』

「問題ない。仮に人型になれなくてもなっ!!」

『私・・・人型になつても子は残せないと思うよ?』

「ふっ!

愚問だな。

それもまた問題は無い。些細な問題だ。」

『からかつてる?』

「ふざけて愛の告白をするほど落ちぶれたつもりも無い!!」

『・・・』

「アイシテル?」

『・・・別に。勝手にすればいいじゃない。』

「えーっと・・・告白の答えとかは頂けないんでしょうか?」

『いや。』

「え?」

『イヤだつて言つてるの。』

「な?」

響が泣きそうになる。

『情けないし、ビビリだし、逃げ腰だし、誤解されやすいし、アホだし、馬鹿だし、少しナルシ入ってるし、イケメンといつても見た目だけだし、魔法の腕も下手だし、戦闘も弱いし、おっぱい揉む揉むって下品だし。銀髪でオッドアイで気持ち悪いし。』

「・・・ぐずり。」

響はさめざめと泣いてしまった。

『でも・・・その・・・ずっと私を好きで居てくれるって言うなら・・・考えてあげないことも・・・無いよ?』

無いよ?のあたりで響の眼下には黒髪黒目のツインテール美少女が小首を傾げて頬を軽く染めながらこちらを上目遣いかつ流し目で見てるような幻視が見えた。

鼻血を垂らす。

『ど、どうしたの?』

「いや、なんでも・・・でも本当にいいの?」
そのあれだけ言っておいて・・・」

『なんだかんだですつと見てきたんだから。貴方がどういう人間かは分かってるつもり。』

・・・デバイスを好きだって言うほどの変態だとは思わなかったけど・・・別に悪い気はしないし・・・どうせずっと一緒にいるんだから隣にいる形として、デバイスとして・・・道具としてじゃなくて・・・恋人として大事にされながらも悪くないかなあって・・・

「あ、あいしてるう・・・」

『キモイから鼻水拭いてよ。もうっ!』

「ずず、ごめん。」

『ちゃんと惚れるような男の子に成長してよ。』

「うん!

まかせとけっ!!」

『まかしといったら不安だから私も手助けするけどさ。』

「・・・あいかわらず一言余計だな、オイ。」

『それで、無限書庫に入るんでしょ?』

身分証明とか大丈夫なのかな?』

「ふっ。安心しろ。

俺は出来る男。

そこで身分証明書を売ってるオッサンから結構な高額で買い取った。この世界に来て稼いだ金がばーになってしまったが、これもアイシテルのためを思えばこそ。

痛くも痒くもない。財布には痛いけれど。」

「・・・怪しいとは思わなかったの？」

「何が？」

「・・・もういいわ。どうせ通れないだろうし。」

「何を言ってるんだよ？」

そろそろ行くぞ。」

「はいはい。」

もちろんのこと。

「だ、騙された・・・。」

『でしょう？』

「良い人だったのに・・・」

『身分証明書をその辺の人に売って歩く人間が良い人なわけないでしょうに・・・馬鹿のままじゃ、お嫁さんになってあげないよ？』

「ま、まてっ！

今のは何かの間違い、手違いで・・・」

『言い訳しない。』

とつと次の手段を考えて。」

「・・・うん」

ちなみに無限書庫には普通に立ち寄れた。

変な身分証明書を見せたがために引き止められただけだったのであ

る。

「なんとという無駄金。」

『アホ過ぎる……』

「まあ……高い授業料だとも思っただけ。」

『そうでなきゃやってられないわよ。』

無限書庫で調べていくと、デバイスの擬人化。

もとい人化は現在ではほぼ失われた技術だと言われている。

現存する人型デバイスは全てユニゾンデバイスといわれ、デバイス単体での戦闘やデバイスを術者が展開した場合の戦闘力の飛躍的な向上から需要や研究は盛んにされているものの、未だ一般化できるほどの報告はないとのこと。

現在は一部の試験機が研究所のいくつかに点在してるのみで、もちろんのことそういったところの技術が外に漏れるわけもなし。早くも手詰まってしまった。

「どうしよう?」

『気長に見ていくしかないと思うよ?』

「この……図書館ですか。」

響は無限書庫を見回し、げんなりする。

「……とてもじゃないがそんな気にはなれない。」

『魔法を使えば?』

「どんな?」

『グーグレ先生っていう魔法があつてね……』

さっそくその魔法で検索をかけてみると検索に引っかった本がひとりでにやってきた。

やったね！グーグレ先生！！

「便利すぎる。」

『ほら、とつと読む。私を人にしてくれるんでしょ？』

「おうともさっ！！」

日が暮れるまで読み続けた響であった。

一カ月後。

「こ、これだあっ！！」

ふむふむ・・・なにになに？

古代ベルカの夜店の書？」

『それだと訳し方が違う。

私に良く見せて。』

「うん。はい。」

『えーっと夜天の書・・・なるほど、確かに。夜天の主に守護騎士・・・・か。』

「で、結局どうすればいいの？」

『この手法だと、まず私の本体はナイフであることには変わらない。それとは別に依り代を用意する・・・人形に私の魂を移すって言った方がわかりやすい？』

「へー。」

『ナイフは心臓代わり。依り代は死なない操り人形って言うてもいいかも。作るのに半月はかかりそう。』

「・・・ふふふ、ようやくアイシテルと抱き合える日が・・・」

『・・・まだそこまで許してないんだからね。』

「それを許さないとどこまでだっていうのさっ!？」

『て、手を繋ぐ?それくらい。』

「なっ!？」

なんという生殺しかっ!!

俺がアイシテルに惚れてるのを知ってるくせにっ!!

『う、うるさいなっ!!

私だって初めてで恥ずかしいんだからそんなこといきなりできないよっ!!!』

「・・・うぐぐ・・・恥ずかしくてると言うならばまあ・・・許そう。」

『何様よ。嫌いになるよ?』

「ごめんなさい。」

『よろしい。』

というわけで

さらに半月後。

『・・・上手く行かないなあ。』

「うーむ。」

意外と難しかった。

それは当然。

仮にもミッドチルダを始めとした全次元世界の研究者がこぞってユニゾンデバイスを作ろうとしつつも汎用化には至っていないのである。

いくらチートデバイスによる作成とはいえど簡単なことではない。

『とりあえず一回帰る？』

文香ちゃんもいい加減心配してると思うよ？』

「・・・それもそうだな。必要な材料はすでに買い込んであるし。」

ちなみにミッドチルダのお金はフリーの魔導師として稼いでいる。ちよつとした家を買うほど稼げたのはひとえに響の魔力的な才能とアイシテルがあつたからこそだ。

『あら？もう帰っちゃうのね？』

『ええ、またこっちに来た時はよろしくお願いします。』

『はい了解。気をつけて帰ってね。』

『ありがとうございました。』

今通信している相手はリンディ・ハラウオン。

なにやら最近、事情のある子供を預かり、その子供と家族の裁判があつたとか。

もといテストロッサ家族である。

その家族のことに掛かり切りで忙しいところにフリーの魔導師として名前が売れ始めた響のことを聞き、クロノとか言う少年と一緒に仕事をしていた。

もっぱらクロノが指揮で、響が現場で動くといった具合だ。

さて、原作であるならば彼女は普通に仕事をしつつも裁判に臨んでいたはずだが、ここは現実。

裁判と言うのは法律と言う名の非常に厳しい決まりがある。

例え情状酌量の余地があつたとしても完全な無罪は厳しいと言わざるを得ない。それが社会である。

さらに言えば原作との相違点。

それは山田君によるPT事件の介入。NARUTOの漫画には穢土

転生と呼ばれる擬似的に死者をよみがえらせる秘術がある。

それによる反魂でアリシアテストロッサは生き返り、プレシアテストロッサは憑き物が取れたかのように放心し、ついでとばかりに山田君による「そげぶ」・・・すなわちS（説教して）ゲンコツでGEBU（ぶん殴る）によりプレシアは「フェイトを娘と見る」と言っ旨のオリヌシくさい言葉を頂いたが、結局それだけは上手くいかなかったらしい。

そんな経緯の元、テストロッサ家族を助けるために奔走しているのがリンディというわけだ。

もちろん原作ならばフェイト1人分であるのに対し、さらに2人分の処理が待っている。

もともとはプレシアは管理局に命じられた実験のせいで娘を失ったことが原因であることもあってなんとか軽い罪にまで押さえ込めそうなのだが、もちろんそれには多大な面倒ごとがある。

そこで頑張る以上、仕事にかまかける暇は確実になくなるわけで体を酷使したリンディに対し、クロノが艦長代理としてリンディの仕事の全てを肩代わり。とはいえクロノもまた裁判に関することで艦を開けることが多く、それでも難しいものがあつた。

そうなるとリンディの艦の主戦力であるクロノが現場につけなくなるため、その補填としてフリーの魔導師である響が雇われることという経緯がある。

あわよくば人手不足解消のため、響をそのまま雇うつもりでもあったりもするが山田君が管理局勤めである以上、響は入隊するつもりは無いだろう。

『実物がみればなあ・・・』

「博物館にあるかな？」

『いや無理でしょ。夜天の書ともなれば少なくとも一級ロストロギア指定は受けるだろうし、仮にあったとしても手にとって見ないことには……ていうかアレ、今は名前を変えて色んな主を転々としてるみたいよ?』

「……ふう、しょうがないか。仮にあったとしても……サーチなんてものをかけたら……」

『逮捕ね。』

「……気長にやるしかないんだな。」

『残念ね。』

「ま、いいよ。これでもう一つの目標に全身全霊を向けられる。」
『何?』

「聞いてたろ?

ヤツの胸を揉んで、無駄に巨乳にしてやるのさ。」

『……本気だったのね。』

「もちろん。」

『殺されるかもよ?』

「今は腕も上がった。むしろこっちが殺してやる……のは日本人である俺には無理だが、ぶっ飛ばしてやる。」

『いつそのことジュエルシードを回収してそれに願えば良かったかもね。』

「なん……だとつ?」

『記憶の改竄も可能だったかも?』

「……。」

『泣いたつてもう遅いよ。』

「……ば、馬鹿なことを言うな。そんな卑怯な手^{チート}で自分の犯した責任から逃げるつもりは毛頭——」

『あ、あんなところにジュエルシードが!』

「な、何ッ!?

どこだっ!?!?」

『……責任がなんだって?』

「……。」

響はがつくりと膝を付く。

「アイシテル……俺に恨みでもあるのか？」

『安心して。好意しかないよ？』

「……からかってるのは分かるけど、それでもドキッとしてしまう自分が憎い。」

『……結構本気なんだけどなあ。』

「何？」

『なんでも。』

なんだかんだでようやくラブコメを繰り広げ始めた響である。
相手は機械であるが。

こうして初めてのミッドチルダ旅行は幕を閉じる。

初めてのミッドチルダ（後書き）

因みに本来のそげぶは別アニメの「その幻想をぶち壊す（ぶち殺す）」の略称です。

そのセリフを使う主人公的にこの意味でも問題ないかなーと。

えたーなるろりーたあたつく

地球に帰ってきた頃。響は驚愕した。

帰って一息と思ったら、いきなり紅い服の柄の悪い美少女に絡まれる。

おじいちゃんおばあちゃんのスポーツ。ゲートボールに使うゴルフのパットみたいな物。すなわちスティックと呼ばれるカナヅチを長くした物みたいなものを持つてである。

ちなみにゲートボールとは高齢者のスポーツとして浸透しているが実際はそういった意図なく考え出されたスポーツで、五人一組が基本となる。GBボンバーと呼ばれるいのまたむつみさんが描く漫画ではゲートボールを題材に描かれている。

そんなことはさておき、響は既視感を感じた。
そうこれはいつぞやの鎌を持つ少女と同じだ。

何かよこせと言われるに違いない。
武器を片手にやってくる。

ドウ見ても友好を深めようと言う気では無いだろう。

もしかしたら愛の告白？とちらつと昔の響の思考が漏れ出たが、そんなことがあるわけがないとかぶりを振る。

もちろんそんなはずが無い。

響は考えた。

今回は何も持っていない。持っているとしたらアイシテルのみ。
また何かの誤解だろうか？

そんなことをのんびり考えながら少女の言葉を待っていると。

「てめえのリンカーコアを渡せ。」

大人しくしてれば痛い目には遭わせない。」

「は、はあ・・・」

りんかーこあとは？

なんじゃそら？

響の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

今までの経験的にきつと何かの誤解だろうと思った響はまずは話をすることにした。

痛い目に遭うのはゴメンだ。

「まあ待ってくれ。何が欲しいのか良く分からないんだが・・・りんかーこあつてなあに？」

「ああん？

おめえ・・・それだけの魔力を持っておいて関係者じゃないって言うのか？」

「・・・なんの関係者？

とりあえず何かの誤解だと思っんだ。まずは落ち着いて話をーー」

「まあ良い。

だつたらそれはそれで手間が省ける。」

「・・・いや、自己完結されても・・・きつちり誤解を解いておかないと大変なことになる気がする。というわけでちゃんと話をーーどわあっ！？」

問答無用でヴィータはグラーファイゼンを振るう。

一応非殺傷設定であることから面倒になって気絶させることを狙ったようである。

・・・ハンマー状の武器を扱いながら非殺傷というのもどうなってるのか良く分からないが。

「じゃかあしいっ!!」
「ぐっ!!」

そのままグラーフアイゼンを振りぬくヴィータ。
障壁を突き抜け、響は瞬時にアイシテルをナイフに。
それで受ける。

「へっ!やるじゃねえか。

腑抜けかと思えば・・・アイゼンっ!!」

『カートリッジロード。』

ハンマーフォーム、シューター。』

ヴィータがどこからか円球の弾をとりだし、それを投げる。
そして弾をグラーフアイゼンでぶっ叩いて相手目掛けて射出する。
響はアイシテルをセットアップして、西洋鎧を身にまとう。

「・・・ちっ!」

『カートリッジロードッ!』

剣で受け、弾き、斬り飛ばす。

黒い魔力が迸り、その剣は黒い輝きを増す。

「暗黒的なエクスカリバー!!」

名前にツツコミをいれてはいけない。

下手に厨二な名前よりはマシだと思われる。

ロングソードとグラーフアイゼンがぶつかり、火花が散る。
魔力で鍛えてるのにも関わらず、ヒビが入るロングソード。

魔力強化を行っていないければ玉を全て弾いた段階で折れていただろう。

攻撃力が高い。
そう思った。

「はっ！」

「てめえも古代ベルカ式を使ってるのかっ!!
意外と見所があるじゃねえ・・・かつ!!」

「そらどうも・・・いだああつ!!？」

「なんつーバカちからっ!!？」

「てめえが軟弱なだけだ。」

剣はいともたやすく折れ、響にハンマーが襲い掛かる。
甲冑がなければそれなりの怪我をしていた。

「・・・ところでりんかーこあって何？」

「はあ？まだとぼけてんのか？」

「それとも本当に分からないのか？」

「・・・アイシテル、知ってなくちゃ不味いの？」

「別にそんなことは無いと思うけど・・・早い話、魔法を使うために必要な器官のこと。」

「響はそれを狙われてるみたい。」

「はよ言えよ。無駄な恥かいちゃったじゃん。正直それをお渡しして帰ってもらいたいんだけど。」

「うーん。でもリンカーコアを取られると最悪魔法が使えなくなるよ?」

「・・・マジデ？」

「少なくともそれ専用の機関に入院することになるね。」

「・・・そうなん？」

「でも痛くしないとか言ってたっけ?」

『いや、痛いかは分からないけど・・・一応内臓の一種みたいなものだからね・・・なんの影響も無いってのはちよつと樂觀的かな？内臓を引き抜かれて何の影響も無いなんてことは無いでしょ？少なくとも私の知る方法だと後遺症が出るかな・・・』

「おし、逃げるか。」

『それが上策ね。相手が女の子だとやりにくくもあるでしょうし。』
「全くその通りだ。」

そんな会話をしつつもヴィータを凌ぐ響。

一応、チートデバイスのアイシテルの性能をフルに使えば勝てることは勝てるのだが、勝つ意味が無い。

それに相手だつて本気でやっているというわけではあるまい。

響も知らぬ奥の手を持っているかもしれない。

逃げるのが一番無難と言うものである。

「降りかかる災厄を、我が身に宿し、全てを屠る悪意の牙
デザスター・・・ブレイカアアアアアアアアッ！！」

周囲の魔力素を急激に収束、圧縮し、打ち出される黒色の激流。

「なっ！？これほどの大技をこの短時間に！？」

『カートリッジロード。バリアブル。』

ちなみにコレは見た目が派手なだけの目くらましであり、ゆえに即発射が可能だっただけである。

まんまと引つかかったヴィータは勝ち誇るが、すでに響はどこぞへと消えていた。

「はっ。見た目に反して大したことねえな・・・って、ん？
・・・くそっ！！

めくらましかっ！！

あの野郎っ！！次にあつたら覚悟しろよっ！！」

『帰りましよう、マスター！』

「・・・ちっ、分かったよアイゼン。はやてが心配するしな。」

こうして逃げただけなのに響は敵対視されていた。

逃げるに敵対視されるであろう性格の人間（守護騎士）はもう一人いる。

めげずにがんばれよっ！相馬 響っ！！

ブッシュトラップ

『そういえばグラーフアイゼンと言えば、鉄槌の騎士と呼ばれた守護騎士のデバイスだった気がする。』

「は？」

唐突に何を言ってるの？」

『ほら、夜天の書についての本を見つけたでしょ？

そこにそう書いてあったのよ。』

「ふーん。それで？」

『だーからー。彼女達を撃退。その後をつけていけば夜天の書を見つけられるかもしれないってこと。』

「ほうほう。なるほど・・・ってバカ言うなよ。

そう都合よく見つかるわけ無いだろ？

漫画の読みすぎだ漫画の。たまたま名前が一緒だったとかの方がまだ説得力があるわ。」

『響が言うなっ！』

「・・・試す価値はあるかもしれないけどさ。このままだとアイシテルの擬人化は下手をすれば20年後とかになりかねないし。」

『一応言っておくけど、何も無いところから20年前後で守護騎士プログラムを作り出すなんて普通は不可能だからね？』

「はいはい、分かってます。アイシテルは凄いつ！」

可愛いっ！！格好いいっ！！」

『馬鹿にしてるでしょ？』

「少なくとも可愛いは本心だ。」

『ふーん、なら許すけど。』

「そこは照れて欲しかった。」

『それよりもどうするの？』

「どうもしないってば。そもそも戦うのは勘弁。理想を言えば横から掻っ攫うのが一番。あれほど強い人間ともなると多分原作組みの

誰かでしょ？あんなモブ今までに一度も出会ったこと無いし、キヤラ濃いし。主人公と戦わせて撤退するところか、主人公組みとやりあってる隙に彼女を捕縛して詳しい話を聞こう。敵ならば彼女を捕縛しようとしても少なくとも高町さん達は敵に回ることはない・・・
と思いたい。」

『漁夫の利ってやつ？』

・・・主人公にはなれないタイプね。』

「ほっとけ。」

なんだかんだで彼はこの物語の主人公ではあるのだが。

響達はというと夕食をとりつつ、自宅でのんびんだらりと過ごしていた。

母親はすでに魔法については知っているため問題は無い。

当初、魔法もといデバイスが普通に売られているものと思っていたため、普通に使っていたのだ。

それを見て、最近の玩具はすごいよねえとつい最近まで思っていた文香も文香だが。

この親ありにしてこの子ありというやつだろうか？

一応響は前世の親の記憶を持っているのだけれども。

「何の話かは分からないけれど、悪いことはダメよ。」

「大丈夫、母さん。そんなことしないつもりだから。」

「つもり、じゃなくてダメよ。」

「分かってるって。」

『で、じゃあ待つのか？』

「おうさ。伏して機を待つ・・・ってね。」

『名言臭いけど、別に名言じゃないね。』

「おわーっ。ドンパチやってるなあ。」

『なのはちゃんを助けなくていいの?』

どうやら赤のゴスロリ少女。ヴィータになのはが襲われている。

響は黙って隙をうかがうのみ。

「助けに入って、まとめて撃墜されるフラグですね?わかります。」

『・・・卑屈になりすぎでしょう。』

「こっちに残して置いた厨房からの映像・・・見ただろ？」

お話とか言っておいて友達になりたがってた相手を全力で撃墜するんだぞ？

正気を疑うわ。子供は残酷だって良く聞くけど、それを目の辺りにしたね。戦慄しました。確かに可能性は低いだろう。性格的に。だがアレを見た後だと彼女ならやりかねないと思わせる何かがある。」

『で、堕ちるフェイトを助けた山田君が何気に好感度アップと・・・』

『

「妬ましい、妬ましい、妬ましい・・・三段活用。」

『活用されてないよ。』

「しかも撃墜されて置いて普通に友達になろう的なことを言っただけを了承するあの金髪少女・・・フェイトとか言っただけ?日本語訳で運命を意味する名前、親が厨二としか思えない。というのはともかくとして、あのフェイトとやらもすぐに仲良しこよしじゃない?なのはが撃ったスターライトブレイカーとやらで服が破れてたから・・・殺傷設定の収束砲喰らっただよ?」

それを受けておいて友達になるとか・・・心が変態的なまでに広いか、もしくはDMとしか思えない。

見目麗しいというのに、変態だったんだ。今更ながら深く関わらな

くてラッキーだったね。」

『どこことなく悔しさがにじみ出てるけど？

あのフェイトとか言う女の子にまで好かれた山田君に対する負け惜しみにしか聞こえないよ。』

「そ、そんなこと・・・あるはずないだろ。」

『ていうか、私が好きなんですよ？

浮気は許さないからね。』

「ああ、分かってる。例え今更高町さんや月村さんが“二番目でもいいのっ！！私を好きになって”と言ったとしても俺はことわー

ー

『それは無いから私としては安心ね。』

「・・・。」

『ほら馬鹿な話はここまで。決着がつきそうだからセットアップし
といて。』

「夢を見るくらいいいじゃん・・・せつとあつぷ。」

響の西洋甲冑が出現する。

毎度の事ながら脱げる。

ロングソードを抜く。

このロングソード。一応バリアジャケットの一部として展開されているため、バリアジャケットと同等の耐久性を持つものにも関わらずにちよいちよい折れる。

周りの人間がどれほどチート性能なのかが分かるというものである。いまや魔力を纏わせないと使い物にならない。

「その辺の魔導師ならこれで十分なんだけどなあ・・・まあいいや。いくよ、アイシテル。」

『ちゃんと覚悟決めて、ちゃっちゃんと攻め込まないと援軍が来るからね。』

「わかつてる。」

『目標は？』

「それもわかつてる。」

今回の目標は鉄槌の騎士・・・もといあのスティック使いの少女の捕縛。そして離脱。」

『おっけー。んじゃ・・・カートリッジロード。』

なおかつブリッツフォーム！！』

鎧が離着^{バージ}。

ヒラッとした服装に変わり、加速する。

なのはを倒し、本を構え、油断している今がチャンスだ。

なお、なのはに対する誤解はもう解くことを考えていないため、この件で助けが来たと思われるも、むしろまた変な誤解を受けることになるっても問題ないと考えている。

ゆえにためらいはない。

「暗黒的なエクスーーっつとやばっ！？」

大きな魔力反応が2つと小さな魔力反応が一つ。なのはへ飛来する。それを見て瞬時にバックに下がり、魔力を抑えて隠れる。

「・・・は、早すぎるだろ・・・」

『どうも何かの手段で転移してもらったみたいね。』

「そういえば高町さんが主人公だということを忘れていた。主人公のピンチに仲間が助けに入るのはお決まりなのに・・・すっかり忘れてた。くそう。」

『悟飯が死にそうになった時にピッコロさんが助けに入るようにね。』

「ふっ、そこであのシーンを持つてくるとはオヌシもやるのう？」

『いえいえ、オヌシほどでは・・・で？』

「どうするの？」

「切り替えが凄いつすね。

・・・どうしようか？」

「今出ていっても・・・」

「うん、まあ言わなくても分かる。

確実に面倒だよ。山田君もいるし・・・少なくとも彼は俺を重点的に狙ってくるだろうから、捕縛どころじゃないな。」

「主人公組みが撃退するまで待つ？」

「・・・そう簡単に後をつけることが出来るとも思わんが・・・それ以外方法もないしね・・・」

「あ、敵方の援軍もやってきた。」

烈火の将シグナムと盾の守護獣ザフィーラだ。激しくバトルをおっぱじめる2人。

「ますますつけるのが難しくなったね。」

「・・・今回は退こう。あいつら怖い。」

普通に剣で切り結ぶフェイトとシグナム。そして殴り合うフェイトの使い魔アルフとザフィーラ。

正直この乱戦の最中に入るのは気が引けた。

「でも弱いみたいだよ？」

「弱いつて？誰が？」

「あの守護騎士達。」

多分、まだ夜天の書が覚醒して無いからじゃない？
今ならまだ叩ける。」

「・・・あれで？」

響はアイシテルから目の前の激戦へと視線を戻す。
そして逸らす。

『古代から戦ってる騎士たちが、いくら才能があっても10にも満たない子供にまともに戦う必要があるワケないでしょ。』

本来ならとつくに潰されてる。カートリッジの有無もあるし。』

「へえ・・・じゃあなんで？」

『だから彼女達シグナムたちが弱いって言ったの。覚醒して無いから主からの魔力の供給が不十分。』

多分魔力ランクで言えばCかDあたりね。』

「・・・え？それで互角に・・・というか推し始めてるっていうのか？」

『戦闘経験と技術、デバイスの性能差・・・これでカバーしてるみたい。とんでもない力量よ。だからこそ夜天の書を確保する機会は今を置いて他は無い。いつ完成させられるかも分からないし・・・チャレンジは出来るだけしておくべき。どうする？』

「・・・どうするも何も時間制限があるなら参加するしかないだろう・・・そんなのが四体。ぞつとするな。今の内に夜天の書のことを聞かないと・・・」

ここらで、なぜ素直に話をして夜天の書を見せてくれないのかをたずねないのか？

と気になった人もいるだろう。

が、夜天の書と主はいわば彼ら守護騎士にとっては自身の身よりも大事な存在。

そんな存在にあわせようとするはずもないし、ヴィータという名の話が通じない前例がある。

とてもじゃないけどその手は使えないと判したのだった。

こつして響はただひたすらに機会を待つことにした。

ただただ^{フッシュ}伏して。

緑のやつ

響が出て行くタイミングをうかがっていると、どうやらヴィータが持っていた夜天の書。もとい闇の書が無いことに気づく。

「・・・もしかしてなくしたのか？」

「・・・なんとも言えないね。仲間に預けたのかもしれないし。」

「そういえば守護騎士って四体だったよな？他の2人は持っていない・・・というところを鑑みるに・・・」

「確かに本で見た限りでは四体ね。」

「残りは確かサポート系だったはず・・・捕縛のチャンスだな。主人公組みと集中してる今が最大の勝機かもしれん。」

気配と魔力を極力隠蔽しつつ搜索しよう。

山田君はなぜか動く様子が見れないし・・・」

「彼は見てられない時だけ手をかすみたいね。・・・やたらと原作介入したからといって必ずしも良い方向に動くとは限らないわけだから、主人公のことを第一に考える傾向のあるオリヌシとしてはテンプレな動きと見れるでしょう。」

「うつむ・・・原作を知っていればこちらとしても山田君の動きがある程度予測できるのだけど・・・無いものねだりをしてもしかたないか。とにかく、三人まで来てるってことはもう1人も来てないこともないだろう。そして戦闘には邪魔な夜天の書を残りの一人が預かっている可能性が高い。あわよくば本を手に入れられる。」

「即時、サーチャーで解析してから返却、離脱・・・ね。」
「おう。」

こうしてアイシテルと響が作戦の細かい部分を詰めて言ってる間も響はブリッツフォームのまま、ビルからビルへと飛び移っている。魔法で飛ばないのは少しでも見つかる可能性を低くしたいためだ。

派手にドンパチやっている今なら変身してるだけの状態で見つかる心配はほぼ無いと見て良い。

「サーチをかけることが出来たら良いんだが・・・さすがにバレルだろうし。」

『屋上とか見晴らしの良い場所で彼女達の戦いの様子を見てるかもよ?』

「いやいや、さすがにそんな馬鹿な真似・・・」

そんなバカな真似をしちゃった緑の騎士服を来たシャルを響が発見する。

シャルはすっかりさんなのだ。

普段はしっかりしてるけど時たま失敗する・・・そんな雰囲気がある。

『バカな真似しちやってるね。』

「・・・いくらなんでもあんな目立つ場所に突っ立ってるわけが無い。

古代からの騎士だぞ?

相手からどうぞ見つけてくださいなんていうことはしないだろう。

おそらくアレは囀の分身とか幻影とか残像とかそんな感じ。」

『そうかなあ?』

「そうだよ。だからこの周辺で囀を狙うやつをさらに狙う・・・そういうのが居るはず。」

『じゃあこの周辺を重点的に探すの?』

「・・・いや、残念ながら時間が無い。

見てくれ。あっちも決着がつきそうだ。」

響はフェイトたちの方を見た。
が、大きな魔力反応を感じる。

「これは・・・」

『なのはちゃんのスターライトブレイカーね。あれはまともに喰らえば一撃で沈んじゃうだろうな・・・』

「毎回見るたび思うんだけど、コレって俺のディザスターブレイカーのパクリだよな？」

『どちらかといえば響の方がパチモンでしょ。存在自体が。』

「ちよっ！？どうしてそういう酷いことを言うかなっ！？」

『そういう意味じゃなくて、本来この世界にいなかった人間だったよ、って意味でね。』

「確かに・・・そういわれてみると・・・」

と、話してる間にもスターライトブレイカーのチャージが行われ続ける。

「今から戦闘してたら、一応管理局づとめのフェイトとやらにバレて管理局にも目を付けられるだろうしなあ・・・」

『下手したらリンディさんたちに迷惑かけちゃうかもよ？』

私たちと一緒にいたフリーの魔導師が犯罪者と何かドンパチやってる！ってなるとね。』

「・・・それは遠慮したい。恩はあれど恨みは無いし。」

『もしくはここから山田君も纏めてディザスターブレイカーでさらっちゃう？』

「・・・それは望むところだが、無理せずもう一人の騎士の姿を確認してつけれそうならそいつをつけて拠点だけでも見つけておこう。ばれないよう、極力魔力を使わずにサーチを行ってくれ。」

『無茶言っね。まあ、これだけ魔力素が溢れてる今ならなんとかできないことも・・・よし、捉えた・・・っていうか、やっぱりアレ本体みたいだよ？』

「・・・バカなっ！？」

響は悪役がもつとも多く使うであろうセリフでトップスリー以内には入っているであろうセリフを言ってしまうほどに驚いた。
ちなみに他の二つは「なん・・・だっ！？」、「まさかっ！？」である。

響から途端に小物臭がした瞬間であった。

いや、もとより大物感など微塵も欠片も無いのだが。

「・・・。」

『バカだったみたいだね。』

「・・・ふふふ。なるほど。」

『ん？』

「本来なら巧妙に隠れてるはずのところを敢えて姿を現すことにより、相手の虚を付く。

見事と言っほかあるまいな。さすが古代から生きているだけはある。まさかこの俺がこうまで手玉に取られるとは終ぞ思わなかったわあ！！」

『・・・言い回しが厨二。』

「だまらっしやいつ！！」

とにかく、まんまと緑のやつに嵌められたっ！！

この借りは必ず返すぞっ！！緑のやつっ！！」

『緑のって・・・まあ緑だけだね。で、どうするの？なんか山田君にどうのここの言われて、まさかっ！？って顔してるけど。』

「悪役名台詞トップスリーのセリフだな。」

『は？』

「いや、なんでも。」

・・・山田君の目的がいまいちよく分からないが、とにかくここはなりゆきを見守ろう。」

『またボコられるかもしれないもんね。』

「・・・うるさい。もう負けん。」

ミッドチルダで実戦を経験したからな！」

『それだけで勝てるほどヌルい相手じゃないけどね。オリヌシにありがちな能力を扱いこなして予想外の使用法……なんてのを考えてると思う。』

「はっ、そんな小手先の技。おそるるに足らん。」

『じゃあ纏めてぶっ飛ばす？』

「ぶっ飛ばさん。忘れがちだと思うんだが俺は地球人で日本人。すぐに武力交渉に頼るのはどうだろうか？それは日本人として正しい選択肢？」

俺はそうは思わないな。力を持っているからこそその力を律する強靱な精神が必要であつて、今この場面で一番重要とされる力は武力なんかじゃない。もちろん、やりあえば二人まとめてボコることができる。が、そんなことをしてもしも俺の知らない奥の手があつたりしてなんだかんだで相手2人が共闘し始めて、さらには向こうにいる高町さんたちも加わつての総攻撃を受けかねないわけで、あれだよ。やはりここは日本人らしく交渉、もしくはこっさりあとをつけていくのが一番の最良と思われるのだが、いかがだろうか？」

『えーつと……意識すると負けたとき殺されかねないからそんな後の無いような状況で戦いたくない。それでおけ？』

「ニュアンス的にはそうだが、厳密的には違う。」

『だからビビってるんでしょ？』

「ビビってなんかないっ！そう、これは高度に戦略的な手段なんだっ！アイシテルにはまだ分らないだろうけどなっ！！」

『……はあ、どうしてこんなのを好きになりつつあるんだろう？』

「ん？なんて？今好きとか言わなかった？

え？何っ！？まさか浮気かっ！？」

『……なぜそれだけでその発想に……ていうかこういう時って飯に思うにしても“もしかして今、聞こえないような声でどうして好きになっちゃんだらう？みたいなことを言ってたんじゃないか？”って思わない？

にぶちん主人公・・・ではないだろうし、多分。』

「・・・ラブコメの見過ぎです。正直引く。」

『うん、決めた。人化した後は、まず私が響に対してなんだかんだいいつもこれくらいは・・・とか良い雰囲気を出しながら、色々となぎらつてあげようかな〜とか思ってたんだけど、まずするのは響を血祭りにあげることだね！ちなみにギャグ補正なんていうご都合主義は無いから、覚悟しろよ。でも安心。仮に死に掛けても魔法があるから大丈夫、加減の必要ナッシン。マジ殺すから。半殺すから。・・・ていうかこういうときこそ自意識過剰スキルの出番でしょうに。』

「え、っ！？いや、まてっ！？」

意味が分からない、というかそんなアイシテルも俺は好きだよっ！？」

『今更フオロー遅いから。絶対絶対ぜーったい、ぶっ殺す。』

「・・・。」

人化が可能になった暁になるころには忘れてくれることを祈る響だった。

とかバカなことを言っているとシャルマルが引くことを決め、他の守護騎士達も撤退を決めたようだった。

山田君が「っ！？・・・なのは魔力が急激に感じられなくなっていく・・・まさか、俺が介入して未来が・・・いや結果的には変わってない。が、どういうことだ？」という呟きを漏らす。

山田君は考えたのだ。

今はA'sのイベントに入っている。

八神はやてと闇の書事件に突入したところ。

山田君としてはこの問題を非常にデリケートで危ういバランスの元ハッピーエンドに近い形に収まると言うことを正しく理解してる。下手をすれば一つの世界が滅亡する。せっかく概ね良い方向で終わ

るはずなのに、介入によってその未来が悪い方向へ変わるのを恐れたのだ。そのため今回の件では特別介入するつもりは無かった。が、さすがに、なのはリンカーコアを奪われるのは見過ごせない。リンカーコアを集めると言うだけならば何もなのは達でなくとも良い。

助けてあげたいと言う考えの下、遠隔でシャマルがなのはのリンカーコアを奪うはずだったのを妨害に走ったのが山田君の思惑である。色々な術者のリンカーコアを奪えば奪うほど闇の書に刻まれる魔法の種類は増えていく。

なのはの強力な魔法、スターライトブレイカーをリンカーコアと同時に蒐集されないために妨害するのもありだと考えたのだ。さらに最終局面で闇の書の管理人格を下し易くなるとも考えている。

だが、結局なのはのリンカーコアは奪われてしまった。当然である。

向こうには実質戦えるのがアルフとフェイトのみ。

残りは補助役のユーノ。怪我人のなのは。

しかしフェイトもアルフも押され、ユーノは戦いは専門外。一対一という状況も相まって粘ったものの撃墜。なのはは一度負けた相手と再度戦うことになる。怪我人であることもあり、援軍を呼ぶべく結界を壊そうとしたところをヴィータに撃墜、リンカーコアを蒐集された。

フェイトとアルフもこのままでは負ける。

ヴィータも加わるのであるからして、当然の帰結と言えるだろう。

八神家

「ヴィータ。引くぞ。シャマルを回収。後に転移を混じえながら撤退する。」

「はあっ!？」

何言っただよ、シグナムっ!!

もう少しで金髪の方も蒐集できるんだぞ!？ここで取れば今日だけで40ページ以上が埋まるんだっ!!」

「ヴィータ、深追いは禁物だ。」

それに先ほどからシャマルとの連絡が取れない。」

「ザフィーラまで・・・でも・・・あと少しなのに・・・」

守護騎士達は念話で引くことを考える。

何よりも一番の留意点は闇の書を持っているシャマルとの連絡が取れないことだ。

「ヴィータもリンカーコアを持ったままではろくに戦えまい。それを傷つけてしまえば今日の頑張りが全て無駄になる。それに・・・気づかないか？」

私たちの戦闘に紛れてこそこそと這い回るネズミが二匹。どちらもシャマルと近い位置にいる。」

「なっ!？」

「どおりで連絡が取れないわけだ。」

「私も先ほど気づいたところだ。曰ころから親しみのあるベルカ式でなければ気づけなかっただろう。魔法の扱いだけならば今回の敵よりも上手い。すぐに救援に入る必要がある。ベルカ式を使うと言うことは・・・近接戦を主とする相手だろう。戦闘を不得手とするシャマルとの相性は悪い。」

「ちっ!しゃあねえか。」

「ならば我らが取るべき行動は・・・」

「ああ、目の前の邪魔者を振り払って、早々に引くぞ。」

シグナムたちの猛攻が始まる。

十全とは言えずともヴィータの援護もあり、一分と経たずに撃墜されるフェイトとアルフ。

シグナムたちがシャマルの場所へ行くと、山田君が立っていた。

「あいつらはどうした？」

「死んではいないだろう。それで、貴様も邪魔するのか？」

「・・・いや、あいつらが無事なら良い。」

「そこでこそそ隠れてるやつも出てきたらどうだ？」

シグナムが一点を見つめる。

そこの影に隠れていたのは響。と思っただろう？

昔の響もとい厨房だった。

山田君の視線が厳しくなる。

「さすがのオマエだって、今回の件がどれほどデリケートなのかは分かってるだろ？」

「分かってるとは思うが邪魔はするなよ？」

「オイオイ？」

なんのためにこの世界に来たと思ってるんだっ！

ここで良いところを見せれば全員をハーレム入りに出来るっ！！」

種明かしをすると、サーチがばれた時のことを考え、出てこいと言われた時ように厨房を用意していたのである。

相変わらずのイタイざまは治せないらしい。

というのはアイシテルの談で、実際はアイシテルの嫌がらせである。

どうして嫌がらせをしたのかは乙女心というヤツであり、もういちど前回の話を見てもらえば分かること。一応相手の敵意を煽って山田君の目的を聞き出すためでもあった。

シグナムたちはなんのことか分からないようで、ぽかんとしていた。彼女たちを敵に回したいわけではないので、わざとボカした言い方をするように設定してある。

でなければ「そのおっぱい騎士を始めとしたーうんぬん」というシグナムたちー特にシグナムの敵意を煽っていた結果になることは言わなくても分かるというものだろう。

「てめえ・・・悪いが世界が掛かってる。同郷の人間とは言え、殺すときはキツチリ殺すぞ。まさか前回見逃したからって俺が優しいって勘違いしてるんじゃないだろうな？」

今ならまだ許す。この件から手を引け。」

今ならと言ってる時点でなんだかんだで彼も優しいようである。

見方によっては甘いともいえるかもしれない。

だが、見方によっては上から目線で何様よ？とウザがられるかもしれない。

彼は世界を救いたただけだというのに。という言い方だと途端に彼を薄っぺらく感じるのは何故だろう？

という疑問もほどほどに。

厨房はボンと音を発てて姿を消した。

これには山田君も何がしたかったのか不思議になりシグナムたちと同じく、首を傾げる。

山田君の見た目は普通なので首を傾げててもなんら可愛いとは思えないと言っことは言っておく。

これが響であるなれば一応見る分には眼福ものなのだがそれは余談。

「・・・もう少し、どうにかならんかったのか？あれは。」

『まあまあ。』

「なんか凄く楽しそうですね！」

『乙女の萌えキュンなセリフに対して酷いこと言うからよ。』

「貴方のほうがよっぽど酷いと思いますけど！？ていうか萌えキュンなセリフって何よ？」

『・・・はあ。それよりもほら、目標が動いたよ。さっさと転移先を捕捉しないと撒かれる。山田君の目的も分かったことだし、あとは一番大事な仕事。』

「・・・きつと誤解だと思われー！」

『とつととするっ！！』

「いえす、さーっ！！」

そうしてシグナムたちを追っていくとーシグナム達は管理局の追っ手を警戒し、拠点がばれないようにさまざまな次元世界を移動しながらもーようやく拠点らしき場所に付く。

ばれないようにつけるのはかなり骨が折れたらしく響も珍しくアイシテルも疲れた様子を見せている。

『ようやくね。』

「んと・・・この家に入っていったな。何々？」

八神はやて？男か？借金執事を思い出す。

てつきり、魔法少女ばかりが出てきてたから今回もそうかと思ってた。

うつむ、男か。まあ9歳児かつなのはや月村さんを見るに良い子が多みたいだし。この子もその可能性が高いだろう。いや、奇をてらってクソガキという可能性もあるな。」

『不用意に近づくと結界に感知されるよ。気をつけて。』

「すり抜けられない？」

様子を見たいんだけど。」

『覗きは犯罪だよ。それにそんな都合の良い術があったら結界なんていう術式が今の今まで残ってるわけ無いでしょ。』

「犯罪とは失敬な。敵情視察だ。」

『・・・どう変わるのさ？』

「俺の中の罪悪感が変わる。」

『すいませーんっ！！ここに覗きが居ますよおおおおおおおっ
！！！』

「おおおおおいつ！？

やめんかつ！！！」

はあはあとイキナリの大声で息切れを起こす響。

ちなみに八神家の面々は気づかなかった。などというわけではもちろん無く。

単に近所に五月蠅い子供がいるなあと少し眉をひそめただけだった
りする。

アイシテルは魔法で響にだけ聞こえるようにしている。

『で、どうするの？』

「うつむ、そこだ。問題は。まず考えてるのは――」

響が考えたのは三つ。

1つ。

このまま立ち去る。これから先、捕縛できる機会はいくらでもある
だろう。が、夜天の書。もとい闇の書を完成されかねないという問
題がある。仮に完成が先だとしても彼女たちと戦い合えば下手をす

れば自分まで管理局に目をつけられることになりかねない。ミッドチルダでは管理局の職員であるリンディやクロノにお世話になったし、響には原作知識が無いためこれは出来れば極力避けたい手法だ。2つ。

夜天の主と話をする。

この世界にいるということは日本人である可能性が高い。守護騎士に話を通じなくともこのままたずねて主にあつてしまえば意外と話だけで終わる気がしないこともない。

ただし完全な悪役キャラだった場合、その場で守護騎士と主に囲まれ、叩かれる。

逃げるだけならばなんら問題は無いが、彼女たちを凌ぎつつも結果を破るのはかなりしんどそう。

ちよつとした油断で倒されかねない。何より響は痛いのはごめんである。ちよつとでもその可能性があるならできれば避けたい。

3つ。

そもそもの人化を諦めてアイシテルが一から作り上げるまでの20年をただひたすら待つ。一番楽である。が、自分の好きな女の子？と手を繋ぐための手段がすぐ目の前にあるかもしれないのに指をくわえて20年待つのは非常に辛抱たまらない。

よって論外。

『・・・守護騎士のプログラムを見せてもらっただけだし、お願いするだけしてみたら？』

「うむ、2つ目だな。」

「親切な子であることを願いたい。」

というわけでインターホンを押してみた。

ぴんぽーん。

久しぶりに唐突に劇的にピンポンダッシュをしたくなったのだが、

やめた。

さすがにアホ過ぎる。

『どちらさまですか？』

イントネーションが関西の人っぽかった。

関西人か。漫画やアニメのキャラは大抵似非関西人であることが多いと聞くが、この子はどうかだろう？とかどうでもいいことを考えつつ響は応える。

それと声は女の子のようだ。でもこの時期は男の子も変わらず声が高い。

結局どちらなのかは分からない。

「・・・突撃、隣の朝ごはんの者です。」

ボケてみた。

『今は晩御飯の時間なんやけど・・・』

「ふっ、俺のお茶目な部分を出してしまったようだな。」

『あの・・・イタズラなら帰ってもらってええですか？これから晩御飯なんで・・・』

「ほうそれは良いことを聞いた。お邪魔させてもらっていいかな？」

『なぜに初対面のアンタ家に招かなアカンのや。しかも晩御飯を頂く気満々やん。ずうずうしいにもほどがあるわ！』

「そのキレのあるツッコミ・・・関西では有名な芸人と見た！」

『図星だろう？』

『・・・』

「なぜ分かったのだと言う、間だな。今のは。」

『いや、あまりの検討外れぶりに呆れてただけや。』

「なんてこつたい。恥ずかしい。」

『・・・さいなら。』

「ちよつと待つて！ごめんなさいっ！！真面目にやります。」

『・・・ハナからそうしてや。で、なんのご用向きですか？』

「とりあえず話が長くなりそう。ゆえに俺は寒空の下凍えながら話さないといけなくなる。つまり家に入れて？ご飯いらないからさ。」

『ほんまずうずしいやつचना。』

・・・まあええか。胡散臭いけど悪い人じゃなさそうやし。シグナム迎えてあげたって。』

『分かりました。はやて。』

めちゃくちゃ怪しいと思っていたアイシテルだったが、子供の外見が功をそうしたのか普通に招かれることになった。

響はそんなアイシテルに対し「どうよ？この粹な会話で警戒心を解く手腕は！？」と、どやああ顔をしていた。

もちろんそんな響をアイシテルはキモイと思った。

ハートフルコメディ

「うちは八神はやて言います。ひらがな三文字では・や・てや。変な名前やろ?」

「言われて見れば変だな。」

「ああん?」

「いや、冗談です。睨まないで。」

正直な気持ちを言ったというのに、いつぞやの赤い少女に睨まれる響。

自分で言ってるから気にしてないのかな?とか思ってたゆえだが、年頃の女の子が気にしてないはずも無く。少なからずはやてからの好感度が下がった響だった。

はやてなりのジョークであり、実際はそんなことないよと言って欲しいーいわゆる押すな押すな・・・いや、押せよ!というフリである。

関西人は皆こうなのかな?とかどうでもいいことを思ったアイシテルの心境はさておき。

『どうも魔法を知らないみたいなんだけど・・・どういうこと?いや、知ってはいるけど触り程度って感じだな?それと男の娘だったようだ。』

『・・・秘密にしてるとか?・・・それと普通に見た通りでいいですよ、女の子だよ。』

『なんで?』

こんなに可愛い子が女の子のはずがないよ!..!』

『・・・言ってみたかっただけ?』

『・・・よく分かったな。』

『多分、女の子であることは分かった。そうじゃなくてだな。と

りあえず話した感じ人に迷惑をかけるようなことをする風には見えないんだけど・・・人は見かけによらないってこと？」

「うーん？」

単純にこっさりやってるとか？」

「え？」

守護騎士が独断で？

仮にも騎士なのに？

仕える主君——にあたる人間の意向を無視して勝手に動くわけ？」

「・・・分からないわね。単刀直入に聞いてみたら？」

この間、響を睨み続ける守護騎士達。

その視線はどこか「何も言うな」と語っている気がする。が、響は無視した。というか気づかなかった。

「あのさ・・・単刀直入に聞くけど、人をおそーいのはあつ！？
げふっ！？」

シグナムが響を殴り、ヴィータがタツクル。

ザフィーラが犬形態でさりげなく響とはやての間に入り、シャルはドジッたフリをしてはやてに覆いかぶさる。いや、シャルだけはあまり理解してない様子なので素でドジったのだろう。

「いたたた、ごめんなさい、はやてちゃん。転んでしまいました。大丈夫ですか？」「え、ええよ。それより皆、ど、どうしたん？」

「いや、おまつ！？」

はやてとやら、オマエは守護騎士にどういう教育をーーげぶふるっ！？」

ヴィータが抱きつきつつもはやてから見えない角度で響にブローを加える。

シグナムはそんな響にたちして耳打ちした。
ちよつとドキつとしたのは秘密だ。

「そのまま何も言うな。主にバラした場合、我が剣に誓つて貴様を殺す。地の果てまでも追いかけてな。」

「どうしたん？シグナム、ヴィータ・・・そんなに近づいて・・・ヴィータに至つては抱きついて？」

「いや、これはだな、はやて・・・えーつと・・・」

「ヴィ、ヴィータはこの少年と友達なのです！！」

「そ、それだ！シグナム。そう、あたしはこいつと友達になつたんだよっ！！なっ！！？そうだよなっ！！？

そうじゃないと・・・」

ヴィータの手の中には待機状態のグラーファイゼンが鈍く輝いた。

響は冷や汗を掻きつつも首を勢い良く振る。

「・・・なんか変やで？」

「まさかあっ！！ほら、オメエもなんかはやてに言つてやつてくれよ！！」

「えーつと・・・健全なお付き合いをさせてもらつてます？」

「・・・付きおうとるんか？・・・まあええけど。隠し事は悲しいで。」

「いや、はやて、あのな・・・」

このとき、響に名案がひらめいた。

ここではやてを誤魔化すことで恩を売ればこいつらに要求を通し易くなるのではないかと。

姑息でみみっちい思考だが、彼という人間はそんなものである。どうか親しみを持って接してあげてほしい。

むしろ「いや、俺がしたいからしただけ。お前達が気にすることじゃない」的な主人公らしき臭いセリフを聞いて「・・・オリヌシですね、わかります。」という程度には自分が小物であることを理解してるだけ、好印象というものだ。

「ええ！ヴィータさんとは結婚を前提としたぶふるっ！？」

「な、ななな何言ってるんだてめえっ！！」

ヴィータが顔を赤らめて響を殴る。

照れてはいるが別にフラグが立ったわけではないと一応言っておく。

「な、何をする！？」

人がせっかく誤魔化すのに協力しようとしてやってるのにつ！！」

「だからってアホいつてんじゃねえっ！！てめえなんかと誰が結婚すっかつ！！」

てめえと結婚するくらいならザフィーラと結婚するわッ！！」

「どういう意味だそれは。」

ザフィーラが苦虫を噛み潰したような顔で呟く。
もちろん犬と結婚するわ・・・的な意味である。

「あははははっ」

それを見てはやてがやたらと笑う。

なんでやねん。そうツツコミを入れたのだが、響のそのツツコミはスルーされた。

響としては殴られる人間を見て、笑う。

すなわちコイツ性格悪いなどと考え、響からはやてに対する好感度が少し下がった。

が、下がるうが上がるうが彼女が響に対して本気になることはまず

無いだろうから問題ないだろう。
残念なことに。

「ど、どうしたんだ？ はやて。」

「いや、な。最近、シグナムもヴィータもザフィーラもシャマルも。なんかどこか気を張り詰めてたやんか。ちよつと前に私の体をシャマルの魔法で見てもらった・・・そのあたりからや。」

「やっぱり私の病気で心配かけてんのかなあとか・・・ちよつとアレやったんやけど、こうして馬鹿みたいにしてるヴィータを見るとな・・・そんな幻に見えてきて・・・」

「はやて・・・」

「ええか、ヴィータ。皆が私を気にして心配してくれるのは嬉しい。最近遅く帰ってくるのもなんかやってきてるってのはわかつとる。きつと皆は優しいから私のためになんかしてくれてるんやろ？」

「図書館いたり、病院回ったりとかそんな感じやろか？」

「主・・・」

「疲れてるのも隠してるみたいだから気づかんフリしとったけど・・・やっぱりうち、こういう空気の方が好きや。こっちのほうが好き。せやからどこか行く位なら一緒に居て欲しい。みんなの優しさを無視する様で・・・悪いとは思っくんけどな？」

「わがまま・・・やろか？」

「別に死ぬわけでもないしな。」

「はやてちゃん・・・」

「ヴィータだつて最近はどこか笑顔に元気なかったやんか。久しぶりにみたで。ヴィータの笑顔。」

「え、笑顔だつたか？」

「響はもちろん、いきなりのハートフルな空気に居たたまれない感じになった。」

「空気読んで帰るべきだろうか？」

きつとここで声をかけたらまた殴られるだろうな。とか思ったのでこっそり部屋を抜け出すことにした。

玄関まで来て響は呟く。

「・・・俺、何しに来たんだろう・・・」

『まああんな空気だされちゃねえ。』

「・・・殴られに來ただけっていう。うん、まあ慣れっただけだね。こっついうなんかアホらしい目に遭うの。」

『・・・元気出して。』

「日を改めるとしよう。」

こっつして響はちょっと会話して殴られて、タックルされて帰ったのである。

枕を濡らしたのは言うまでも無い。

次の日。八神家へ。

インターホンを押す。

『なんや、またアンタか。』

「・・・ええと、昨日は勝手に帰って悪かったな。」

一応、自分からたずねておいて勝手に帰ったことを詫げる響。内心納得などいってないが、ここはもう仕方ない。

『全く・・・とりあえず入って。』

「・・・?」

いいの？」

『寒空の下話すのは嫌なんやろ？』

「・・・。」

『なぜ泣く？』

「いや、久々に人の優しさに触れた・・・というか人に優しくして
もらったというかね？」

『・・・まあ詳しくはきかへんよ』

響の中ではやてに対する好感度が急上昇した。が、重ねて言うが響
からはやてへの好感度が上がったところではやてが本気になること
は恐らく無い。ゆえに全く意味の無いことである。

「八神はやてや。」

「それは昨日、聞いたけど？」

「八神はやてや。」

「いや、だから・・・。」

「こっちが自己紹介しとるのに、そっちはないん？」

「・・・。」

「なぜ泣く。」

「いや、ちよつと優しさに・・・。」

「この普通のやりとりで泣くってどういうことやねん。」

「いや、すまん。てつきりまた何かのハプニングが生まれるものか
と置いていて。」

「はあ？」

「なんでもない、こっちの話。俺は相馬 響。よろしく・・・して
くれなくてもいいかな。」

「・・・偉い後ろ向きな挨拶やな。正直、悪印象しか与えへんで？」

原作組みのキャラクターと仲良くなれば、それだけ後からくる別れ
も寂しくなる。

なぜなら昔の自分を知るなのはや山田君とお友達になるだろうからだ。そこから「あいつ、アレだから気をつけなよ！」的なことを言われると分かっている響としてはあまり積極的に仲良くなるうとはしない。

「・・・ごめんなさい。」

「いや、謝って欲しいわけやのうて・・・まあええか。そういや今は昼やけど学校はどないしたん？」

「今日は休み。」

サボっただけである。

「ふうん。うそ臭いけど、それもまたええ。」

「で、早速本題に入ってとっとと帰りたいんだけど・・・睨んでくる赤い少女が怖いので。」

また来ると察していたのか、守護騎士は全員揃っている。

「それなんやけど、響君・・・えと、名前でええか？ええな？まあ気にせんといて。で、響君はヴィータたちに話があるらしいってきいたんやけど・・・そうなん？」

「ええつと・・・まあそうかな。」

実際は主のはやてに聞きたいのだが、どうも彼女は闇の書についてどころか魔法についても良くは知らないみたいである。

そして勝手に名前で呼ぶことを決定してしまった。女の子から下の名前で呼ばれることにトキメク響。

これこれ！こういうのが欲しかったんだっ！！

とか思っただけど、再度いずれ自分の過去がばれることになることを考えると素直に喜べなかった。

ばれた頃にはきつと「キモ太郎」とかそんな感じの名前で呼ばれるに違いない。いや、違うが。

話を戻すが、蒐集のことも知らないし、何よりも下手に喋ったらボイン騎士に斬られかねない。冗談ではなく。

ゆえに全ての事情を知ってるであろう彼女達と話すのは望むところであつた。

見捨てないで

「主はやての病を治すために我らは蒐集を行っている。」

シグナムのそのセリフから、とつとつと語るのを聞くに響は八神はやてが病を患っていることを聞く。

おっぱいチートで治す事を考えたのだが、揉ませてくれるはずもあるまい。いや、治るとなれば揉ませてくれるだろうが、治ったとしても一時的なもので根本の闇の書との契約を解かない限りはやてに安息の日々は訪れない。

病は本によって引き起こされる魔法的な何かのようである。となれば本自体をどうにかすれば良いのだが、そんな術が都合よくあるはずもなく、本におっぱいがあるわけでもなく。

響の手持ちの手段ではどうにもできないことがわかる。

響としては原作組みがどうせどうにかするだろうから、助けられついでに助ける程度でしか無くあまり深刻には考えていない。

山田君の世界がどののと言っていた件もある下手に手を出すのは良い選択では無いだろう。

それよりもアイシテルの人化の件だ。

事情を説明し、本を見せてほしいというと「本はさすがに無理だが、私の体ならば幾らでも貸そう。私の体でも十分に用を成せるはずだ」という許可を頂いた。

状況が状況ならばちょっとアレな――えろいセリフであるがもちろんそんなことはない。

「それにしてもヤケに素直っすね・・・こうまですんなり行くなんかの罨かと思うんだが、どうおもう？アイシテル。」

『・・・うーん、まあそういうタイプに見えないし、大丈夫じゃない？』

ただ剣を振るうしかない愚直な剣士って感じだよ？他の三人も謀には向いてないでしょ。仮にも騎士を名乗るわけだし。』

「そういう相談は二人きりの時にやって欲しいものだが・・・剣を振るうしかない・・・か。」

概ねその通りだが、それしか能が無いと思われるのも心外だ。一手交えるか？」

「いや、遠慮します。」

「そうか・・・」

しよぼーんとするシグナム。

あ、可愛いと思ったのは心の内の秘密。

「素直に身を任せるのは恩があるためだ。」

「恩？」

「主はやての悩みにーっ気づかせてくれたのはお前だ。受けた恩は必ず返す。それがベルカの騎士の剣とは別の誇りでもある。」

「・・・ええと、それならお言葉に甘えて。」

頭で思い描いた形とは異なっただが、結果オーライ。

いつのまにか恩を売っていたようである。

相手が勝手にすすんだ事柄に対して勝手に恩を感じてくれているならばそこを利用しない手はない。

『・・・心が狭いよ。』

「う、うるさいな。確かに俺もここで“いや、そんなに気にしなくてもいい”とかそんな感じのセリフを吐きたいのだが・・・これを逃したらいつまたチャンスが来るか・・・」

『まあそれもそうだよな。』

「さっそくサーチャーにかけさせてもらうけど・・・準備は大丈夫？」

「ああ、構わない。」

「それじゃよろしく、アイシテル。」

『あいあいさー。』

そしてサーチ。

解析。

組み立て。

『これならすぐにでも作れるよ。』

「まじかつ！？早速お願いっ！！」

『ええと・・・こうして・・・こうして・・・』

魔法陣が展開。

魔法陣に描かれた紋様がめまぐるしく変わりつつ、魔力が徐々に徐々に人の姿を模っていく。

「見事なものだな。お前達は研究者の類か？」

「いや、ただの魔導師。」

「ただの魔導師が闇の書を求めはしまい。」

「さっきから何度も聞くけど、闇の書って何？」

「夜天の書が正式名称じゃないの？シグナムさんまで俗称で呼んじゃつてさ。」

「は？」

「え？」

アイシテルの体が完成。

黒髪がたなびき、両サイドで纏まっている。すなわちツインテールで見た目は14歳ほど。発展途上の胸がたゆむ。

そして、そのまま宙に浮いている。
まぶたがゆっくりと開かれた。

「これが人の体か・・・予想以上に重いな。」

自分の体を見回すアイシテル。

服は着ていない。すっぱんぽんのままだ。

手で覆いながらも隙間からじろじろ見る響。

それに気づいたアイシテルが殴る。

「ぐぶっ!？」

「別にデバイスだし羞恥心は無いけど、そうじろじろ見られるのは不愉快よ。ていうか、視線がエロいバカ!!」

「いや、エロいのは男なら仕方が無いわけで・・・とりあえず服を着てくれませんかね？」

「そうね。えーっとバリアジャケットを展開しちゃえば良いか。」

ブリッツフォーム時の服装を展開するアイシテル。

「何はともあれこれでアイシテルとラブラブが出来るぞおおおおお
おおっ!!」

叫びながらアイシテルに抱きつきにいく響。
しかし足が翻り、響にクリーンヒットした。

「だ、だからそれは恥ずかしいからまだダメ。」

少し顔を赤くしながらそうの給う。

若干もじもじしてるのが可愛いのだが、響は気絶したため見れない。

「・・・仮にもオマエの主だろう？足蹴にしているのか？」
「別にいいの。響だし。」
「・・・そうか。」

シグナムはあまり深く突っ込まなかった。

響が目を覚ますと良い臭いがしてくる。
そして何かを煮込むような音と、談笑が聞こえた。

「んぬ・・・ここは・・・というかいつから寝てたっけ？」
「あ、起きたんだ？」
「ああ、なんか良い夢を見ていた気がする。
・・・誰？」

響が声のした方向をみると見知らぬツインテールの黒髪美少女がいた。
もちろんアイシテルである。

「寝ぼけてんの？」
「いや、至って正常だと思うが・・・あれか？
日々彼女を欲しがっていたがために現れた俺の脳内彼女？」
「・・・殴るよ？」
「いや、なぜ殴られるのかが分からない。アイシテル、状況説明リリース。」
「見たまんまでしょうが。」
「俺はアイシテルに聞いたんだ。どこぞの好みのタイプ・・・もといアイシテルの人化姿がこんな感じだったら惚れ直すであろう美少

女である貴様には聞いてない。で、アイシテル、早く応えろ。なぜ無視するの？」

「いや、だから私が・・・」

「ちよつと、うるさい。今俺はアイシテルと話してるんだ。よく分からんがここにいるということは魔法関係者だろう？アイシテルとの蜜月の時を邪魔するんじゃない。」

「・・・はあ、まあいいか。すぐ気づくでしょう。」

「アイシテル？アイシテル？」

おい、どうした？

なぜさつきから無視し続けるの？え、まさか愛想尽かしたとかそういうことじゃないですよ？

俺、オマエから見捨てられたらもう誰も頼れる人がいないんだけど・・・ちよつと、うんとかすんとかでいいからそれだけでも応えて・・・

「」

響は人化したアイシテルに気づかない。ゆえにかなり瞳を潤ませている。

そして体が振るえ、今にも号泣しそうだ。

それもそうであろう。

今となつてはどんな時でも一緒に居てくれたアイシテルこそが響にとっての最愛の人？だ。

そのアイシテルに愛想を尽かれたとなつた響の心境は想像を絶する。殺されかけるような誤解を受けることがあつてもアイシテルがいたからこそ耐えられた。

そんなアイシテルがいなくなれば響は首を吊って死ぬか引きこもるか二択しかない。いやさすがにそこまで絞られはしない・・・と思われ。

「うんとかすん。」

「だからオマエがそれを言っただけでどうするっ！？」

俺をからかつてるのかっ!?

・・・くそうっ!! 皆して俺を・・・俺をバカに・・・して・・・
アイシテルまで・・・うぐ・・・ぐず・・・どうしてだよ・・・
アイシテル・・・アイシテル・・・あいしてるう・・・ぐず・・・」

目に涙を溜めて、もう泣いているといつてもいい響。

アイシテルはため息を吐いて、響を抱きしめた。

「ここに居るでしょ、ばかちん。」

「・・・あい、してる?」

「そうよ、他に響なんかを慰めてやるような物好きは居ないでしょ。
わかりなさいよ。」

「あ、あいしてるううううううううっ!-!」

そのまま抱きしめ返す響。

「ちよっ!?! そんな強く抱きしめないでっ!?! ひんっ!?!
ちよっつとどこ触ってるのよっ!-!」

「うわああああん。」

「うわっ!?! 鼻水っ!?!」

鼻水がすごいつ!! ちよ、あんた達も助けてよっ!-!」

「いや、邪魔をしたら悪いと思ってな。」

「なんっ!?! か、これもまたあつたけえよな。」

「私は響君の過去が気になるわ。」

「うううう・・・」

「おい、シャル、泣くな。」

もちろんずーっと見られていたのは言うまでもない。

優しさに触れて

「お見苦しいところを。」

「ほんと見苦しかったからね。」

「早くアイシテルが言えば良かっただけじゃんっ!」

「まさか記憶が飛んでるとは思わなかったし。」

「うちからすると、かまへんよ？」

面白かったし。」

「八神貴様、俺はオマエといつか拳で語る――日なんてこないですよねハイ。」

はやてに拳で語ろうぜ!をしようとしたらシグナムとヴィータに睨まれた。

「八神で・・・うちの名字好きやない。可愛ないし。名前で呼んだって。」

「何を言う。名前の方も大してかわいくは――ありまくるツスはいつ!」

睨まれたので。

「それにしても昼飯が豪華だな。いつもこんな感じに食べてるの?」

食卓の横で寝かされていたわけだが、食卓にはなんか手の込んだ料理がずらりと並んでいる。

そして近くにはザフィーラが犬要の餌皿で伏せて待っている。至極気になったのだが、オマエはそれでいいのか?ペディグリー。ヤムでいいのか?とか餌のメーカーがそこでいいのか的な意味ではない。

「何言つてんの？」

お客さんが来たら普通はちよつと豪華になるやろ？粗末なもん出したら恥ずかしいやん。」

「お客さん？」

寝てる間に誰か・・・まさか奴らの内の誰かつ！？

これはいかんつ！！

アイシテル、早々に帰るぞ！！ほら、何のんびりしてんの！？そして“こいつマジで言つてんの？せつかくの美味しそうなご飯を食べずに？”みたいな目をやめいっ！！

アンタはずつと見てきたでしようがつ！！ここでやつらに俺の醜態がばらされた場合、月村家の悲劇の二の舞だ。あんな気まずい状況とつとと逃げるに限る。ていうか何、あんたは普通にお客さんポジションに付いてるのさっ！！」

「響、落ち着きなさいよ。別に誰も来てないから。」

「・・・は？じゃあどうしてお客さん？」

ああ、なるほどアイシテルがお客さんってこと？確かに魔法を良く知らない人間からしたら・・・いや、あんた不法侵入者じゃね？

ま、まで八神っ！！

アイシテルは不法侵入者じゃなくてだなっ！！これにはふかい事情があつて・・・だからこそとりあえず警察は面倒なので呼ばないで欲しいと願つてみたっ！！ていうか手遅れですかっ！！？」

「凄まじい速さで自己完結してるとこ申し訳ないやけど、それら全部勘違いやから。」

「なん・・・だとっ！？」

「確かにアイシテルさん？勝手にアイちゃんって呼ばせてもろとるけど、彼女はお客や。一応、デバイスうんぬんてのも聞いた。不思議なこともあるもんやなあ。本のことそうやし・・・」

「そ、そうなのか？だからアイシテルはそのおいしそうなご飯を一人で食べようとしている・・・と？」

一応、主人である俺をほっぽって？
1人で？

いや、まあいまさらこの程度で泣きはしないけど・・・酷く悲しい。
なによりアイシテルにほっぽとかれたのが一番辛い。やつぱりちよ
つと泣きそう。でも泣かない。だって男の子だもんっ!!」

「いや、あんたもお客や。つかキモイで？」

「まさかあ!？あはははは、なかなか面白いジョークだ。」

「いや、家の主人である私が言うのになぜまさか!なんて言葉
が出るん?ていうかどこに笑う要素？」

「きつと何か誤解があると思う。というわけでまずはどうして俺を
お客だと思ったのかを聞かせてくれ。」

「え？」

いや、そら、うちにきたんやからお客さんやろ？」

「うむ確かに・・・うん?あれ？」

「はい？」

「いや・・・何も・・・変じゃない？」

「とにかく座れよっ!はやての飯が冷めちゃうだろ!!」

「ああ、ごめんなさい、赤いの。」

「赤いのじゃねえ・・・ヴィータだ。次にそのふざけた名前で呼ん
だら殺すかな。」

「殺されそうになるとか、やはり俺はお客さんではない？」

「いや、それは響が悪いでしょ。」

「アイシテルはどっちの味方なんだよっ!!」

「響。」

「・・・え。あ、そう。えと・・・ありがとう。でもそう真顔で言
われるとこっちが・・・」

「照れてる響君は可愛えな。」

「だまれ八神。照れてなんか無いっ!!」

「せやから名前で呼べと言ってるのに。」

なんだかんだで響の目が覚めるまでゴハンを食べるのを待っていたのである。

アイシテルはもちろん、はやても守護騎士達も、それを聞いた響はまたもや泣いた。

ぼろぼろと涙を流しながら。

「お、おれ」を感動させようとしたってそうはいがないんだがらな」。

「え、あれ？なんで泣くん！？」

えええっ！？ちょ、ちよつとっ！？ええと！？」

はやてが戸惑い、守護騎士達も戸惑う。

そらそうである。

普通にお客さんを歓迎しただけで泣かれるのだから。

アイシテルだけがそんな響を聖母のような笑みを浮かべて見守っていた。

帰り際。

「八神・・・そのありがとう。」

「何言うてんねん。お客さんを招いたくらいで泣かれてもうちとしては良く分かんかったわ。礼を言われてもいまいち良く分かん」。

「関係ない、俺が言いたいから言っただ。」

ちよつとオリヌシ臭い言葉を吐いたが、よくよく考えるとあまり格

好くない。

「ていうか名前で呼べい。昼ゴハンご馳走してやったんやからそれくらいええやろ？」

「はあ？」

そこにこだわるねえ・・・高町さんといい、月村さんといい・・・結局俺は呼び合うことはまかりならなかったがな。くそ、山田のやつめ。」

「山田？」

「ハーレムを無自覚に形成し、次々と美少女達をその毒牙にかけるふてえ野郎だ。八神も会ったら気をつけーいや、俺が言うことでもないし、言えたものでもないな。」

「はあ？」

「んじゃ、もう用事は無いから会うこともないだろうけど、さようなら。」

「え、もう来てくれへんのっ！？」

「ん？」

当たり前じゃないか。もともと話があつて来た訳だし。・・・これ以上優しくされても困る。どのみち別れが来るし。」

「なんて？」

「いや。とにかくそれじゃね。」

「そ、そうけ・・・残念やなあ、せつかくの友達が出来る思つて腕によりをかけたったのに。」

「うう」

響の良心が痛み出す。

が、響としては仲良くするわけには行かない。

理由はもちろん原作組みだ。

イタイけな少女の胸を揉みしだいた。なんてことがはやてにも伝われば、少なくとも仲良くは居られまい。

むしろ軽蔑の眼差しを受けること請け合いである。

が、さすがにゴハンやアイシテルの擬人化の強力など受けて、身に覚えの無い恩だとか好意を一身に受けるのもバツが悪い。

せめてものお礼としてシグナムたちに協力することにした。

物語がどうなるにせよ、リンカーコアを集めるを手伝うくらいならば問題ないと判断して。

まずかったら山田君が何か言ってくるだろう。

蒐集についてだけは秘密にしたいようなので、シグナムに念話を送る。

『シグナムさん。なんだかんだでこっちとしては過剰な恩返しをされてしまった気もしないことも無いので、リンカーコア集めくらいなら手伝う。』

『いや、せつかくの申し出はありがたいが、それでは主はやてが悲しむ。受けすぎた恩を返すというならば、たまにはこうして家に遊びに来てもらいたい。』

『いや、それは・・・』

『・・・何か事情があるのか？』

『別に無いと言えば無いですし・・・あるといえば・・・あるような？』

『管理局も出ている。お前も犯罪者の仲間入りはしたくはあるまい？』

『変装すればいいのでは？』

『気持ちだけ受け取っておく。』

『・・・さいですか。』

受けすぎた恩を返そうと思ったけれど、いらないうつならば押し売りするほどでもあるまい。

家に遊びに来るといふのは・・・ちょっと考えてからで。

主人公組みと知り合うまでならいいかなあとか思いつつ。
響は帰宅するのであった。

学校をサボったことで文香に怒られたというのは余談。

アイシテルのことで「娘が出来たみたいで嬉しいわ、アイちゃん・
・でいいかしら?」「大丈夫だよ、文香ちゃん。」「ふふふ、こう
してちゃんづけで呼び合おうと昔を思い出すわ・・・。」というのもま
た余談である。

一週間後ほど経ち。

「ふつ、結局来てしまったな。」

「いらっしやい、響君。もうこうへんかと思ってたから嬉しいで。
そしてかつこつけてるところ悪いけど、ちょっと気持ち悪い。」

「なんだかんだで居心地が良かったみたい。ごめんね、はやてちゃ
ん。気持ち悪くて。」

「別に気にしてへんし、面白いからええねん。アイちゃんは今日は
あのばりあじゃけつと?とかいうのじゃないんやな?」

「あれは間に合わせだったし、普通に街中を歩くのは恥ずかしいっ
てば。文香ちゃんのお古の服を仕立て直してもらったの。」

アイシテルの服は簡素なワンピースとハイニーソックスだ。ニーソ
ックスは外せませんよね?

「ふみかちゃん?」

「響のお母さん。すっごく若くて綺麗よ?響の能力もあるけどね。」

文香は非常に若々しい。

響のおっぱいチートによるアンチエイジング、もとい不老ゆえに。母親のおっぱいを揉むのは非常に居たたまれないが、響としては断れないのだ。

常日頃から非常に愛されてるゆえに母親の望むことならば基本聞く。なのはの件でも苦勞をかけてるし。

ちよっとマザコンが入っている。この世界に生まれた当初は母親もヒロイン候補だったというのに、時の流れは素晴らしい。

いや、響が着実に変わっているのだろう。概ね良い方向に。

「へえ、どんなんか見てみたいな。」

「今度遊びに来たら？文香ちゃんも話したがってたし。」

「そうさせてもらう。てか能力て？」

「おっぱいチート。」

「はっ？」

「おっぱいを揉むことによって色々な効果をもたらせる能力よ。」

「・・・なんなん？その変な能力？ほんま？」

「私は嘘つかないもの。」

「俺は嘘をつくみたいな感じで言うの止めてくれないっ!？」

「もまれてみる？」

「いや・・・遠慮しとく。」

「賢明ね。」

「・・・俺はつつこまんぞ。」

今日はちゃんと学校を終えてから遊びに来た。よってすでに夕方。

「シグナムさんたちは？」

「シヤマル以外はみんな出てっとなる。一緒にいて言うてもダメみた

いやな。」

「その言い草だとまるで彼女たちのために言った・・・感じに思えるね。」

「そうなの？八神。」

「・・・まあそやな。やたらと疲れた様子で帰ってくるから・・・ああ言えばちよつとは自分の体を大事にしてくれる思うんだけど・・・結局、早く帰るようになったとは言え、むしろ疲労の度合いは濃くなった気がして・・・」

それはそうだ。

はやてを心配させまいと早く帰る場合、その分リンカーコアを短い時間で集めなくてはならない。

多少以上の無理はしていると考えるのが普通だ。

そうしてのんびりリビングで話しているとドタバタとシャルマルが降りてきた。

「ごめんなさい、はやてちゃんっ！ちよつと急用があつてーあーあら、2人とも来てたの？出来ればお茶を入れてあげたいんだけど今は・・・」

「大丈夫、お構いなく。」

「・・・。」

「シャルマル最近忙しすぎひんか？もつと自分をー」

「ごめんなさい、はやてちゃん、お話なら帰ってきてから聞かせてもらうから、それじゃ、2人もごゆっくりっ！！」

そのままシャルマルはコートを羽織りつつも玄関を駆けて行く。

「シャルマル・・・」

はやての寂しそうな声が嫌に響き渡った。

仲良くなるのが辛いんだ

「よし、アイシテル。俺たちも行くぞ！」

「・・・まったく。黙っていたと思ったら・・・いいの？」

「何が？」

八神が困っているというならば助けるのもやぶさかではない！」

「・・・ふふ。まあいいか。というわけではやてちゃん。私達も出かけてくるね。」

「べ、別にええけど・・・何？いきなりどこ行くん？」

「ちよつくらそこまで。」

寂しそうなはやてを見てビビリな響としては頑張った。

いずれ軽蔑される未来が待っているようにも、目の前の女の子の曇った顔を晴らすため！

響は守護騎士の手助けをすることを決めたようだ。

不思議と響が格好よく見える！！

「はぁ・・・見直したと思ったらこれかい。」

「はっ！何を言う。これも立派に八神を助けてるじゃないか。」

さて、あそこまで意気揚々として出かけた響が向かった先は地球と同じような管理外世界。しかしリンカーコアを持つ動物が多い世界である。

「てつきりシグナムたちを助けに行くと思ったんだよ、私はね。」

「・・・？アイシテル、ボケた？」

そんなことしたら高町さんたちに会ってしまいかもだろう？」

「いや、そうだけど・・・その気まずさはやてちゃんのために我慢するだろうから格好いい・・・というか見直したというか、でも見下げたと言うか・・・ま、響だもんね。」

「それに今度こそ山田君も容赦せずに襲ってくるかもしれん。そんな恐ろしい戦いに身を任せるほど俺は追い詰められていないっ!!」

「いや・・・そうだけど・・・はやてちゃんのために・・・」

「だからこれは八神のためでしょ？」

リンカー コアを集めるやあ! っていう催促の元、闇の書が八神の体を蝕んでるわけで・・・」

「うん・・・まあこれも助けになるし、いいか。」

「変なアイシテルだな。」

「逃げ腰が板についてきてるの気づいてる？」

「違うな、適材適所というやつだ。第一、シグナムさんだって気持ちだけで良いって言ってたじゃん? そこで無理に善意の押し売りをしても昔の二の舞になりかねん。」

「・・・今こそ押し売りの時でしょうに。あ、そっちいるよ。」

「おお・・・予想以上に凶暴そう。こいつは止めにして、むこうのヤツにしよう。」

「いや、あつちは小さいから1ページ分にもならないと思うよ?」

「アイシテル、俺はな。冒険つてのが嫌いなんだ。八神が病を患っている今。手堅く行くのが正しい選択だと思うんだけどどうよ?」

「ふぬけ。」

「ちよっ!？」

だ、だからこれは手堅く行くためであって、決してあの幻獣が強そうだからとかじゃなくてだな。」

「私としては日ごろ情けなくてもいいから、ここぞという時は頑張れる男の方が好みだなー!」

「よし、今日は冒険したい気分だ。つーわけであいつからリンカー コアを貰おう!」

といいつつ、ちらちらとアイシテルを見る響。
分かり易いやつである。

ちよつと腰が引けてるのはご愛嬌。

「・・・くす。」

アイシテルは軽い気持ちで冗談のつもりで言ったのだが、自分の気を引くために怖いのを無理してるとはつきり分かる姿を見て、悪い気分ではなく、また少しだけ響を好きになったのだった。

「よし、やるぞ！やってやんよっ！！」

「ほら、とつとといくっ！」

「あがふっ！？」

お尻を蹴っ飛ばして、響を敵の下へ送り込む。

「ほわあああああつ！？

やっぱりこえええええつ！！

ち、近くこないでえええええつ！！ブレイカー！ブレイカー！！
もっとブレイカー！！ぶれいかあああああつ！！」

焦って収束砲を連発する響。焦ってでたらめに撃ってるので一撃も当たらない。

魔法の威力だけは凄いので、それを見て幻獣は逃げていった。

「・・・はあ、時間がかかりそうね。」

「・・・ぶれいかー、ぶれい・・・かあ？

おおっ、いつの間にか逃げてたっ！？

ふふふ、この俺に恐れをなしたのかっ！！ざまみろっ！！見ててくれたかっ！？アイシテル！！」

「見てたけど全然ダメ。当たってないでしょ。ほら、次。」

「ま、まだやんのか・・・正直勘弁してもらいたいんだが・・・」

またちらちらとアイシテルを見て、響は嘆息。

武器を構えて再度、獲物を探していくのであった。

幻獣よりも山田君と相對した時のほうがよほど危険な目にあつたにも関わらず、見た目で怖い幻獣に恐れを生すのは響のチャームポイント・・・だったら良かったのかもしれない。

「ただいまぁ・・・というかお邪魔します。」

「響君、おつかれさん。」

ちよつくらそこまでという割には泥まみれだったり、へとへとになつてたりでどう見ても心配なんやけど？」

「ちよつと未開の森まで行つてただけのこと。」

「日本にそんな場所あるんかいな？」

「世界の果てにはあるもんさ。」

「・・・はぁ？そunnan？確かにそら一つや二つくらいはあるかもしれへんけど・・・」

「とりあえずシグナムさんでもヴィータでもいいから呼んでくれる？」

「あがつていかへんの？」

「家の中に泥を散らすわけにはいかないだろ。この気遣い、誉めてくれてもいいんだぞ。」

「いや、それくらいは当たり前やろ。」

「・・・そうけ。ナデナデしてもらいたかつたのだが。」

「・・・んま、そういうなら・・・こう？」

「ば、ばかたれっ！ほんとにやるやつがあるかつ！！」

「え、そ、そうなんっ！？ていうか、せっかく撫でてやったのにどうしてそっちが切れるんや！！理不尽やろ！？」

「・・・。」

「どうしたの？アイシテル？」

「・・・別に。私には言わないのね。」

「何を？」

「うるさい。」

「・・・はっ！まさかやきもーがはっ！？」

「うるさいって言ったでしょ。」

「だ、だからといって鳩尾はやりすぎだと思います。」

アイシテルはちょっとだけ嫉妬した。

「騒々しいな・・・む、響か。それは・・・」

「できることをと思ったんだけど・・・」

響はアイシテルに持ってて貰ったリンカーコアをシグナムに渡した。

「・・・。」

シグナムはそのまま響のいでたちを見る。

そしてふっ、と笑った後。口を開いた。

「すまない。いや・・・礼を言う。ありがとう。」

「よ、良かった。・・・ええと本当に迷惑じゃないよね？」

「迷惑なはずがあるまい？」

「・・・そう、それなら本当に良かった。」

内心やはり迷惑なんじゃないだろうか？と不安になっていた分、響は心底から安心する。

普通ならばこのくらいでそこまで不安になることも無いだろうが、響の場合はちょっと特殊であり、いまだ勘違い癖や独りよがりな部分がままある。それを自覚してるからこそ湧き上がる自身の無さはそうそうに消すことが出来ない。

“自分のしてることは本当に相手にとって嬉しいことなのか？”という決して良いとは言えない疑念を――どんよりとした気持ちを胸に持ったまま、響は他者と触れ合う。それはなのはの一件以来、ずーっと心の奥底にあるトラウマである。

なんだかんだでシグナムたちの方に援護へ行かなかったのは、自分が足手まといになったり下手に氣遣わせたりした場合を恐れているためだ。

相手も自分も複数の場合、チームワークというのが出てくる。

一対一に持ち込むように戦ったり、仲間を巻き込まないように戦ったり。

そうした戦闘の動きを感じ取れなかった場合、味方どころかむしろ味方するべき相手を自分のミスで殺しかねない。

そんな危惧があるために響はそちらへ行くのを良しとしなかった。

ほっと息をつく響を見るアイシテルの目は悲しそうにゆがめられ、その過剰な反応に人の気持ちに敏感なはやては疑念を覚え、シグナムは戦闘による疲れと判断した。

「んじゃ、今日はこれで。次に来るのは・・・来週くらい？」

「そうなん？別に毎日来てくれてもええんよ？」

「それはさすがに・・・情が移りすぎるといっか・・・」

「なんて？」

「いや、なんでも。」

あまり仲良くなると遠くない別れが寂しくなる。

今でもそのことを考えるだけで十分に寂しいのだから、これ以上仲良くなったら月村さんの時のように・・・いや、それ以上に号泣してしまうに違いない。

だからこそ響ははやてを名前で呼ばない。

意識的に呼ばうとはしないのだ。

響はそのまま何も言わずに帰った。

「あ、ちよいまち、風呂に入っていけば・・・」

はやての声は聞こえないフリをした。

仲良くなるのが辛いんだ（後書き）

弟が髪の毛をブイ系？とかなんとかいう渋谷的なセットをするように。

見えていてイタイタしいですww

弟曰く「ぱんぴーには良さが分からないんだ」とのこと。

分かりたくないな・・・中高生の下げパン並みにドン引きです。なぜわざわざ足を短く見せたがるのだろうか？

ま、ファッションは個人の個性を出す術でもありますから別に悪くはないんですけどね。

ただ、あれは万人受けしないというだけで。

どうするべきか

響はというと、今日もコア集めと勤しんでいた。ついでとばかりにミッドのお金も稼いでいる。

そんなある日のこと。

『お願いできないかしら?』

『はあ・・・ええと、娘さんのサポートですか?』

響はリンディに仕事として娘のサポートをお願いされている。

娘とは言え、義理の娘でフェイトと言うらしい。

どこかで聞いたような気がしないことも無い。

というか、いつぞやの金髪少女が思い出されたがたまたま同姓同名なのだろうと深く考えなかった。

コア集めで疲れていて頭が働かなかったと言うのもある。

いや、この場にアイシテルがたまたま居なかったと言うのもまた災難であった。

アイシテルが居れば諫めていたものを。

響はそのままリンカーコアを一応見られないようにリンディから隠しつつも仕事を快く承諾したのである。

コレが後に面倒なことを引き起こすとも知らずに。

「どうしてこうなった?」

『・・・なぜ私を呼ばなかった？私がいれば・・・響のバカな行為を止められたのに。』

リンディに呼ばれたその日。

艦に来て、響は驚愕した。

なんとなのは達一行がいたのである。ちなみにアイシテルは響の体内にユニゾンしている状態。

こいつらをサポートしなくてはいけないのか・・・気が滅入り、彼女たちの姿を見た瞬間に隠れる響。

山田君がいないのが幸いだが、バリジャケットの姿を一時的に変え、顔を隠せばなんとかなるかもしれない。が、山田君も後からくるとのこと。このままではまずい。

山田君はどんな手段にせよ響を認識する術がある。

顔を隠すだけではいつぞやの二の舞であろう。

となればどうするか？

一応プロの魔導師としてここに居る以上は「昔、喧嘩別れした友人が職場に居るので、仕事をしたくありません」などと仕事を放棄できるはずも無い。というか、魔導師というよりも社会人としてダメである。

かといってこのまま協力するにしても、問題がある。

仕事内容は「闇の書を守護する騎士人格の捕縛、もしくは消去」であった。

うん、無理。

そう響は断じた。

協力しておいていきなり対立勢力にいたりとか、意味不明である。しかもこっちとしてはこのままでははやてが死ぬことも理解してい

る。

友人であるとも認めている。

友人が死ぬと分かっているのに、なぜその真逆の行為をするのか。もちろん理由ならばある。

闇の書が完成すると一つの世界を滅ぼしかねないからであるが、それでも彼女たちははやてを諦めないだろう。納得しないだろう。

1人の主君のために自身の身はもちろんのこと、世界と主君を天秤にかけて主君に傾くくらいには彼女たち守護騎士四人衆は騎士らしくある。

響としても今まで酷くされた分、はやてに依存している部分が出始めている。

本来、戦いを好まず、ビビリであり、なおかつ将来的に嫌われると分かっているのにも関わらず。

例えば巻き込まれても、他の巻き込まれ型主人公とは違い、まずは逃げることを考える彼がわざわざリンカーコアを集めているのは結局のところ、はやての笑顔がーという少し素敵に過ぎる言い方か。

甘えてる。

そう言った方が正しい。

もっと優しくされたい。

ただその自分の満足を第一に、「どうせ、主人公がなんとかするだろう、チートオリヌシの山田君が修正してくれるだろう」という考えの下に、原作がずれることによって世界への滅亡への可能性が高まる懸念を無視して、はやてのために動いている。

結局のところ。

彼は単に自分のために。

自分にもっと優しくしてくれるように。

そのためだけに頑張っているのである。

多かれ少なかれ人とは見返りを求めるものだ。

仮に「何もお礼はいりませんよ、自分が勝手にやったことですから」という善人らしい人間がいたとしよう。

しかしこれは「人を助けたと言う満足感」を見返りに貰っていると考えることも出来る。

このような屁理屈を言っているのはキリが無いのだが、なにはともあれ何がいたいかと言うとだ。

彼の行為は人間である以上——いや、動物である以上仕方の無いことで誰も責められないことである。

そしてそれは響自身も自覚している。

ゆえに響は世界の滅亡よりもはやてを——正確には自身に優しくしてくれる人間を優先する。

これにはもともとはこの世界は物語であつたと言つそういつた「現実を舐めている」感覚が抜け切っていないと言つ部分もある。

すなわち、この世界に生きている人間はフィクションのようなもので、ゲームの主人公が途中で死んでも深刻に考える人間がいないのゲームオーバーと一緒に、響もあまり危機感を抱いてなかった。

そこで響がとつた選択は。

「・・・勝負のどさくさに紛れて高町さんとフェイトとやらのリンカーコアも奪っちゃう?」

『本気で言ってるの?』

「いんや。八割くらい冗談。」

『・・・ダメだよ? 次元犯罪者になりたくないでしょ?』

「わかってるつてば。」

リンカーコアを集めて分かったことだが、これはひどく集まりにくい。

経験値稼ぎがやりづらいゲームなんて目じゃないほどに。

小ぶりの幻獣から奪うリンカーコアでは一行埋まるのがせいぜい。

モンハンで言う所のG級クラスの大型で良くて3ページ。悪いと1ページに満たないこともあった。

さらにこれは“通常”のばあい。

やはり何の罪の無い幻獣達に影響を与えるのは気が引ける響としてはリンカーコアの一部を切除し、回収することにしていたため、それに拍車をかける。

無理に全てを取れば前にアイシテルが言ったような副作用が出るのは分かりきっている。

むしろなのはがやられたように、やられてなお魔法がすぐに回復、そしてまるで無かったことのように振舞えるのはひとえに闇の書のリンカーコアの摘出技能が卓越しているからできること。

しかし、そんなものを持たない響としてはより魔力を集めづらくしていた。

ついつい、なのはやフェイトのリンカーコアを集めようと、ちょっと本気で魔が刺しかけたのは誰も責められないというものだろう。

何はともあれ、響を悩ませるタネはそれだけではない。

はつきり言おう。

ここの艦の戦力は過剰である。

管理局のモブが一生かかっても差を詰められそうに無い才能持ちが響を始めとして、なのは、フェイト、クロノ、山田君、そして・・・

「なんだろう？」

あの巨乳の人？」

『うっうん？』

どこか似てるよね。フェイトちゃんに。』

プレシアテストロッサ。

フェイトの母である。

いや、今はアリシアテストロッサの母か。

フェイトはちらちらとそちらを伺いつつも、ため息を吐く。

以前、軽く触れたとおりプレシアは自分の所業に反省はしたものの、フェイトを娘としては見てない。

人形としては見てないものの、娘としては見れないのである。

しかし、フェイトの幼少の頃の記憶は全てアリシアであったもの。フェイトからすると唯一の無二であるが、あくまでもフェイトはクローン体で記憶を受け継いただけに過ぎない。

昨日パンを食べた。

その記憶が人格に影響を与えないように、人格に影響を与えるのは周りの環境が第一である。

アリシアの記憶こそ受け継ぎ、口調や嗜好は一緒であるもののやはり細かい部分で差異が出てくる。

プレシアは自身がフェイトを作り出したとして、その罪から逃げようとはしていないものの、別人を娘と言ってはフェイトにとってもアリシアにとっても自分の母性に対しても大変失礼なことだ。

ゆえにフェイトを我が子ではなく、1人の人間としてみている。

だが、そんな関係に満足いかないのがフェイトのようであった。

さてはて、なぜこの話をしたかというとこれまた問題なのである。彼女。

今までやってきた罪を軽くするためにアースラ艦に奉仕に来ていた。司法取引といってもいいかもしれない。

「罪を軽くする代わりに反省した証として管理局の手伝いしてよね！」

碎けて分かり易く言うならばそういうこと。

もちろん誰しもがこういった取引を出来るわけではなく、例外であり能力がある人間に限られる。

大魔導師であつた彼女はもちろんのこと例外である。

山田君の忍術で生き返つたアリシアと一緒に過ごすためにもプレシアはやる気満々。むしろ今回の守護騎士を全て自分で捉えてやるという意気込みなのだ。

いまだ彼女が前戦に出てないのはなんとか山田君が押さえ込んでいるため。

ここに山田君がいないのも裏からなんとかかかんとかやっている。というわけである。

一番無難なエンドへ向けて山田君は原作をあまり改変したくない。いや、仮に。

ここではやてを捉えたとすればはやては死ぬしかない。

一つの次元世界と少女の命。

どちらを重視するかは火を見るよりも明らか。

さらには管理局と言う仮にも一般人の安全を守る仕事をしている彼らに博打と言う概念は存在しない。

いちかばちかなどというのは本来、一番避けられてしかるべき手法なのだ。

すなわちはやてが管理局に見つかるとそれでもうはやての人生はバッドエンド。

かといって山田君が下手に介入して何か一つでも歯車が狂えば一番避けるべき最悪なカルマエンドとなる。

はつきり言おう。

そこに響まで混じると、まずもって守護騎士達に勝ちが無い。

いや、彼女たちに味方する勢力もある。

それは以前の闇の書事件を担当し、なおかつ今回使い魔にはやての周りを探らせている管理局グラハム提督だ。

が。

彼は一度闇の書を解放した後、そのまま宿主であるはやてを永久的な封印処理に処するつもりである。

これまたはやてにとってはバッドエンドである。

響はどうするべきか迷ったまま、戦場へと身を投じた。

どうするべきか（後書き）

なのはのPSPの新作が出ましたよね。買うべきか否か。格ゲーはすぐ飽きますよね。戦える人間が周りにいないと。ついでに作った会社がバン。ム。開発陣によって変わるとは思いますが期待値がまま低いです。

どうせわざとゲーム内に入れなかったとしたか思えないタイミングのダウンロードコスで一儲け考えているのだろう？と。

悪くは無いのですし、ゲーム会社という娯楽を司る企業と言えど商売は商売。売れなければ潰れるのですから売ることを第一に考えるのは当たり前なのです。しかし消費者としては到底納得できることじゃないんですよ。ゴットイーター開発陣を見習って欲しいものです。消費者としてはそっちの方が遥かに好感度が高いのに。ま、直接お金に繋がることはないですけどねえ。世知辛いすねえ。

嫉妬と羨望

結局、響は甲冑のデザインを変えて戦うことにした。

双方に対して少なくともすぐにはれるということはないはず。

戦いながらどうするかを考えることにしたのだ。

響がサポートするのはフェイトのほう。

なのはへはプレシアが行く。

これはリンディがフェイトとプレシアの関係を鑑みての組み合わせである。

2人一組で1人の守護騎士を捕らえると言う作戦——というほどでもない基本方針だ。

ちなみにさすがの山田君もこれ以上プレシアを抑えるのは無理だった。

「よ、よろしくお願いします。」

「……。」

フルフェイスの甲冑を身に纏っている9歳児（身長約120センチ）に戸惑いつつ、フェイトの挨拶に首肯して答える響。カチャリと鎧が擦れる音がする。

一応、声は出しはしない。

さて、守護騎士達が現れたのは海鳴市上空。

下っ端局員が包囲網を敷き、クロノによる範囲攻撃後、まだ立っているようならば弱らせて捕獲。それが今回の仕事である。

「お願い、バルディッシュ。」
『セットアップ。』

セットアップするフェイトたち。

戦場に出る前にやつとけと思った。

そして発現したバルディッシュとレイジングハートはその見た目を
変えていた。

『カートリッジシステム・・・これは本格的にまずいかもね。』
「・・・。」

響の体内にいるアイシテルがぼやく。

どんだんはやてが捕まる可能性が上がっていく。
響は選択した。

「しょうがない。このまま適度に力を抜いて戦おう。」

『いいの？それだとはやてちゃんが・・・』

「・・・どうしろっていうんだよ。ここでシグナムさんたちの味方
に付いたところでどんな理由があるにせよ犯罪者・・・前科がかか
ることは間違いない。世の中つてのはそんなに甘くない。八神には
悪いが・・・俺にそこまでする理由はないはずだ。」

『・・・分かった。響がそういうなら仕方ないね。』

「・・・叱らないのか？」

『女の子の笑顔すら守れないのかっ！？って感じ？
少年ジャンプじゃあるまいし、そんなことしないよ。この場ではや
てちゃんの味方に付かないのは無難ってところ。はやてちゃんが犠
牲になるのは仕方の無いこと。もちろん今回の件は後を考えなかつ
た山田君のせいもある。というかそこが一番だから響は気にするべ

きでないよ。もし山田君がプレシアテスタロッサを救わなければ響がこの場でわざと負けてハイ終了、だったんだから。むしろ良くやった方だよ。リンカーコアを集めて協力したことがバレればそれだけで捕まりかねないんだから。」

「……。」

『それとも叱咤激励して欲しかったの？』

「ああ……そうかもしれない。」

『甘ったれたことを言うんじゃない。自分の行動に他者の理由を借りてどうするの？自分で選択した結果、はやてちゃんの味方をすることを諦めた。後悔しようと罪悪感にさいなまれようとそれが響の選択である以上、私に口を挟む筋は無い。』

「……ああ、そうだな。せめてばれないように手を抜こう。」

『……響は変わらず冒険をしないね。』

「それが俺だからな。」

アイシテルの言葉に非難の色は含まれていなかった。

そんな念話をしていると、何時の間にかシグナムも来ていてフェイトが戦っていた。

カートリッジシステムを搭載したため、シグナムたちが劣勢である。どんなに経験が技術が年季があつたとしても、圧倒的な力押しの前にはさすがに歯が立たない。

「ここで……つつたつてるわけにも行かないか。」

『どうしたって過剰だよ、戦力が。』

響も戦いに加わる。

「一対一……かと思ったのだな。」

「……。」

シグナムは辟易としつつも、絶望的な状況にも関わらずも、その双眸にはいっぺんたりとも弱い光は存在しなかった。勝てるはずが無いのに。

負ける道しかないはずなのに。

微塵も負けるつもりの無い顔だ。

なぜそこまで頑張れるのか。

なぜそこまで気張れるのか。

なぜそこまで体を張れるのか。

心底から理解できなかった。

彼女達の話によるとたかだか半年にも満たない付き合いだそうだ。

仕えるべき主——主君だからといって、そこまではやてに心酔する理由はなんだというのだろうか？

プログラムとして組み込まれているからでもなく、闇の書の機能の一部だから、というわけでも無い紛れも無い強い意思を感じた。

そんな人間がいる彼女達に響は嫉妬した。

「どうして・・・」

ついでと言葉が漏れる。

「どうしてそんなにがんばれる？」

「・・・それが我が使命——いや、そんな無粋な言葉で飾るのも味気ない・・・——助けたいと——決めたからだ。」

戦場に出た人間が悠長に話に付き合うのは意外だったが、それは少しでも時間を稼いで自分の体力を回復させるのと自身を激励する意味もあるのだろう。

助けたいから。

そう決めたから負けられない。

そう言葉に出して自分を激励する。

響の声は鎧でくぐもっていて、幸いに気づかれなかったがそれは最早どうでも良かった。

羨ましい。

羨ましい。

羨ましい。

ただそれだけが胸を埋め尽くす。

自分の身を第一に考える響にとってそれは酷くまぶしく妬ましく。
なによりも羨ましいことだった。

果たして響が同じく追い詰められた時、彼女のように頑張れるのだろうか？

自分の醜さに嫌悪しながら、しかしいまだ彼女達に味方する気になどなれない。

響は腰に刺さる一振りのロングソードを抜いた。

とにかくこの人の目の前から消えたかった。

早々にやられて消え去ろう。

『っ!？』

ひびーーー』

突如、腕が視界に入った。

なんだこれは？

「あぐ……が……あ……」

目の前には腕。人の腕が自分の胸から突き出ているように見えた。そしてその腕の先には光り輝く一つの球体。

最近になって見慣れるようになってきたリンカーコア。

響のリンカーコアが燦然と輝いている。

「このまま闇の書が捕らえられては困るのでな。そしてついでに貴様のリンカーコアも頂いておく。」

「……おま……え……は勇者王？」

響はとあるアニメで勇者王と呼ばれた彼と同じ声を聞き、とぼけたことを言ってそのまま意識を閉じた。

なんとなく動いた視線の先には同じように勇者王にプレシアテストロッサがリンカーコアを取り出されていた。

ああ、ここで魔力を失えば俺の顔が見られるな。と暢気に考えつつ。

へたれる（前書き）

うつむ、シリアス調が続くなあ。あと一話ほど続くと思われ。

へたれる

「知らない天井だ・・・と言っておいた方が言いのだろうか？」

『馬鹿なこと言っていないで、現状確認したら？』

「それもそうだな。」

響はベッドから身を起こす。

少しからだがダルい。

良く分からない虚脱感が全身を襲っている。

『丸一日眠ってたからねえ。ちなみに正体はバレたよ。』

「・・・だろうな。シグナムさんにも？」

『もちろん。まさかっ！って顔してた。でもそのまま特に何も言わず・・・管理局側のスパイだと思われてるんじゃないかなあ。』

「・・・最悪だな。」

『高町さんたちは今度は何を考えてるんだろう？って感じで警戒してた。』

「そらまた最悪だな。」

『そっちは割りと軽い言い方だね。』

「ま、高町さんの件は今更だし。バレちまった以上は仕方ない。山田君だって何もしてない今から問答無用で殺しにくるということもないだろう。で、アイシテルのことはばれた？ユニゾンデバイスであることとか。」

『問題ない。検査の時は抜け出してたし。管理局・・・というかここアースラとか言う艦なんだけどここの警備ザルだしね。』

一応、融合騎もといユニゾンデバイスは古代ベルカの技術であり、現存はほぼしない。

バレたらちよつと面倒になるかもということアイシテルは隠れた

のだ。

「そうか。で、リンカーコアを抜かれた後遺症は？」

「なひ。強いて言えば魔法を使えないことかな。だから髪の毛と目の色も戻ってる。」

「・・・それだけ？よっぽど抜き出す技術が高かったってことか？」

「そうみたい。あの仮面のーー」

「勇者王のことか？」

「勇者王って何さ。」

「中の人ネタだ。もとい声ネタ。」

「・・・まあいいけどね。その勇者王はかなりの力量を持っていて、尚且つ2人いるみたいだから。」

「2人？」

「響も見てなかったっけ？」

「気絶する前にプレシアテストロッサのリンカーコアを抜き取った腕。」

」

「あれか。」

「相手の目的は不明。何はともあれ私たちは結果的に戦わずに済んだってこと。」

「・・・結果オーライ、じゃないな。」

「もうはやてちゃんの家にはいけないね。」

「・・・別に構わないさ。想像とは違ったが、結局のところ遅かれ早かれこうなるのは分かってた。」

それよりも、である。

「・・・羨ましいな。」

「・・・。」

飯とは言え、響の体内にユニゾンしていたアイシテルは響の心境を

知っている。

アイシテルは何も言えなかった。

「帰るか。」

『そうね。』

もう帰って普通に過ごそう。

この事件に関わるのは止めにすることにした。

何せもうやることはない。

俺にはアイシテルが居ればいい。

母さんが居ればいい。

厄介ことはもう沢山。

ベッドから起き上がり、一応リンディに報告して帰らせてもらうことに。

体がだるいので久々におっぱいチートの出番だ。

自分の胸を揉み揉みして傷を癒す。

悲しきかな。

母親と自分の胸しかいまだそのチートが発揮したことがないという。しかも頻度は圧倒的に自分の胸を揉むことが多い。

自分の胸を熱心に揉みしだく9歳児。

傍から見たら何かに目覚めた将来が不安な子供である。

いや、見た目が非常に整っているので美少女に見えないことも無い。だとすれば胸の成長を気にし始めた女の子に見えないこともない――
――ううな？

「・・・あ。」

「ん？」

何しにきたのだろうか？

高町なのはさんがそこにいた。

病室に何のようか。

見舞い、ではないだろう。おそらく。

そして彼女はフリーズしていた。

ピクリとも動かない。

それはそうである。

昔はやたらと付きまとってウザさの塊で、わけのわからないことを言って自分の胸をむりやり揉みだいた人間が改心したと思ったら、近づくための演技らしく、さらに久しぶりに再開したら自分の胸を熱心に揉んでいるのである。

一体どういうこと？

わけがわからない。

そんな思いがなのはの胸中に渦巻いた。

とりあえずなのはは何となく見てはいけないような気がして

「う、ごめんなさいっ！」

と去っていった。

響は違うんだけどな・・・とばやきつつも、重ねて言っが今更誤解の一つ二つ何だという感じで全く気にしなかった。

「よし、帰ろう。」

『・・・スルーとは。まあ妥当か。』

そうして響はアースラを後に。

リンディは戦力が減ることを避けたかったが、響の落ち込みようを見て何かあったと判断し逆に足手まといになりかねないので響を帰したのだった。

普段ならばここでお節介の一つ二つはしてやりたいところだったが、彼女も仕事の真っ最中。しかも前回の闇の書事件で夫を亡くしている。

彼女にしては珍しく他人を気遣っている余裕は無かったのだ。

ビューンビューン！

風を切る音が立て続けに巻き起こる。
剣を振る音だ。

「・・・ふっ、しっ！」

しばらくして響は剣を振るのを止めた。

「くそっ！！」

剣を地面に叩き付ける。

金属音がやけに寂しく響く。

「何をそんなに苛立ってるの？」

「うるさいな。」

「八つ当たりしないでよ。」

「・・・すまん。」

山でちよつとした結界を張ってそこで剣を振る響と、それを見学するアイシテル。

体育座りの状態で微妙に足がそとへ向いているので、スカートから覗ける聖域が見えそで見えない。というのはどうでもいいことで。

「・・・分かつてるだろ？」

「はやてちゃんのことね。見捨てたのまだ気にしてるの？もう三日だよ？三日。」

「早々割り切れるかよ。」

「だったらあの場で裏切っちゃえばよかったのに。」

「アホ言え。思いきり犯罪者の仲間入りだろうが。」

「・・・はあ。じゃあどうしたかったのよ？」

「・・・。」

「あれもいや、これもいやじゃ本当に満足いく結果なんて得られないと思うよ？私は。響が一番満足いく結果が今のこれでしょ？」

「・・・。」

響が一番避けたいと思ってるのは犯罪者になる事だ。

先も言ったように情状酌量の余地があるからと無罪放免になるわけでもない。

さらには完全な悪役ヒールに徹しきれ自信が無い。

きつと原作組みからは一心にその敵意を向けられるだろう。

いや、今や守護騎士達も敵だ。

一度裏切ってしまった以上、敵じゃない！と言っても信用はしてもられない。

信用というのは日ごろの行いで勝ち取るもの。決してお金では買えないし代えない物だ。

いや、商売の世界においては違うのだがそれはまた別の話。

一度裏切った以上、二度目が、三度目があるかもしれない。そして迷っている様子も分かったろう。

敵か味方になるのかを迷っている人間を味方につけるほどシグナムは甘い人間ではない。

もし途中で敵になられた場合、その時点で自身の主は終わる。

すなわち響が今更やつぱりシグナムたちに味方すると言ったところで「はやてにあわせるわけにはいかない、リンカーコアを渡して早々に立ち去れ」と言われるのがオチだ。

もしくは問答無用で追い払われるか。

少なくとも歓迎されることは無い。

すなわち。

響はただ1人。

ただ1人で管理局の追っ手を避け、なおかつその労を労ってもらうべき守護騎士達にも白い目で見られ続ける。

四面楚歌の状況に陥る。

もちろん響の逃げたという選択、裏切ったという形になったこと。

それは責められたものではない。

生涯を誓った相手や唯一の家族ならばいざしらず。

ちよつと前に知り合って、優しくされただけ。

それだけだ。

関係性を言うならばただの友達。だろう。

言い方は悪いが、友達なんかのために自身を犠牲に助けようとする人が一体どれだけいるというのか？

いや、割と助けられる人間もいるだろう。

しかし今回のこれは社会的地位、他命だって懸かるかもしれない。物語の流れは山田君が必死に直そうとすることから外れ始めてることが伺える。

となれば。

原作組み含め、誰か1人くらい死んでもいいんじゃないか？

誰も死なない、後遺症を残すような怪我をしないと誰が保障できるのか？

仮にそうしたリスクを払い助けるとしても最低限、昔から付き合いのある親友・・・そのレベルに至らないと無理だろう。

すくなくとも一月にも満たない友達のために命や前科を背負い込むなど気が狂ってるとしか思えない。

よくあるチートオリヌシは命が懸からない、もしくは懸かるような状況に陥ってもそれを退けるだけの文字通りの反則チートを持っている。だからこそそんな芸当が出来る。出来てしまう。

しかし今回の件に役立つような――絶対の自信が持てるようなチートなど響は持っていない。

奥の手こそ残しているものの、直接的に役立つものではない。

ゆえに響の選択は十二分に上等で、オリヌシらしくは無いが一般人らしい選択で。

人間らしく、決して責められる類のものではないはずだ。

なのにも関わらず。

響の中で未だに、はやての顔が頭をちらつく。

アイスをほおばり、嬉しそうにするヴィータの顔が脳裏に浮かぶ。

ゆつたりと伏せして寝ているザフィーラの穏やかさが胸を安らげる。シグナムがはやての料理に舌鼓を打つ彼女にしては珍しい揺るけた表情が胸を打つ。

紅茶をせっせと用意するお母さんなシャマルの後姿がフラッシュバックする。

そしてそれらに囲まれ、笑うはやて。

それが頭を付いては離れず、響の苛立ちを加速させる。

それらを守りたいと思う自分と、色々な積み重なった問題に恐怖してる自分。

運動をして頭を空っぽにしようとしたのだがそれもあまり意味を成さない。

「スーパー・・・行ってくる。」

「私も行くよ。」

「別にちよつと小腹が空いただけだよ。」

「だったら私もお腹が空いたって事で。」

「・・・だったらって何さ。」

「今の響を1人にしておいたら危なっかしいでしょ。」

「俺は危険人物じゃねえ。」

「え?」

「え?じゃないわっ!」

「ほらほら、いくんでしょ?」

「・・・あいよ。」

アイシテルと話しているだけでも気が紛れることに気づいた響であった。

実に私好みな選択（前書き）

あけましておめでとー！！

ま、これは予約投稿だからこれを書いてる時、まだ日付は変更してないのだけれども。今年も百合姫をよろしくにゃん！

・・・すまん、キモかった？

正月記念ってことで、今回は響とアイシテル、バリアジャケット、ユニゾン状態のラフを入れる予定。え？素人の絵なんて誰得だ？
そういう方は挿絵設定をOFFにして頂けるといいかと。

実に私好みな選択

「なっ！？シグナムが？」

「ええ、シグナムが捕まったわ。」

スーパ―に行くと言はたまたま八神はやてと会ってしまった。

そこで八神の家にお呼ばれたわけだが、仕方が無かったのだ。はやては何も知らないのだから。

今ははやてが台所に立ったのを見計らって響がシグナムのことを聞いたのだった。

その問いに答えたのがシャルだった。

そしてヴィータが悔しそうに言う。

「・・・おい、助けてくれ。」

「は？」

「オマエの力は最初にあつたときに大体は分かつてる。今の私たちよりは遥かに強いはずだ。」

「ヴィータッ！！」

「うるせえっ！！」

ザフィーラの諫める声に怒鳴り返すヴィータ。

さりげなくアイシテルが魔法ではやてに聞こえないようにしていた。気遣いの出来る女性はあるらしい。

「確かにこれはあたし達の問題だよ、シグナムだって言ってた。」

あいつは迷っている、巻き込んだじゃない”ってな。」

「・・・スパイだとは思ってないのか？」

「はっ！だとしたら今頃私たちは全員捕まってるだろうさ。どんな

馬鹿でも気づくだろう？」

「あ、ん・・・まあそうだな。」

響は驚いた。敵としてみなすどころか、此方を気遣っていたのである。

「捕まればどんな扱いを受けるかも私たちは分かってんだ。はやては良くて闇の書ごと封印処理。悪くてその場で闇の書ごと消し飛ばされるかもな。」

実際はそんなことをしても闇の書の防衛プログラム自体を切り離して消去しない限りは新たな契約者が出てくるだけであるが。

「でもあたしたちはどんなことをしてでも、はやてを殺したくない。あたしたちのせいで封印処理なんてされたくない。」

「・・・。」

響は何もいえない。

「どうして、どうしてもはやてばかりこんな目にあわなくちゃならないんだ・・・」

ヴィータの目から涙が溢れ出す。

響は目を逸らした。

やめて欲しい。普通の人間にそんなことを求めないでくれ。

「・・・助けてくれよ、お願いだ、どんな手を使ってもあたしははやてを助けたいんだ！！
頼むッ！！」

ヴィータは土下座した。

ザフィーラとシャルが息を呑む。

しかし、響の応えは。

「・・・やめてくれ。俺は・・・」

「・・・そう、か。どうしても・・・ダメなんだな？」

「・・・。」

響は目を伏せ顔を逸らす。

「・・・はは、悪かったな。変なことを言った。忘れてくれ。」

「あ、ああ。」

ヴィータの声は震えていた。

響の声も震えていた。

「んじゃ、あたしはコア集めに行ってくる。ザフィーラ、行くぞ。」

「・・・ああ。」

「私も行くわ。」

「シャルは戦闘タイプじゃないだろ？」

「でも、そうも言ってられない状況でしょ？」

「・・・そうだな。わりい。」

「別にいいわよ。」

響は呟く。どうして責めないのか？

どうしてもつと怒らないのか？

別に脅してくれた方がいい。

それだけでへたれの自分は動けるはずなのに。

こういうとき、巻き込まれがたの主人公だったらとどれほど渴望したのか。

「んじゃ、ゆつくりして行ってくれ。シグナムがいなくなつて、はやて寂しがつてたから。」

「うむ。ヴィータの件は気にしなくて良い。俺たちでなんとかしてみせよう。」

「それとも私達が捕まつたら・・・」

「シャル。」

「ご、ごめんなさい。」

「もしは、ねえ！絶対に助けるんだ。いいな。」

「ええ。分かつてる。」

響はそんな三人を呆然と見送つた。

「あれ？シャル達はどこいったん？」

「・・・ちよつと出かけてくるつてさ。」

「そうなん？」

まったく、もう。皆忙^{せわ}しいんやから。」

「・・・全くだな。」

「・・・久しぶりやけどなんかあつたん？

やたらとテンション低いけど。もっとテンション上げていかなつ！
」

「・・・ごめん。」

「・・・はあ。こんな美少女に茶を入れてもろとるんやから、そこは“うひょーっ！！”とか叫んで貰わんと。」

「うひょー。」

「そんな棒読み、むしろこっちまでテンション下がるわ。」

「・・・すまん。」

「・・・はあ、ダメやこりゃ。」

「・・・悪い。」

はやてはため息を付く。

沈黙がリビングを包む。

「響君、どうしたん？」

本当に何かあったん？なんでも言ってくれてええよ？」

「・・・そういうはやてこそ何かあったのか？」

「・・・わかる？」

「いや、わからん。」

「なぜそんなことを言ったんや。」

「ヴィータたちが言ってた。」

「・・・そうけ。まあシグナムが遠くに出かけた言ってるな。」

「すぐ帰ってくるだろ・・・多分。」

嘘だ。

「そうやといいんやけど。でもヴィータたちも何か隠し事してる感じでな。」

目の前の少女は何も知らない。

「なんか、こう嫌な感じがするというかな。」

刻一刻とその命の終わりを迎えている。どんな道にせよ。

「ちょっと前まではすっごく幸せやったのに。どうしてこう上手く

いかへんのやる？」

懸命に頑張っていた剣が堕ちた。あれだけのことを言っておいて。次は槌か盾か。それとも癒か。

「うちな。ただ一緒に過ごせばいいんよ。なのに……」

どこで歯車が狂ったのか？

「ごめんな、遊びに来た客人にこんな辛気臭い話……」

そもそも下手に介入したのが悪かったのだ。

知らないまま彼女が自分の知らないところで死んでくれるような道に入ったらそれはそれで良かった。

でも知ってしまった。

優しくされてしまった。

「……ご、ごめんな、ちょっと泣けてきてもうて……なんか最近変なんよ。体の麻痺も進んできとるし、それが不安で不安で仕方なくてな……皆が居てくれたから強くおれたのに、いまやその皆もほとんど一緒にいてくれへん。」

「はやて。なんでも願いを言つて。」

「……？」

「俺がなんでも叶えよう。どんな願いでも、命に賭して叶えて見せる。だから言つて。」

つい勢いのままに、衝動のままにそう言い放った。

はやては、だがかし。

「……願いなんてないんよ。ただ皆がそばに居てくれるだけでえ

えんや。・・・そう、それだけ。」

そう言つて微笑むはやてを殴りたくなつた。
どうしてそんなに強くなれるのだろうか？
どうしてそんなに・・・そんなに・・・

「響君？」

その呼びかけに応えずに響は家を飛び出した。

「・・・辛気臭すぎて逃げてもうたか。そら、人の不幸話聞いて愉快になるやつなんておらへんよな。」

「単純に響は泣き顔を見られたくなかつたってところじゃない？」

「・・・どうして響君が泣くん？」

「自分のみつともなさ・・・かな。」

「・・・？」

「まあ9歳児にはさすがに難しいよね。」

「どういうこと？」

「まあまあ。おっと・・・呼ばれてるみたい。それじゃまたね、はやてちゃん。」

「あ、うん？」

アイシテルはそういつてはやての前から消え、現れたのは響の目の前。

「さて、応えは決まつた？」

「・・・ああ、今更だよな。」

何を悩んでいたんだか。今までと大して変わらん。

俺はいつだって疎まれてきたんだ。そこに管理局に勤める人間全てが加わるというだけ。それで死ぬわけでも無し、問題ない・・・と断じて見た。いや、問題だらけだが。」

「くくく、上等。」

「これは単なる人助け。なのに犯罪の汚名を着せられる。すなわち誤解。」

そう、ただか誤解。誤解を受けに受けてきたこの俺に誤解が増えようと増えまいと変わらん！！」

「それで？」

「ゆえに助けてしまおう！！という結論に至った。」

「こんぐらつちゅれーしょん。そんな応えは実に私好みなの。」

「上から目線ですね。」

「響よりも下になれる気がしれない。足震えてるよ？」

「うそっ!？」

響は自分の足を見る。震えてない。

「う・そ。」

「うそかよっ!？」

「ま、そう悲観することもないでしょう。」

犯罪歴の方は情状酌量があるとして、命が懸かってるって部分は私が付いてるんだから安心しなさい!!」

「・・・ああ、心強いよ。」

「と、言いつつも声が震えてるよ？」

「やかましい!これは武者震いだ。」

「声の武者震いとか初耳すぎる。」

だまらっしやい。

こうして響は管理局と戦うことに決めた。
まずはシグナムの救出からである。

キャラ図鑑（前書き）

キャラの設定は作中にでてきた物のまとめ。

あまり必要ないかも。見なくて大丈夫という方は挿絵のみ見ていただければと。

キャラ図鑑

相馬 響 h i b i k i s o m a

我らが主人公。

勘違い系、自意識過剰系の主人公であつたが、なのはに対し勘違いからくるセクハラにより大事化。

それをキツカケに自意識過剰キャラを脱したが、あれだけ勘違いした人間がそう簡単に真つ当になれるとも思われず、いまだ原作キャラにとっては自意識過剰キャラである。

そんなわけで酷い時期を過ごしており、ギャップゆえに優しくしてくれる人間に弱い。

性格はビビりで女性関係的な意味ではないへたれ。

使用デバイスは一对のナイフ型。

アイシテル。

バリアジャケットが変化し、それぞれで戦い方が異なる。

←ブリッツフォーム

> i 3 8 1 8 1 — 4 6 1 6 <

高速機動戦闘用。近接特化。

←ノーマルフォーム

> i 3 8 1 8 3 — 4 6 1 6 <

万能型。見た目通り防御力が高い。

アイシテル

響のデバイス。面白いことが好きで、好きなバラエティや漫画はもっぱらギャグ系。

デバイス時の言語はドイツ語に似た旧ベルカ語。

旧ベルカ式のカートリッジが搭載されたナイフとミッド式のナイフで一对のデバイス。

ナイフ自体に^{フォームチェンジ}変形機構は無く、使用者に展開されたバリアジャケットを變形させる。

大体のことがそこそこにやり易い万能型である甲冑姿のノーマルフォーム。

近接特化のブリッツフォームがある。

また、神様から与えられたデバイスなので性能自体は現存する全てのデバイスを上回る。

なをかつ感情豊か。

不完全とは言え、願望機とされるジュエルシード並みの魔力貯蓄機能を持つ。いざという時の魔力ブーストが使えるが、アイシテルの所有者である響には扱いきれないため、現時点では一度も使用されていない。

アイシテルは現在、守護騎士のプログラムを元に^{ユニゾンデバイス}融合騎化。もとい人化。

容姿は黒髪ツインテール。

ユニゾンデバイスになったため、ナイフの中には戻れないが、あくまでもナイフが本体である。

> i 3 8 1 8 2 — 4 6 1 6 <

← 響とユニゾン後。

> i 3 8 1 8 4 — 4 6 1 6 <

すにーきんぐみっしょん

「こちらスネーク。アースラ艦に潜入、成功した。」

『あほ言っでないで、とつととシグナムを救出しなくちゃ。』

「・・・ちよつとくらいいいじゃないか。」

響は早速とばかりにアースラ艦に潜入した。

捉えられているならばここにいるだろうという考えの下。

ちなみにダンボールを被っている。

某、^{スニーク}潜入の達人もダンボールは最高だと言っていた。
ばれないに違いない。

「君は一体何をやっているんだ？」

「・・・。」

響はこそりこそりとダンボールを被った状態で歩いていく。
極限の緊張感の中、汗がたらりと流れ落ちる。
心臓が激しく脈打つ。

「おい、無視するんじゃない。」

「・・・。」

じとりとした脂汗で肌に張り付く服が嫌に気持ち悪い。
ばれれば命は無い。

そんな強迫観念が響を襲い、今にも足を外へ向けなくなる。
が、一度やると決めた以上やらねばなるまい。などという高い志は
持たないがそれでも男の子としてのちっぽけな意地くらいは守って
みたい。

ただただ一心にそう考え、逃げそうになる足を叱咤し歩を進める。

「聞こえているのかっ!？」

「わおっ!？」

ダンボールをひったくられた響。

「な、なん・・・だっ!？」

バカなっ!？どうしてばれた!？」

「はあ？」

先ほどから話しかけていたクロノは頭にクエスチョンマークを浮かべた。

「ええと・・・かくれんぼのつもりだったのか？」

どう考えてもこんな怪しいダンボールがあればばれるだろう?」

「いや、だからこそ“こんなダンボールに人が隠れているはずが無い”という虚を突くわけで、普通の人間ならばスルーするはず。クロノ・・・オマエってヤツはKYだな。」

「はあ・・・。」

クロノはただひたすら困惑するばかりである。

そもそも地球よりも遥かに文明の進んでいるミッドの人間にとってダンボールなどと言う前時代の遺物など下手なロストログニア以上に珍しいだろう。

衝撃吸収能力に優れた良い品なのであるが。

すなわち響から見たら完璧でも、ミッドの人間からすればむしろ響こそ異質でKYなのだ。

そしてよくよくKYとされるクロノだが、彼は決してKYなどでは

ない。

職務に忠実で、真面目なだけだ。

たとえば周りが1人の人間を苛めてるからといって、俺も空気が読んで苛めておこう！などという理屈がまかり通らないように、クロノは職員としてただ懸命なだけである。

決して彼はKYじゃない。

大事なことから二度言いました。

「こうなつてはクロノ、すまぬ。」

「は？つて、いだっ！？」

「あれ？」

ダメだな？気絶しない？

「いだっ！？あいたっ！？ちよつ、君は突然何をするんだ！？いたっ！？やめないかっ！？あうちっ！？」

「なぜに？」

響はクロノを気絶させようとして首の裏をビシビシとチョップするのだが、クロノは気絶しない。

当然である。

最近になつて剣が多少振れる様になつた程度の人間に、そんな芸当がこなせるはずもないのだ。

このまま出来ないと、ちよつと格好つけて気取ったイタイやつ認定されかねないので、響はムキになつてクロノの首裏をチョップし続けた。

アイシテルが忍び笑いしてたのもあつて恥ずかしさが加速した。

気絶してよっ！

今気絶してくれないと自分がイタイやつになつちゃうじゃないかっ！！

「ちよっ！

だから痛いといってるだろうっ!？」

「あれ？何してるの？響君。」

「あ、エイミイさん。」

クロノの幼馴染らしいエイミイ。

クロノはなのはたちと変わらない外見年齢なのに、実は14歳。さらにはこのエイミイも14歳。

見てみるよ？

これで同じ年なんだぜ？信じられるか？

「いや、首裏にチョップで気絶させようとしたんですが・・・」

「なぜそんなことをするっ!？」

「え・・・そういえばなぜだろう?」

なんか見つかつて、焦って、とりあえず口封じがてら・・・みたいな感じだったんだろうか？

「あははは、まったく響君ってば漫画の読みすぎだよ！

こういうのはコツがあっただね・・・こんな感じで・・・えいやっ
!！」

ズビシッ!!

エイミイのチョップがクロノの首筋にクリーンヒットした。

あがつ!?!と情けない悲鳴をあげて崩れ落ちるクロノ。

おおっ!？

ちよつと畏怖が籠った声で驚く響。

その容赦の無さはもちろんのこと、すっごい痛そうな音にドンビキした。

「大抵の素人さんは首筋ってことで下手に力をこめたら・・・みた

いな感じで遠慮しちゃうんだけど、そうしちゃうと逆に難しい上に痛い思いをするのさ。大切なのは思い切ることだね。それじゃ、クロノは持ってちゃうけどいいよね？」

「あ、は、はいっ！」

「そんじゃね。」

呆然とクロノを引きずるエイミィを見送った。

まあ、仮にも荒事を担当する管理局の職員だしそれくらいは出来るよね・・・そう納得しておくことに。

まあ異質なんじゃ仕方ない。

ダンボールは諦め、普通に歩いてシグナムを探すことにした。

どうせ戦う上で自分が向こう側に付いたことなどばれるのは決定事項。

こっそり助け出して、できるだけ追われる立場になるのを後回しにしたかったのだが、覚悟を決める響。

いや、覚悟はすでに決めてあるはずだというのに未だに揺らぐ。気が変わらないうちにとっとシグナムを助け出してしまおう。そう思ってキリキリ歩いていく。

すると“仮牢”の札がある部屋へ付く。

軟禁状態ということか？

何にせよ、アイシテルに協力してもらって艦の防衛プログラムにハッキング。ロックを開けて入ってみた。

一応別の犯罪者が捕らえられていると言う可能性も念頭に、ブリックツフォームで開ける。

そこにはあられもない姿のシグナムが居た。

着替え中のようなのだ。

目線が逢う。

「ええと・・・ごゆっくり？」

「とつとと出て行ってもらいたいのだが？女であることは捨ててあるがそれでも幾許かの羞恥心くらいはある。」

「ご、ごめんなさいっ！！」

響は焦って外へ出た。

シグナムのおっぱいはデストロイ。

そんな感想を持った。

どんな感じかはニュアンスで理解して欲しい。

響はシグナムに事情を説明した。

味方になることも。

「必要ない・・・と言いたところだが、素直にありがたい。礼を言おう。」

「あ、いや・・・その・・・でも」

「迷いは無いのだろう？向こう側に付いてたことなど最早どうでもいいことだ。」

「・・・はい。」

「そうか。君が選択したことだ。いや、君と言うのも最早他人行儀か。響。」

オマエが決めたことだ。私がどうこう言うことではない。できることならば巻き込みたくは無かった。が、それもまた意味がない。」

「シグナムさん・・・その、俺が言うのも難ですけど信用・・・し

てくれるんですか？」

「見くびるなよ？」

これでも何百年と生きてきた。

そうした目をした人間は総じて強い。力が――ではなく中身がなゆえに絶対の信頼とまでは行かずとも少なくとも私たちに不利なことはしない。そう断言できる。」

「・・・。」

そうなんだろうか？

響は自分がそれほど高潔な人間だとは思えない。

覚悟を持ってここにいるつもりだが、それこそ本当の窮地に至った時、彼女達を迷わず見捨てて――

「むっ！？」

「警報っ！？」

「ばれたのかっ！？」

『違うよ、そっちは私がハッキングをしてるから万全。チートデバイス
の性能を舐めないでよね。これはヴィータちゃんたちが発見された
とかじゃないかな？えーっと今、モニター映像を――はい。』

そこには砂漠のようなフィールドで向かい合うのはたちとヴィータ
たちがいた。

やはり追い詰められているようだ。

プレシアもいる。3日で回復したのはさすが元研究者と言えよう。

若い子供ならばいざしらず、彼女は若くとも30代後半。

いくらなんでもリンカーコアが3日で回復すると言うのはありえない。

なのはですら全快までには一週間ほどを要したのである。

「くっ！」

いますぐ援護を・・・」

しかしシグナムの手元にはもちろん武器たるレヴァンティンは無い。

「はい、これ。」

「これは・・・どこで？」

響が差し出したのはレヴァンティン。

先にレヴァンティンの回収をしておいただけだ。

「行こう。シグナムさん。」

「・・・ああ。恩に着る。それとさん付けはいらん。」

「いや、でもそういう雰囲気じゃないと言っか・・・」

「戦場の仲間に貴賤や上下など無い。必要なく畏まる事など微塵もないのだ。呼び捨てで結構。」

「わかった・・・シグナム。」

シグナムの言葉は信頼の現われであった。

初めての感覚。

初めての暖かさ。

これを守るために動いていると考えると今の状況も悪くないな、と考え始めた響であった。

戦闘民族なのは（前書き）

線の部分が見辛いとちらほら指摘を受けます。

もっぱら確認は i P h o n e なのでそこからだと何も変わらぬ様に見えるのですが・・・Wordで書いてる時と同じく。

どう違うのか、どう打つのか詳しく教えてくださいませ。

戦闘民族なのは

「くそ、あいつら・・・好き放題しやがって。」

「シャル、まだかつ!？」

「・・・無理よ・・・こうまで詰められたら・・・闇の書を使う余裕も・・・っ!？」

ヴィータたちは追い詰められていた。

「ヴィータちゃん、話を聞かせて。」

「話すことなんざ・・・何もねえっ!！」

弾丸を撃ち放つが、それは全てなのはラウンドシールドに防がれる。

なのはは防御型の魔導師。

なのは自身の才能に加えて、魔力ランクC〜Dに過ぎないヴィータには満に一つも傷をつけることは出来ない。

それは他の2人も同じである。

一番の攻撃力を持つヴィータですら不意打ちでもない限り倒せない。これは完全な手詰まりであった。

勇者王——仮面の男の目的は闇の書の完成で、できれば彼女達に加勢したいがこの状況でしたところで結果は目に見えている。

だが、そこに桃色の雷が降り立つ。

シグナムだ。

「シグナムッ!？」

「ヴィータ、まだ元気なようだな。なによりだ。」

管理局の皆はそれぞれが驚く。

そして続く黒い軌跡。

響だ。

重厚な音を発てて、砂漠に降り立った。

「ぶはっ!？」

ぺっぺっ!おいこらッ!誰だがしらねえが砂が舞うんだよっ!!!も
っと大人しくできねえのかっ!!!」

ここは格好いいシーンのはずなのにヴィータに起こられて台無しに
なった。

『ぶくくく。』

「笑わないでくれる?アイシテル。」

「アイシテル?

オマエ、まさか?」

「ああ、鎧変えたまんまだったね。これで――わかるだろ?」

いつもの甲冑に姿を変える響。いや、そこは顔が分かるブリッツフ
ォームだろ?と思わないでもない。

「オマエ・・・どうして・・・」

「・・・。まあしょせん誤解が増えるだけ。そう思うことにした。
いざとなったら世界の果てまで逃げてやる。それに一応の対策もし
てる。」

『見て驚かないでよね?』

ここでユニゾンデバイス。融合騎の特徴を述べておく。
融合騎と魔導師がユニゾンした場合、その姿かたちは相性や融合騎自体の力によって千差万別に変わる。

さらに言つと融合騎の力が強ければ強いほどユニゾン対象に強い影響を与える。

すなわち。

肉体的なチートを持たない響が、神様印の――神が用意したチートデバイスであるアイシテルとユニゾンするともちろんのことアイシテルの方に大きく軍配が上がる。

鎧を取る響。

そこから出た顔はアイシテルよりでアイシテルと響の容姿を付け足したもので、今更であるが身長も幾許か伸びているし、鎧の下では胸も出ていた。

さらには股間にあるべき物がない。

要はアイシテルの人化姿に近づいたのだった。

響の元の肉体の影響が出ているのはせいぜいアイシテルの髪と目の色。銀髪であり、オッドアイであるということだけだ。

これにはモニター越しに見ていたリンディとクロ、エイミイも驚く。てつきり響かと思つたら、別人だったのだ。

デバイスの形や鎧姿から無関係ではないとは思えるが、それだけである。

響は剣を抜く。

ユニゾンすることによって力の増した剣は煌々と輝きを放つ。

光沢が増したような気がした。

「さあ、いくぞ。」

こうして戦闘は始まる。

響の相手は同じくイレギュラーたるプレシアテストロッサだ。

「まさか融合騎とはね。」

「・・・ここまで速攻でバレルとは。」

「私を見くびらないで欲しいわ。」

プレシアはストレージデバイスを構え、早速攻撃を開始する。

「今なら子供のオイタで済ませることが出来るのよ？」

止めておきなさい。覚悟も無しに犯罪者の仲間入りは――っ!？」

「暗黒的なエクスカリバー!!」

「くっ!？」

響が暗黒的なエクスカリバーをふるって、その口を強制的に閉じさせた。

プレシアはデバイスで剣を受ける。

「覚悟はすでにした――と思う。だから余計なお世話だよ、お姉さん。」

「お姉さんね、嬉しいことを言ってくれるじゃない。」

なのはの両親もそうであるし、響の親も含めてそうであるがどうし

てこうも若々しい親御さんが多いのだろうか？
若返りの秘薬が巷で流行しているに違いない。

そのまま響は押し出して、プレシアの態勢を崩し、そのままバインドで締め上げる。つもりだったが、それを瞬時に移動したプレシアに避けられた。

「っ！？」

「仮にも大魔導師。さらに言えば、フェイトに技術を教え込んだのは誰だと思ってるの？今のあの子に出来て私に出来ないことはないわ。」

「ちっ！」

ソニックムーブで響の背後に回ったプレシアが響に向かってその鎌を振り下ろす。

彼女のデバイスは鎌形で、バルディッシュに似ている。

『ぶろてくしょんっ！』

「ただのプロテクションくらいなら・・・カートリッジロードッ！」

『ロードカートリッジ。』

ガシャコンと音を発てて、カートリッジが装填される。

同時に鎌に強力な魔力エネルギーが送り、それが響のプロテクションと反応し、大爆発を起こした。
吹き飛ぶ響。

「ハーケンセイバー！」

飛び来る刃。

それらが響を襲うが、それらを意に介さず切り落とす。
爆発する。

その爆発に紛れてプレシアはさらに追い討ちをかけた。

「プラズマ・・・スマッシュシャツ!!」

雷の波が響に襲い掛かる。

「アイシテル、カートリッジロード。」

『あいさ。』

アイシテルの本体を収納している箆手からカートリッジが飛び出す。
それと同時に魔力が湧き上がった。

「ディザスターブレードツ!!」

剣に纏わり付く黒い魔力が増殖し、巨大な剣となってプラズマスマッシュと激突する。

轟音を発てて、咲き乱れる黒と黄色の火花。
それをゆっくりと見る間もなく。

「これで終わりよ。」

プレシアは背後に回り、剣を振り抜いた響の一瞬の隙を突いて鎌を突き刺そうとする。

非殺傷設定なので急所に当たっても死ぬことは無いが、気絶は免れない。

が、それを腕で止め、なおかつ。

「なっ!？」

プレシアにバインドが撒きつく。

関係ないが肉感が凄い、大人の女性がびつちりと撒きつかれた姿は、それはもうすごいものである。

さらにはプレシアのバリアジャケットはPT事件時のものらしく、やたらと胸が開いてるのでなおのことエロイ。歳を考えているのだろうか？

こんな母親を持ったアリシアとフェイトの苦悩が目に見えるというものである。

いや、アリシアはどうかは判らないが感情の起伏の乏しいーというかあれはあれで変にエロっぽいバリアジャケットを着ているフェイトならばむしろカッコいいと感じるかもしれない。

あの娘にしてこの母ありということだろう。

「ど、どうしてっ!？」

「バインドを設置しておいたただけだ。」

「・・・それは分かっていたわ。でもそれは全て避けて・・・いや、だからこそか。」

「そう。だからこそ避けた先にタイミングよく置けば良いだけ。あんたは確かに地力で言えばどれも俺じゃ勝てなかっただろうけど・・・戦いなれてるかどうかでは俺のほうが上手だ。もともと一撃は受ける覚悟だったから、鎧にも魔力は十二分に通してたし。」

「・・・完敗ね。」

「一番は子供だと侮ったこと。融合騎のことを知ってるあんただからこそ俺を見た目である15前後の子供ではなく、元の9歳児だと判断したんだろうが・・・大間違いだったな。ここ最近戦いが濃密でね。」

「・・・貴方って本当に9歳？」

「・・・まあそう言って良いと思うよ？」

それと・・・アリシアだっけ？彼女の件だけ・・・俺なら完全な形で生き返らせられる。」

「っ！？」

「もし生き返らせなかったら、このことは他言無用。かつ、今回の件からは手を引け。」

響は言うだけ言って去ることにする。

殺すのはまず無理。

彼は正しく一般人なのだから。

「まっーーー」

プレシアの静止の声を無視して今度はシグナムたちの援護へ行く。

『良かったの？能力をあっちがわに明かしちゃって。』

「これで彼女が無効化できれば儲け物だと言ったのはアイシテルだ。今のアリシアは山田君の能力によって生きてる状態だから、山田君から離れられないって。だからその弱みを突くんだろ？」

あの親バカなら多少の制限でもかかってる今の状況を回復するため絶対に乗るはずだってさ。ま、信じればの話だけどね。」

『そうだけどさ。』

「とりあえずはやてを守ることだけを考えよう。後先考えてたらそれだけで動けなくなりそうだ。」

『・・・へたれなのはもう仕方ないことなのかもね。女性関係のへたれよりかはマシだろうし？』

「そこは断言しといてくれ。」

響が向かうと追い詰められてたシグナムたちが見えてきた。

「アイシテル、あの2人は手ごわいよね？」

『もちろん。彼女達が一番の敵だと言ってもいいかも。プレシアとは違って地力の強さじゃなくて才能的な強さがあるわ。これが一番怖い。多分、プレシアと同じような戦術は通用しないでしょうね。』

勘とかそういう曖昧なふざけてるとしか思えない物で避けられない。

『

「さすがにそれは・・・なくね？」

いや、残念なことにアイシテルの言っていることは正しい。

彼女達の恐ろしさはその驚異的なまでの才能にある。

例えば相手が格上でも、その戦いの中で成長して越える。それほどの爆発的な才能が。

さらには勘ももちろん鋭い。

事実にはフェイトはハンデがあるとは言え、当初は防御で精一杯だったシグナムのスピードと剣戟に慣れむしろスピードだけならば大きく上まっている。

そして高町なのはは例え不意打ちでも瞬時に防御する――ただの9歳児とは思えないほどの長年の戦士がようやく体得するような第六感を発揮する。

魔力資質に加えて、そうした戦闘的な資質。

実は戦闘民族の出身だと聞いたほうがまだ納得できるものだ。

「同じ地球人とは思えないな・・・ほんと。」

「フェイトは魔法世界人だけだね。」

ちなみに響も才能はあるほうだ。

ないと言っよりもある。その程度だが。

「でやさっ!!！」

ためしとばかりに剣で斬り付けてみた。
もちろん非殺傷で、なおかつ殆ど力を入れてはいない。
だが。

「はっ？」

確実にヒットしていたタイミングだったはずなのに。
こっちに手を向けてラウンドシールドを傾けていた。
思わず間の抜けた声が漏れ出た。

「貴方は・・・誰？」

ヴィータちゃんの味方？

分かってるの？闇の書は・・・」

「こいつは・・・苦労しそうだ。」

響になのはの声は入らなかった。

それだけ驚いたということである。

ゲームで言うならばありえないタイミングでガードが成功したような物で、正直我が目を疑った。

しかもそれだけの常識はずれのことをしでかしながら本人は余裕。

まさしく戦闘民族だ。

そんなことを思った響である。

戦闘民族なのは2

「さて、どうしようか。」

『モタモタしてたら負けちゃうかもよ?』

「さすがにそれは無いだろう? 経験がある。アイシテルもいる。さらには魔力だって同格だ。負けはないはず。」

『だと・・・いいんだけどね。』

シグナムたちと戦っていたのはに不意打ちをかけたものの見事に防御された。

目の前のことで精一杯だったはずなのだが。

響は剣を構える。

あいかわらずこうして面と向かい合うのは気まずいが、そうも言ってられない。

もちろん向かってくる敵といえど、こっちには負い目がある上に相手は自分よりも精神的な意味での年下の子供。

そんな彼女を傷つけるとは如何なものだろう?

どうにかしてバインドで締めてここは離脱。

出来ればフェイトのリンカーコアを回収。

そんなところだ。

「ねえ、聞いてるの?」

このまま闇の書が復活したら大変なことになるんだよ?」

「・・・うつむ、とりあえずこれはどうよ?」

『デイズターシューター? でもこれじゃ・・・』

「お話の最中に攻撃は・・・ダメだよ!!」

『デイベインシューター。』

響の黒いシューター10発が、なのはが出したディバインシューターに全て穿たれた。
ついと漏れる息。

こつちが先手を打ったにもかかわらず、それにほぼタイムラグ無しで反応する。

関心を通り越して呆れが沸く。

話を見殺して攻撃したせいだ、睨まれる。

少し怯むが、敵意には慣れている。

気にはなるが、無視できるレベルだ。

次は剣を突きの状態に構え、ブリッツムーブで距離を縮める。

「っ!？」

「せいっ!！」

そして眼球目掛けて突き出した。

本当にあてるつもりはない。

これはフェイントで、本命はさらに背後に回ってからバインドだ。寸止めと言つまでもなく、すぐに剣を引くつもりだった。

仮に当てたとしてもバリアジャケットが展開する魔力防壁に阻まれていただろうが。

響の考えでは怯ませるためだった。

眼前に迫ってくる切っ先は玄人でも多少なりとも反応、もしくは硬直する効果的な一撃。

9歳児であり、戦闘経験の少ない彼女ならば確実に大きな隙を作るはず。

だが、またもや響は驚くべきものを目にする。

「ちいっ!？」

全く怯まずに健在のディバインシューターでこちらを打ち抜こうとしたのだ。

それだけではない。

向こうからこっちへ敢えて突っ込んできた。

それもひきつけて避けつつーだ。

「ひきつけ」。

これは戦闘において最も重要且つ、基本でありながらももっとも難易度の高い技術といえる。

敵の攻撃を早くに避けても狙いを修正される。

逆に遅ければ攻撃が直撃する。

これはショート、ミドル、ロングという全距離において基本となる技術。

なぜ難易度が高いかと言うと、大抵の攻撃は初見である。

それでいながら、その攻撃のスピード、威力、範囲、連射性などを瞬時に判断し引き付けるといのは素人目にも難しいこと。

ゆえに難易度が高い。

それを臆せずやりのける目の前の少女に戦慄と共に驚愕する響。

この子誰か憑依してんじゃねっ！？と思ったのも無理はない。

9歳児に出来る芸当ではないはずなのだからして。

が、それをやってのける才能。

それこそがアイシテルの危惧してる部分だ。

「ディバイン・・・バスターアアアアッ!!」

そしてゼロ距離からの砲撃魔法。

響の体がピンクの渦に包まれ、吹き飛ばされた。

「話を聞いてくれないなら・・・力ずくで聞いてもらうからっ!!」

「・・・なんという悪魔か。」

力づくで自分の用件を通す。悪魔だろう。

フェイトの一件といい、なのはちゃんはどうも力に頼る傾向がある。突如手に入った強大な力に飲まれ、調子に乗っている真っ只中だと言えよう。

誰か説教してやれよと思わずには居られない。

ならば俺がしてやろう！と思っでは見たものの、そんなことを言えるような人生を送っている響ではない。

ゆえにやっぱいいや。となった。

いずれ過信は大きなツケとなって我が身に跳ね返るだろうし。

そもそも今は敵なのだ。

悪は倒されるもの。という昔の特撮ヒーローばりの価値観しかないであろう9歳児が悪である敵の説教なんかを真面目に聞くとはいえない。

「アイシテル、ブリッツフォーム。」

『スピードでかく乱？』

「そんなとこだ。」

鎧が剥げ、ヒラヒラとしたファンタジー色の濃いバリアジャケットが展開された。

この状態のときはブリッツムーブというフェイトが使うソニックムーブの上位互換的な魔法を連続で使うことが出来る。

山田君には通用しなかったが、目の前の少女には通用するはず。

空気を裂く音と同時になのはの背後に回りこむ。

そしてバインドがー通った。

「バインドっ!？」

「これで君は動けない。」

響はそのままなのはに背を向けてフェイトとアルフ、クロノとやりあっているシグナム達の援護に入ろうとした。

クロノは先ほどまで出ていなかったが、どうやら苦戦する皆を見て加勢することに決めたようだ。

そんなことをのんびり考えつつ。

まずは手の内が分かっているクロノから捕まえようとしたところ。

「こ、こんなもの・・・やあっ!!」

「は？」

『わお。』

力づくでバインドを引きちぎられる。

え？

怪力少女？

力強すぎませんか？

思わず目が点になった。

そしてなのははレイジングハートを構えて、叫んだ。

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション!!」

ピンクの光がなのはに集まっていく。

響はフリーズしていた。

どうやってバインドを抜け出したの？と。

はつきり言おう。

バインドとは日本で言うところの手錠のようなもの。

元来、力づくでどうこうできるような代物ではない。早々簡単に魔力とか腕力とか、力づくで壊せるようなちんけなものではない。

そんなものが魔法として子々孫々と受け継がれるはずがないのだ。

きっちり当たった以上、捕まえきれたはず。なのにも関わらず三秒ほどでバインドを外す。

ばかなの？あほなの？死ぬの？俺が。

ピンクの光が響の脳裏に死への片道切符売り場へいざなう。

もちろん絶対ではない。

バインドが決まったからといって、必ず捕まえきれるわけではない。並みの術師でもそのまま放っておけば一日もあれば解除できるし、魔力ランクが高かったり技術が高い魔導師ならばより短い時間で解除できる。

ゆえにバインドの上からさらに拘束魔法をかける、もしくはデバイスを奪って武装解除させるのが普通である。

それをしなかったため。と言えば納得できるようだが、納得できない。

ソレ単体でも少なくとも10分、20分は余裕で捕まえきれたはずなのだ。

事実、優秀な魔導師であり研究者でもあるプレシアは今現在もエロイ体を依然バインドに縛られたままである。

それを5秒で。

5秒くらいで拘束を解くなんて、どんだけチートなんだろうか？アイシテル曰く魔力の侵食と計算がうんぬん。非常に難しいけれど出来ないことはないという。

が、それはまさしく人間国宝認定されてもいいほどの高難度技術。少なくとも響には出来ない。ユニゾンした今ならばともかく地力では一生かけても無理そうだ。そういう一線を隔したものなのだ。それをいとも簡単にやってのける。

主人公補正か、それとも本当に誰かが憑依でもしてるのか？

響はまだ後者であってくれ。と願った。

前者は才能という一言で片付けるには理不尽すぎる。

『響っ！！』

「つつ！しまったっ！？」

あまりの理不尽さに色々と思考することに没頭してしまった響。逆に大きな隙が出来てしまった。

ピンクの一閃がこちらへ向かって、絶対的な暴力を振るおうとする。なのはのスターライトブレイカー！。

こうして喰らうのは初めてで、見るのはフェイトの時以来。避けようとしたら、体が動かないことに気づく。

「ば、バインドっ！？」

遠隔バインドなどという高等技術も併せて使ってきた。響はあせる。

これは魔力ダメージでノックダウンされかねない。

「アイシテル、急いでー！」

『分かってるっ！っていうかばーっとしすぎでしょっ！！プロテクションー！！』

体の前面に防御魔法のプロテクションが張られる。

続いて爆音。

「や、やった？」

『手ごたえはありました。』

なのはとレイジングハートがスターライトブレイカーを当てたことで勝ちを半ば確信する。
が、それは悪手だ。

「やったはやってない時のフラグになる。やめといた方がいいよ。」
「っ！？」

背後に回る響。

瞬時に体を反転。ラウンドシールドを展開するという、もうバカらしいほどの超反応を示すのはだが響は構わずにカートリッジを使ったバインドで強く締め上げる。

ラウンドシールドの周りに巻きつくバインド。

なのはがその力に苦悶の表情を浮かべる。

そこにさらに二重三重四重五重とバインドを重ねていく。

あまりの力にラウンドシールドの維持が困難になり、ラウンドシールドが消える。と、同時。

なのはの体に勢い良く食い込むバインドの数々。

もちろん消えた瞬間にバインドの力を弱めるように制御して今は程よい力でなのはを拘束していた。

さらに二重三重と合計8回分のバインドを使ってなのはを封殺する響であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1936z/>

とあるチートを持って！

2012年1月4日12時21分発行